

博士論文

中国語の感覚形容詞に関する認知言語学的研究

—日本語との比較を通して—

令和3年3月

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

張曉琳

要旨

中国語の感覚形容詞については、以下のような制約が見られる。

- ① 中国語の複音節形容詞はメタファー的に使うことが可能であるが、単音節形容詞は、慣用表現などの例外を除き、メタファー表現としては容認されない。これは、先行研究では、音節的な制約であるとされており、単音節形容詞をメタファー的に使用する場合には単音節語と組み合わせる必要があるとされている。しかしながら、これに関しては多くの反例が存在する。
- ② 日本語の擬態語は音によって直接にイメージが喚起されるのに対し、中国語では、音によってイメージが喚起されにくい。そのため、中国語の場合は、表現する感覚領域を表す形容詞が擬態語に伴われる必要がある。
- ③ 日本語には、例えば、「熱っ！」のように話し手が思わず感覚を表出する際に、形容詞語幹だけで構成される一語文（＝形容詞語幹構文）を用いることがある。それに対して、中国語においては、感動詞を除き、形容詞が日本語と同じ条件で単独で一語文になることはない。

本研究では、まず、制約①について、中国語の単音節感覚形容詞は基本レベルカテゴリーを表すのに対し、複音節感覚形容詞はその下位レベルカテゴリーを表すと提案したうえで、前者では把握時間が全く喚起されないのに対し、後者では把握時間がベースとして喚起されると主張する。そして、創造的なメタファー表現においては把握時間を伴った事態を喚起する必要があるため、把握時間が喚起されない単音節感覚形容詞はメタファーとして用いることには適さないと提案する。

次に、制約②については、中国語の擬態語を用いる場合は、認知領域を確定するために形容詞による認知領域の喚起を行う必要があると主張したい。その際、中国語の感覚形容詞を属性形容詞、状態形容詞、擬態形容詞に分類し、中国語の擬態形容詞は時間的

安定性に関して日本語の擬態語とは根本的に異なっていることを主張する。

最後に、制約③については、(間)主観性が深く関わっている。日本語の形容詞語幹構文と中国語の感動詞文は、話し手が突然刺激などを受けた場合に、話し手の主観をあたかも聞き手が存在しないかのように表出する、つまり独り言として表出する文であると考えられるが、中国語の単音節形容詞一語文は、聞き手に何かを訴える、つまり、聞き手の存在を強く意識する対峙型の間主観を表していると考えられるため、日本語形容詞語幹構文のような瞬時に発せられる独り言とは性質が異なる。ただし、中国語の複音節形容詞一語文は相手と感覚を共有している同化型間主観であると考えられるため、日本語の形容詞語幹構文のように独り言として用いることができる。

目次

第1章	序論.....	1
1.1.	はじめに	1
1.2.	研究対象	3
1.3.	論文の構成.....	5
第2章	理論的背景と形容詞に関する先行研究.....	6
2.1	本研究の理論的背景	6
2.1.1	認知言語学的アプローチ	6
2.1.2	基本的道具立て	8
2.1.3	主体性.....	12
2.1.4	主体化.....	17
2.1.5	時間.....	24
2.1.6	身体性.....	28
2.1.7	比喩.....	31
2.2	日本語の形容詞に関する先行研究	33
2.2.1	西尾(1972).....	34
2.2.2	八亀(2008).....	37
2.3	中国語の形容詞に関する先行研究	43
2.3.1	朱德熙(1956)	44
2.3.2	张国宪(2006a, 2006b).....	54
2.3.3	中国語の形容詞に関する品詞論	64
第3章	感覚形容詞のカテゴリー階層構造と時間把握	69

3.1 問題提起.....	69
3.2 中国語の形容詞の使用制限に関する先行研究と問題点	71
3.2.1 形容詞の分類.....	72
3.2.2 連体修飾と連用修飾.....	73
3.2.3 述語構文.....	75
3.2.4 音節制限の問題.....	77
3.2.5 問題点の整理.....	80
3.3 提案.....	81
3.3.1 中国語感覚形容詞の分類とカテゴリー階層	81
3.3.2 感覚形容詞のプロトタイプ	85
3.3.3 感覚形容詞にみられる身体経験	87
3.3.4 把握時間.....	90
3.3.5 対比と変化の文脈.....	101
3.3.6 日本語の形容詞との対照	108
3.3.7 慣習性と創造性.....	110
3.4 まとめ.....	112
第4章 感覚範疇における擬態形容詞	113
4.1 問題提起.....	113
4.2 擬態語に関する先行研究	115
4.2.1 日本語の擬態語に関する研究	115
4.2.2 中国語の擬態語に関する研究	118
4.2.3 擬態語に関する日中対照研究	122
4.2.4 まとめ.....	123
4.3 考察.....	123

4.3.1	カテゴリー階層構造	123
4.3.2	中国語感覚形容詞の再分類	129
4.3.3	状態形容詞と擬態形容詞	131
4.3.4	属性形容詞と擬態形容詞	134
4.3.5	時間的安定性	138
4.3.6	擬態形容詞の評価性	150
4.3.7	重ね型擬態形容詞の新語	153
4.4	まとめ	157
第 5 章	形容詞一語文の間主観性	158
5.1	問題提起	158
5.2	形容詞語幹構文に関する先行研究	161
5.2.1	日本語の形容詞語幹構文	161
5.2.2	日本語の形容詞語幹構文に対応する中国語の表現	164
5.3	考察	165
5.3.1	公的表現行為と私的表現行為	165
5.3.2	主体・主観・間主観	170
5.4	まとめ	183
第 6 章	結論と今後の展望	184
6.1	本研究のまとめ	184
6.2	本研究の独自性	186
6.3	今後の展望	187
補足資料	189
参考文献	193
謝辞	201

図表リスト

図 2.1	プロファイル (Langacker2008:67).....	9
図 2.2	主体性 (Langacker 2008:260).....	13
図 2.3	視座 (Langacker 2008:77).....	15
図 2.4	グラウンディング (Langacker 2008:261)	16
図 2.5	(6a)の図式化 (Langacker1990a:327).....	18
図 2.6	(6b)の図式化 (Langacker1990a:327).....	19
図 2.7	(8a)の図式化 (Langacker1990a:327 一部改).....	21
図 2.8	(8b)の図式化 (Langacker1990a:327).....	21
図 2.9	把握時間 t と処理時間 T (Langacker 2008:80).....	27
図 2.10	人に関する属性形容詞 (西尾 1972:129)	35
図 2.11	時間的限定性と評価を軸とする形容詞分類 (八亀 2008:40)	38
図 2.12	属性形容詞のイメージ (张国宪 2006b:9)	59
図 2.13	状態形容詞のイメージ (张国宪 2006b:9)	59
図 2.14	変化形容詞のイメージ (张国宪 2006b:9)	59
図 2.15	有界量値と非有界量値 (张国宪 2006b:142;筆者訳)	61
図 2.16	“紅 (赤い) ”の集合	61
図 2.17	程度副詞+“紅 (赤い) ”.....	62
図 2.18	形容詞の形式と意味の対応 (张国宪 2006b:142; 筆者訳)	62
図 2.19	<i>yellow</i> の図式化 (Langacker 2008:102 一部改).....	67
図 3.1	中国語の五感のカテゴリー階層構造.....	83
図 3.2	“冷水 (冷たい水) ” の合成構造.....	90
図 3.3	“冰冷的水 (氷のように冷たい水) ” の合成構造	91
図 3.4	“*荔枝甜 (レイシは甘い) 。 ” の合成構造	94

図 3.5	“荔枝是甜的（レイシは甘い）。” の合成構造	95
図 3.6	“荔枝甜甜的（レイシは甘い）” の合成構造	96
図 3.7	対比のメンタル・スキニング	102
図 3.8	“冷了（冷たくなった）” の図式化	104
図 3.9	基本レベルカテゴリー「冷たい ¹ 」	109
図 3.10	下位レベルカテゴリー「冷たい ² 」	109
図 3.11	意味の変容のプロセス（山梨 2000:209）	110
図 4.1	擬態語の形式と意味の対応関係（山梨 2000:245）	116
図 4.2	中国語の五感のカテゴリー階層構造（図 3.1 一部改）	124
図 4.3	ABB 型の合成構造	127
図 4.4	AA 型の合成構造	128
図 4.5	The scale of temporal stability （Givón 2001: 54）	138
図 4.6	日本語における時間的安定性のスケール	139
図 4.7	日本語の「冷たい」のカテゴリー階層構造	140
図 4.8	中国語における時間的安定性のスケール	141
図 4.9	中国語の“干净”のカテゴリー階層構造	151
図 4.10	融合ネットワークモデル（山梨 2009:147）	155
図 4.11	ABAB 型の新語の融合ネットワークモデル	156
図 5.1	「寒い！」の図式化（中村 2016:45）	171
図 5.2	「寒い！」「さむっ！」の図式化	171
図 5.3	「寒い（よ）。」の図式化（平岩 2019:5）	172
図 5.4	主体化の図式化（王・上原 2019: 19）	174
図 5.5	間主観性の類型（町田 2020:251）	178
図 5.6	感覚形容詞一語文の類型	179

表 1.1	経験のドメイン（山梨 2000:120）	4
表 3.1	中国語感覚形容詞の分類	84
表 3.2	“冷”の下位レベルカテゴリー形容詞の用例数とメタファー率.....	86
表 4.1	中国語における感覚形容詞の再分類.....	130
表 4.2	“冷冷” “冷冰冰” “冰冷”の成分別用例数	146

本研究における略称一覧

1. 例文の文頭にある記号

“?” 文法的にやや不自然, あるいは, その文脈ではやや不自然

“#” 文法的に適格であるが, その文脈では不自然

“*” 文法的に許容できない

2. グロスの略号

1SG	1st person singular
2SG	2nd person singular
3SG	3rd person singular
3PL	3rd person plural
PL	plural
AUX	auxiliary
CLF	classifier
COP	copula
GEN	genitive particle
NEG	negative
PFV	perfective
PRTCS	particle, change of state
SFP	sentence final particle
SFP.Q	sentence final particle question
OTP	onomatopoeia
PCT	present continuous tense
PREP	preposition

第1章 序論

1.1. はじめに

中国語の形容詞は、名詞として使われたり動詞として使われたりするなど興味深い特徴を示すため、これまで数多くの研究がなされてきた¹。それらの研究は、基本的に、形容詞がどのように使われるか、または、どのようなことを表しているかといった形容詞の語法に関する記述および分類を行なったものである (cf. 呂叔湘 1953, 朱德熙 1956 など)。そのため、これらの先行研究は記述のレベルに止まっていた。

それに対し、本研究では、中国語の一部の感覚形容詞の使用制限に関する認知的動機づけ、すなわち、なぜある条件下では容認され、また別の条件下では容認されないのかという問いに対して認知言語学の立場から説明を与えることを目的とする。そこでまず、本研究で取り上げる形容詞に関する制約を大まかに概観しておく。(1)を見てほしい。

- (1) a. 彼は外見が冷たい。
b. * 他 的 外表 看起来 冷。
3SG GEN exterior look as cold
c. 他 的 外表 看起来 冷冰冰 的。
3SG GEN exterior look as cold-ice-ice AUX

「冷たい」という述語がメタファー的に使われている日本語の例(1a)をそのまま中国語に直した場合、(1b)の単音節形容詞“冷 (冷たい)”のように容認されないが、近似する意味を表す複音節形容詞“冷冰冰 (冷やか)”を用いるのであれば、(1c)に示すようにメタファー表現として容認されるようになる。

¹ 中国語形容詞の品詞論に関して、2.3.3 節を参照。

このように、中国語でメタファーを用いて感覚を表す際には、何らかの制約があると考えられる。この現象に関しては、第3章で詳しく検討する。

また、下の(2)に示すように、(2a)の日本語の擬態語「ほかほか」は音象徴的に「熱い」という感覚的なイメージを喚起できるが、中国語では、(2b)のように、“乎乎”や“腾腾”などの音象徴的な表現だけを用いた場合は容認されない。興味深いのは、(2c)に示すように、“乎乎”や“腾腾”の前に形容詞“热（熱い）”などを付加することにより容認されるようになることである。

- (2) a. ふかしたてでほかほかのまんじゅう。
b. 刚 蒸 好 的 *乎乎 / *腾腾 的 馒头。
just steam done AUX OTP(huhu) / OTP(tengteng) AUX steamed bread
c. 刚 蒸 好 的 热乎乎 / 热 腾腾 的 馒头。
just steam done AUX hot-OTP(huhu) / hot-OTP(tengteng) AUX steamed bread

このように、中国語では、擬態語を用いて感覚を表現する場合には必ず感覚形容詞を伴う必要がある。この現象に関しては、第4章で詳しく検討する。

最後に、(3)を見てほしい。日本語では、(3a)に示すように、話し手が辛いものを食べたときに、思わず「からっ。」と言ってしまうことがある。一見すると、極めて自然な現象であるように思われるかもしれないが、中国語では、類似する短縮表現は容認されない。(3b)と(3c)に示すように単音節、複音節、どちらの形容詞も容認されないのである²。そして、このような現象に関しては、第5章で詳しく検討する。

² (3c)において“的”があるのは、そもそも、このような単音節形容詞の重ね型は単独で用いることができないため、具体的な意味を持たない“的”などを伴わなければ、それだけで容認されない表現となってしまうからである（朱德熙 1961:265）。

- (3) a. (とても辛いカレーを食べて) からっ。 (富樫 2006:165)
- b. (とても辛いカレーを食べて) * 辣。(辛い。)
- hot
- c. (とても辛いカレーを食べて) * 辣辣 的。(ピリピリと辛い。)
- hot-hot AUX

本研究では、主に以上の中国語の特徴について、日本語の感覚形容詞との比較を通して考察する。その際、認知言語学の理論を援用することによって、このような中国語感覚形容詞の特徴の背後にある認知メカニズムを明らかにする。

1.2. 研究対象

1.1 節で紹介したように、本研究で取り扱う現象は、「感覚」を表す中国語の形容詞である。しかしながら、この「感覚」という知覚現象は多彩な現象であるため、どこまでを感覚形容詞に含めるのかという定義の問題が生じてしまう。そこで、ここでは「感覚」とは何かという問題に関する先行研究に触れたうえで、本研究の研究対象を明確にしておきたい。

ギブソンによれば、「感覚」は、外受容器（五感をつかさどる器官）、内受容器（内臓感覚に関連する器官）、自己受容器（運動感覚および平衡感覚を担当する器官）に分類される（Gibson1966, 佐々木他訳 2011:53）。また、認知言語学との関連では、山梨 (2000:120)が外界との相互作用にかかわる主体の経験のドメインを表 1.1 のように整理している。

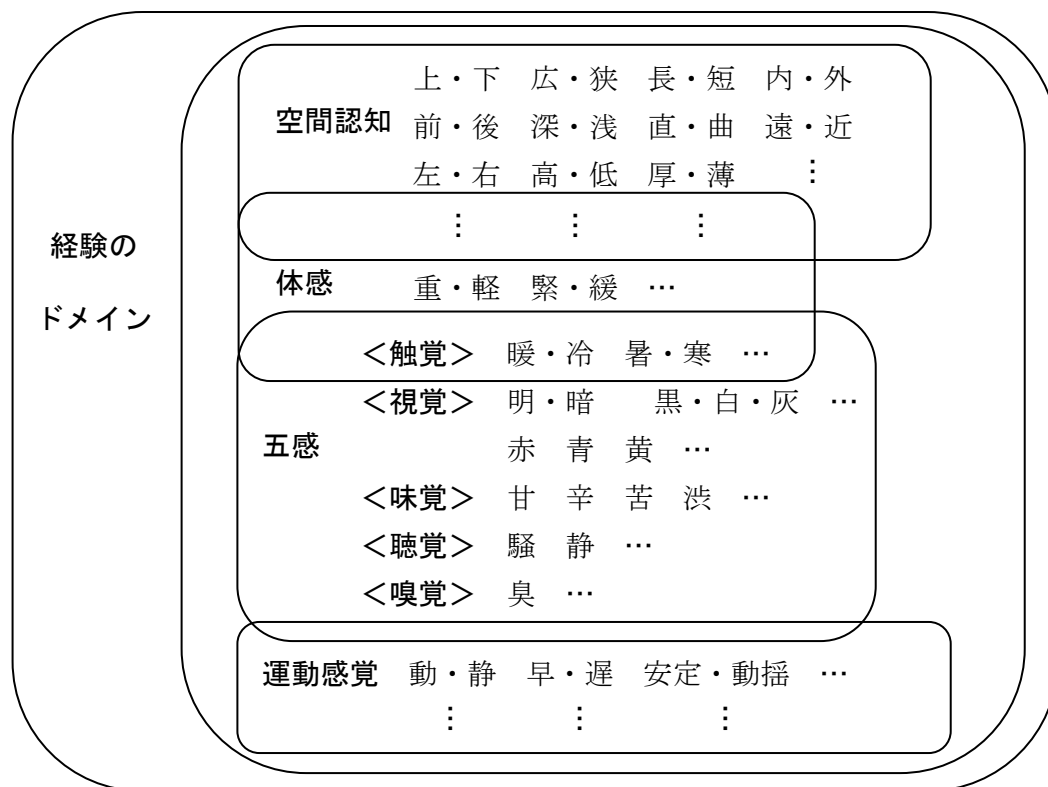


表 1.1 経験のドメイン（山梨 2000:120）

表 1.1 によると、人間の「経験」は、空間認知、体感、五感、運動感覚に関わるドメインとその下位に分類される。この区分は相互に部分的に重なり合っており、例えば、体感に関わる経験の一部は、五感に関わるドメインの中の触覚経験の一部でもある。

本研究では、ギブソン(1966)の言う「外受容器」、または、山梨(2000)の言う「五感」に関係する知覚を表す形容詞を「感覚形容詞」と定め、考察することとする。もちろん、「知覚」は様々な感覚と連動しているため、状況によっては、ギブソン(1966)の言う「内受容器」や「自己受容器」、山梨(2000)の言う「体感」「空間認知」「運動感覚」との関連性を無視することはできないが、少なくとも、“高兴（嬉しい）”、“悲伤（悲しい）”などの感情に関する形容詞は「感覚形容詞」に含めないこととする。これは、議論が煩雑になるのを避けるためである。

1.3. 論文の構成

本研究の構成は以下の通りである。第1章の序論において問題提起を行った後、第2章では、本研究が依拠している認知言語学の理論背景、分析に用いる認知言語学の用語、および、中国語と日本語の形容詞に関わる主な先行研究を紹介する。第3章以降の議論はすべてこの第2章で紹介される内容が前提となっている。第3章では、“冷”と“冷冰冰”を例にとり中国語の感覚形容詞のメタファー用法に見られる制約について論じ、“冷”のような形容詞がメタファー表現として使われる際に制約が生じるのは、この形容詞が基本レベルカテゴリーを表す形容詞であるためであると提案する。さらに、メタファー的な意味を表すことができる感覚形容詞を取りあげ、中国語の下位レベルカテゴリーを表す感覚形容詞は、把握時間がベースとして喚起されているため、メタファー的に用いることができると主張する。次いで、第4章では、中国語の感覚に関わる擬態形容詞の分析を行う。そこでは、日本語の擬態語は音によって直接に身体的なイメージが喚起されるのに対し、中国語の場合では、音によってイメージが喚起されにくく、形容詞による認知領域の喚起が必要となると主張する。その際、中国語の感覚形容詞の分類として、従来の属性形容詞、状態形容詞に加え、擬態形容詞を新たに立てることを提案する。さらに、第5章では、中国語における形容詞一語文の間主観性について、日本語形容詞語幹構文との比較を通して検討する。そこで、中国語の単音節形容詞一語文は対峙型の間主観性を示すのに対し、複音節形容詞一語文は同化型の間主観性にに基づいていることを提案する。最後、第6章は、本研究のまとめと今後の展望である。

第2章 理論的背景と形容詞に関する先行研究

2.1 本研究の理論的背景

2.1.1 認知言語学的アプローチ

本研究が依拠する認知言語学(Cognitive Linguistics)は、1950年代以来、理論言語学の一大潮流をなしている生成文法(Generative Grammar)に対峙する形で1980年代に出現した理論的共同体である。もちろん、一口に認知言語学と言っても様々な立場が混在するが、「言語知識は他の知識や能力と密接不可分の関係にあり、前者の本質は後者との関連を考慮して初めて十分に解明されうる」(西村・長谷川 2018:2)という言語観を共有する言語学者による研究プログラムであると特徴づけることができる。この引用で示された「他の知識や能力」のうちの特に「能力」に関しては、ここでは、言語能力以外の認知的な能力、すなわち、認知能力のことを指している。認知能力とは、辻(2013)によると「知覚・記憶・思考・学習・類推・連想・比喩・カテゴリー化、イメージ形成などの心理作用や、感情などの生理的作用に関する能力のほか、身体的運動感覚を含む、人間が内在的に持つ能力の総体」(辻 2013:281)のことである。

それでは、認知言語学において、どのようにして認知能力から言語知識を解明しようとしているのか、カテゴリー化(categorization)という人間の認知メカニズムに深く関わる具体例を見ながら説明する(cf. Lakoff 1987)。例えば、人間は絶えず身の回りの事物を分類し整理することによって理解しようとしている。この認知的な作業はカテゴリー化と呼ばれ、「犬」「トカゲ」などの具体的で身近なカテゴリーから「哺乳類」「爬虫類」などのより抽象的なカテゴリー、さらに抽象度が増せば「動物」「生物」など、様々な目的に応じてカテゴリー化を行っている。重要なことは、カテゴリー化は、「最も憶え

やすい事例が属するレベルであり（犬，猫，花，机，星，雨，風），多くは短い単語で，子どもの頃から親しんだもの，日常会話で頻用される基本レベルカテゴリー(basic level category)」（辻 2013:63）を基準とし，これより詳述性の高い「秋田犬」「チワワ」などのレベルは下位レベルカテゴリー(lower level category)，「哺乳類」などのより抽象的で包括的なレベルは上位レベルカテゴリー(higher level category)に分けられていることである³。また，カテゴリーの内部構造はプロトタイプ効果(prototype effect)を示し，カテゴリー同士の境界は多くの場合不安定でゆらいでいることも知られている (cf. 辻 2013:40)。実際，Rosch (1973)の研究では，通常，カテゴリーはプロトタイプと呼ばれるカテゴリーの典型的な成員を中心に，そこから徐々に非典型的な成員に分散していることが示されている。例えば，*bird* というカテゴリー内においても，鳥らしい鳥と鳥らしさに劣る鳥がいること実験で明らかにされている。そして，この鳥らしい鳥（アメリカでは *robin*）が *bird* カテゴリーの中心となり，飛ばないダチョウのような鳥は，カテゴリーの成員としては周辺に位置づけられるとしている。また，Labov (1973)の *cup* に関する実験により，多くの場合，あるカテゴリーと隣接するカテゴリーの境界線はゆらいでいることが明らかにされている。わかりやすい例としては色彩カテゴリーがある。「赤」や「ピンク」，「白」などの色彩カテゴリーは連続的なスペクトル上にあるため明確な境界線を定めることは不可能である。しかも，仮に境界線を設けたとしても，その境界線は絶対的なものではなく，状況によってカテゴリー判断が容易に変更されうることが知られている。

これまで，認知言語学以外の学派では上述のようなカテゴリー化の問題は，通常，心理学で検討される問題であって，言語学とは無関係であると考えられてきた。しかしながら，認知言語学においては，上述の通り言語以外の一般的な知識や能力が言語に密接

³ カテゴリーのレベルに関しては 3.3.1 節で再び論じる。

に関わっていると考えるため、「名詞」「動詞」のような品詞や「主語」「目的語」のような統語カテゴリーはもちろんのこと、「受動文」「中間構文」のような構文に至っても、一般的なカテゴリーと同様にプロトタイプ、ファジー境界の観点から検討されている。そのため、例えば、「名詞」や「主語」といったカテゴリーの特徴に関して唯一絶対的な必要十分条件で規定するのではなく、名詞らしさや主語らしさを生み出すような、程度差を認めることになる。これは厳密な定義に基づく厳密な研究を目指す言語学にとって大変不都合なことになるが、心理的な実在性を重視する認知言語学者にとっては、優先して理論に取り入れるべき知見ということになる。

2.1.2 基本的道具立て

ここでは、2.1.1 節で紹介した認知言語学のアプローチで用いられる基本的な道具立ての中から、特に、本研究の分析に用いられるものを中心に紹介する。

一般に、認知言語学では、言語表現の「意味」は認知主体である話し手(speaker)が行う概念化(conceptualization)であると規定され、その上で、概念化とは、概念内容(conceptual content)に認知主体の捉え方(construal)が加えられたものと規定されている⁴。

「捉え方」とは、認知主体がある状況に対して与えた見方や解釈のことを表す術語であり、この捉え方が言語表現の意味に深く関わっているという観察は認知言語学の理論の根幹をなす。例えば、コップに水が半分入った状況を *The glass is half full.* と言っても、*The glass is half empty.* と言ってもよいが、この2つの言語表現には、同じ状況に対する

⁴ 一般的には「意味」＝「概念 (concept)」とみなされることが多いが、「概念」という語が持つ静的なニュアンスを避けるため、認知言語学では「概念化」という用語を用いている。また、認知の主体である話し手・聞き手は、概念化を行う者という意味で必要に応じて概念化者(conceptualizer)と呼ばれる。

認知主体の捉え方の差異が反映されており、この捉え方を含んだものが言語表現の意味ということになる。

異なった捉え方の最も一般的な例は、認知主体が同じ概念内容の異なった部分に認知的な際立ち(cognitive prominence)を与える場合である。例えば、認知言語学では、言語表現が直接指示している部分をプロファイル(profile)と呼び、プロファイルの前提となる概念内容をベース(base)と呼んで区別しているが、*hub*, *spoke*, *rim*, *wheel* などの語の意味の共通点と差異は、同じ概念内容がベースとして共有される一方で、異なった部分にプロファイルが当てられていると説明される。図 2.1 では、細線で共通のベースを表し、太線でプロファイルを表している。このように、これらの語の意味の差異は認知的な際立ちを与えられた部分であるプロファイルの差異として説明される。ちなみに、図 2.1 (d)には細線部分がないので *wheel* はベースを持たないように見えるかもしれないが、この場合はベースとプロファイルが一致していると考ええる。

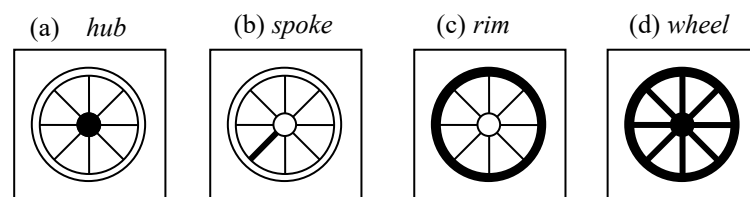


図 2.1 プロファイル (Langacker2008:67)

認知言語学では、このような主張をさらに推し進めて、いわゆる文法現象として扱われてきた表現上の差異に関しても、同一の概念内容に対する捉え方の差異として分析する。例えば、これまで意味的には規定できないとされてきた品詞についても、捉え方の観点から規定できると考える。仮に、下の(1)の2つの表現は同じ状況を表しているとしてよう。

- (1) a. Something exploded last night.
b. There was an explosion last night.

Langacker(1990a)で詳しく議論されているように、従来の考え方では、*explode* (動詞), *explosion* (名詞) という異なる品詞で同じ概念を表現することが可能であるということ を根拠として、品詞を意味的に規定することは不可能であると結論付けてきた。しかしながら、このように、品詞は意味からは規定できないと考えるのは、我々の持っている直感に反する。実際、言語学を専攻しない人々にとっては、動詞が動作や出来事を表し、名詞がモノを表すのは自明のことであり、品詞は意味から規定できると考えるのが普通であろう。

実は、品詞が意味からは規定できないと考えるのは、(1)の両文に共通する概念内容だけに着目したために起こる誤謬である。認知言語学では、意味は概念内容に捉え方を加えたものであるため、(1a)の *explode* はある種の化学反応をプロセス(process)としてプロファイルした表現であり、(1b)の *explosion* は同じ化学反応をモノ(thing)としてプロファイルした表現であると考えることができる。そして、認知言語学では、動詞は事物をプロセスとしてプロファイルしたものであり、名詞は事物をモノとしてプロファイルしたものであると規定する。このように考えると、品詞を決定するのは概念内容それ自体ではなく、概念内容をどのような事柄として捉えるか(=プロファイルするか) という捉え方の問題ということになる⁵。

さらに、認知言語学では、態の交替現象のような文法現象も捉え方の問題として扱うことになる。例えば、(2)のような能動文と受動文の関係は、従来、純粋な統語操作の派

⁵ ここでいう「プロセス」と「モノ」は術語として用いられている。「モノ」は具体的な物体だけでなく、抽象的な概念としてのモノも含んだ概念である。また、「プロセス」に関しては、2.1.4 節で再度取り上げ、品詞論に関しては、2.3.3 節で再度取り上げる。

生関係で了解されることが多いが、認知言語学では、図と地の反転(*figure-ground reversal*)のような、認知上の注意の焦点の転換として捉えられている。

- (2) a. 先生が太郎をほめた。
- b. 太郎は先生にほめられた。

一般に、認知言語学では、二つの実体(*entity*)の関係(*relation*)がプロファイルされている場合、最も高い認知的際立ちが与えられている実体 (=第一焦点要素(*primary figure*)) をトラジェクター(*trajector*)と呼び、二番目に高い際立ちが与えられている実体 (=第二焦点要素(*secondary figure*)) をランドマーク(*landmark*)と呼ぶ。そして、この規定に従うと、いわゆる「主語」とは節レベルの第一焦点要素つまりトラジェクターであり、「目的語」は節レベルの第二焦点要素つまりランドマークであるということになる。そして、(2b)のような受動態は、何らかの理由で被動作主である「太郎」に認知的際立ちが与えられたために、「太郎」がトラジェクターとしてプロファイルされたために主語として表現されていると考える。このように、認知言語学では、「態」や「主語」などの文法概念も捉え方の観点から規定されるのである。

最後に、もう一つ、捉え方に関して興味深い事例を紹介する。(3)はともに手首と肘の間にある傷跡について描写した文である。もちろん、同じ状況を表しているという理由で(3a)と(3b)が同じ意味を表していると言うことはできないが、これらの表現にも認知主体の捉え方が深くかかわっている。

- (3) a. An ugly scar extends from his wrist to his elbow.
- b. An ugly scar extends from his elbow to his wrist.

(Langacker 2008:88)

まず注目すべきは、(3)では、「傷跡(scar)」が「伸びている(extend)」と表現しているが、もちろん、文字通り傷跡が伸びるという出来事を表したものではない。本来、「傷跡がある」という静的な概念内容を「伸びる」という動的な出来事として表している点で、(3)には認知主体の事態の捉え方が色濃く反映されている。そして、このような捉え方を可能にするのが、心的走査またはメンタル・スキャニング(mental scanning)という認知操作である。人間が物体の移動を認識するためには、その物体の追跡を行う必要がある。そして、この追跡するための認知操作が物体の形状を認識する際にも用いられる。このような認知操作をメンタル・スキャニングと呼ぶ。(3)に *extend* という動詞が用いられているのは、長い形状をした「傷跡」を認識するために、このメンタル・スキャニングを用いたからである。言い換えると、認知主体が「傷跡」がまるで伸びていった結果であるかのように捉えたことが *extend* という動詞を用いたことにつながっているのである。これは、静的な事態を動的に捉えているという捉え方の問題である。

また、(3)の両文に反映されている認知主体のメンタル・スキャニングは、方向性が異なっている。(3a)は「手首」から「肘」へのメンタル・スキャニングであり、(3b)は「肘」から「手首」へのメンタル・スキャニングである。

本節では、捉え方の問題を軸に、本研究で用いる認知言語学の基本概念を紹介した。続く4つの節では、具体的な分析に移る前に本研究にとって関連性の高い認知言語学の基本概念を紹介しておく。

2.1.3 主体性

前節では、認知主体が世界をどのように捉えるかが言語表現の意味に深くかかわっているという認知言語学の主張を紹介した。本節では、このような「捉え方」に関する議

論の延長として、第 4 章の議論に深く関わることになる認知主体(subject)と認知客体(object)との関係に関わる主体性（主観性）の問題について検討する。

主体性(subjectivity)と呼ばれる認知の主体と認知の客体（対象）の関係について、Langacker (2008)は、劇場のメタファーを用いて説明している⁶。劇場では、通常、観客はステージの下におり、ステージの下からステージ上の役者に注意を向けている。その際、観客から意識されるのは役者のいるステージの中だけであり、観客は自分自身のことをほとんど意識することはない。これを認知主体が事態を把握し概念化を行っている状況に重ねてみると、観客が概念化の主体（認知主体）であり、観察される対象は概念化の客体（認知客体）であることになる(cf. Langacker 2008:100)。そして、図 2.2 はこれを図示したものである。

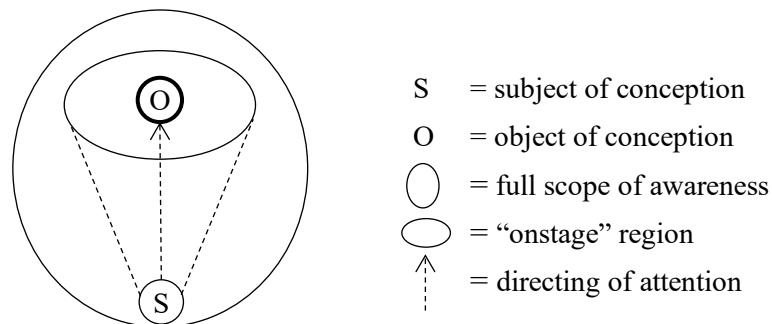


図 2.2 主体性 (Langacker 2008:260)

図 2.2 は、概念化の主体 S がステージの上の領域であるオンステージ OS に意識を向けている状況を表している。最も外側の円は意識化が可能な最大の範囲を表し、OS 上にある概念化の客体 O に向けられた破線矢印は主体 S が客体 O に注意を向けていること、

⁶ Subjectivity という用語は、「主体性」と訳される場合と「主観性」と訳される場合がある。ここで議論されているように、主体と客体との関係を述べる場合には「主体性」と訳されるが、事態把握の客観性について述べられる場合には客観性に対して「主観性」と訳されるべきである。

つまり、客体 O が注意の焦点となっていることを表している。この図で注意しなければならないのは、主体 S はそれ自身知覚の対象とはなっていないことである。そのため、通常、主体 S は自身の存在を自覚しない。このような状況において、主体 S は主体的に把握(subjectively construed)されていると言い、客体 O は客体的に把握(objectively construed)されていると言う(cf. Langacker 2008:260)⁷。

また、主体性との関連で言語表現の意味を考察する際に、グラウンド(ground)という概念も理解しておく必要がある。Langacker (2008)は、グラウンドという用語を、話し手と聞き手、彼らが行っている発話事態(speech event)、その発話事態の生じた時間や場所などの現場の状況の総称と規定したうえで、グラウンドについて、以下のように述べている。

- (4) As the “platform” for apprehending the content evoked, the ground enters into the meaning of every expression, even when construed with maximal subjectivity. (Langacker 2008:78) (喚起される概念内容を理解するための「概念基盤」として、グラウンドは最も主観的に解釈される場合においても、すべての言語表現の意味に含まれている。)(山梨監訳 2011:102)

例えば、(5)の *next year* は、図 2.3 に示すような時間軸上に繰り返し現れる年の概念を概念基盤として喚起し、その中で、概念化者が時間軸上においている視座(vantage point)を含む年の後に続く年をプロファイルする。そのため、この表現の解釈には、視座がどこにあるのかを確定する必要があるが、(5)の場合は、その視座はグラウンドにあるため、

⁷ より分かりやすく表現すると、*subjectively construed* とは認知主体によって「主体として了解されている」ということであり、*objectively construed* とは「客体として了解されている」ということである。

グラウンドの一部の発話時が非明示的な参照点となって機能している(cf. Langacker 2008:76-78)。

- (5) Next year will be full of surprises. (Langacker 2008:76)

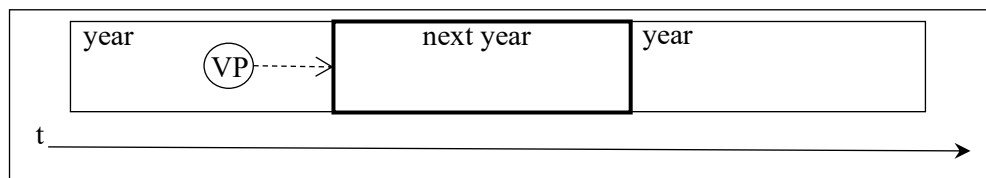


図 2.3 視座 (Langacker 2008:77)

このように、表現の意味にはグラウンドが不可欠に関わっており、実際に表現が使われる際には、必ずグラウンドと結び付けられなければならない。そして、このようにグラウンドと結び付ける認知的操作を Langacker はグラウンディング(grounding)と呼ぶ。その上で、Langacker (2008:259)は、英語の場合は、グラウンディングを行う要素が存在し、以下に示すようなグラウンディング要素(grounding element)が実際の発話には不可欠であると述べている。例えば、名詞類(nominals)に関わるグラウンディング要素には、*the, this, that, some, a, each, every, no, any* などがあるが、話し手が聞き手の注意を指示対象へ向けさせるためにこれらは必ず用いられなければならない。実際の会話では、名詞 *boy* は裸のまま用いることができず、必ず、*the boy* や *a boy* のように冠詞などを必要とするのはこのためである。英語では、名詞類と同様に、節にもグラウンディングが必要である。Langacker は、*-s, -ed, may, will, should* などが節のグラウンディングに関わるグラウンディング要素であるとしており、これらの要素によって話し手の発話時点と描写する事態や出来事などの関係を明らかにする必要がある(cf. Langacker 2008:259)。

主体性の説明のところで示した先ほどの図 2.2 をこのグラウンディングの関係が明ら

かにしながら，より精緻化すると図 2.4 のようになる。

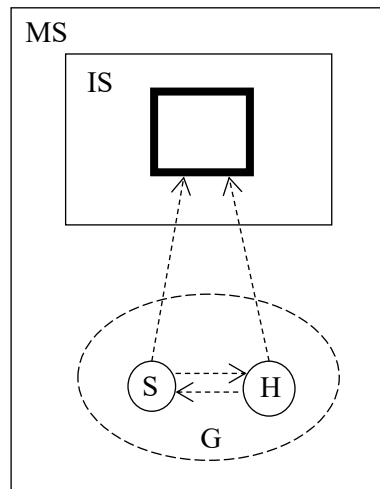


図 2.4 グラウンディング (Langacker 2008:261)

破線の楕円で示されたグラウンド G は，話し手 S と聞き手 H を含んだ発話の文脈を支える総体を表している。外側のボックス MS は，最大スコープ(maximal scope)を表しており，図 2.2 における意識化が可能な最大の範囲 (full scope of awareness)に相当する。それに対し，IS と記された内側のボックスは直接スコープ(immediate scope)を表しており，図 2.2 におけるオンステージ OS に相当する。そして，この IS の中心にある太線のボックスは，注意の焦点であり，S と H から伸びている破線矢印が示しているように，話し手と聞き手の注意が注がれている。この注意の焦点が太線で描かれているのは，これが当該の言語表現のプロファイルであることを示している。最後に，S と H の間に相互に向けられた水平方向の矢印があるが，これは話し手と聞き手が相互に注意を向けていることを表しており，通常，話し手と聞き手からオンステージのプロファイルに注意が向けられるだけでなく，会話の参与者間にもなんらかの意識が向けられている(cf. Langacker 2008:261)。

重要なのは、このグラウンド **G** は、通常、オンステージ **OS** に相当する直接スコープ **IS** の外に位置付けられているため、認知の客体としては意識されていないということである。言い換えると、グラウンド **G** は主体的に把握されている、つまり、主体性が高いということである。次節では、この主体性の問題が言語の意味現象に深く関わっていることを示す主体化(subjectification)と呼ばれる現象について紹介する。

2.1.4 主体化

2.1.2 節の(3)において、「傷跡」というモノの形状を描写する際に *extend* というある種の動作を表す動詞が用いられる場合があることを見た。Langacker (1999a)によると、このような現象はある種の意味拡張のパターンとして様々な事例で確認できる。例えば、(6)を見てほしい。Langacker によると、両文の *across* の意味は全く同じとは言えない。(6a)の *across* は *Vanessa* が移動した軌道をプロファイルしているが、(6b)にはそもそも *Vanessa* の移動が認められないため、*across* がプロファイルすべき軌道が存在しない。

- (6) a. *Vanessa jumped across the table.*
 b. *Vanessa is sitting across the table from Veronica.*

(Langacker1990a:326)

この両者の違いについて、Langacker (1990a, 1991)は、以下に示すように、当該の関係の客体軸から主体軸への再調整である主体化(subjectification)という認知的な現象によって説明できるとしている。

- (7) Subjectification can now be characterized as the realignment of some relationship from the objective axis to the subjective axis. (Langacker 1990a:326)

この主体化を用いて、(6)の *across* が表す概念化の違いについて分析してみよう。下の図 2.5 と図 2.6 はそれぞれ(6a)と(6b)に対応している。

図 2.5 では、時間を表す左から右に水平に引かれた実線矢印 *t* と重なり合った複数の円で、トラジェクター *tr* である *Vanessa* がランドマーク *lm* であるテーブルを越えるという物理的な移動を表している。また、グラウンド *G* からトラジェクター *tr* に向けられている複数の破線の矢印は、この移動に付随して起こる認知主体の視線の移動を表している⁸。この図 2.5 が表しているのは、認知客体としての物理的移動と認知主体の視線の移動が共存する事態把握の在り方である。

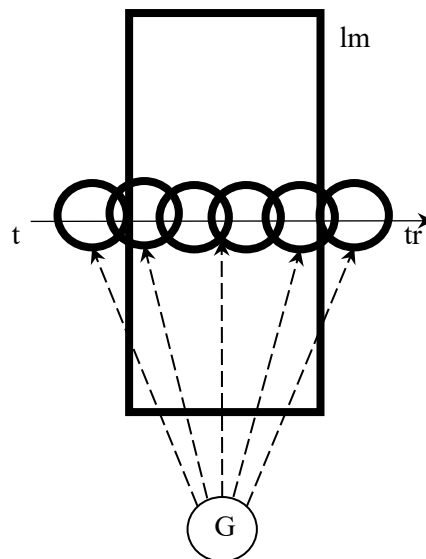


図 2.5 (6a)の図式化 (Langacker1990a:327)

⁸ グラウンド *G* (ground)は概念化者 *C* (conceptualizer)を含み、概念化者 *C* は話し手 *S* (speaker)を含むため、*G*, *C*, *S* のいずれも文脈によって認知主体とみなすことができる。

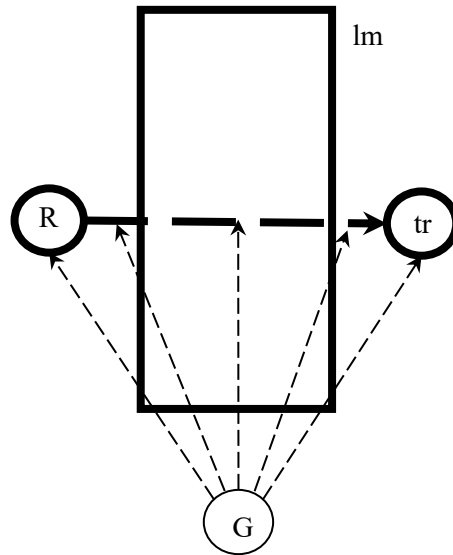


図 2.6 (6b)の図式化 (Langacker1990a:327)

それに対し、(6b)では、トラジェクターtrである *Vanessa* は物理的な移動を行っていない。それにもかかわらず、*across* が用いられているのは、認知主体 G が *Veronica* を参照点 R として、*Vanessa* へのメンタル・スキャニングを行っているからである。2.1.2 節で説明したように、メンタル・スキャニングとは、認知主体の認知プロセスの一種であり、図 2.6 では破線矢印で表示されている。このメンタル・スキャニングは物理的な移動とは異なり時間（の経過）を必要としないため、図 2.6 では時間 t を表す実線矢印は描かれていない。重要なのは、この(6b)の *across* の概念化には認知の客体となるべき物理的移動がないことである。そのため、図 2.6 には、図 2.5 にあるような客体としての物理的移動がなく、認知主体 G の主体的な認知プロセスであるメンタル・スキャニングだけが残されているのである。そして、これが(7)の定義で Langacker が客体軸から主体軸への再調整と述べている認知プロセスであり、このような *across* の意味的拡張のことを Langacker (1990a:326)は主体化(subjectification)と呼んでいるのである。

また、Langacker (1990a)では、次の(8)の例を挙げ、主体化には第二種のタイプがあることを指摘している。(8a)と(8b)は基本的に同じ状況を表していると考えてよいが、Langacker は(8b)を単なる *from me* の省略とはみなさず、両者の概念化には主体性に関して大きな違いがあると考えるのである。

- (8) a. Vanessa is sitting across the table from me.
 b. Vanessa is sitting across the table.

(Langacker1990a:328)

Langacker によると、(8a)は基本的に(6b)と同様の事態把握が行われている。両者が異なっているのは、参照点 R が(6b)の *Veronica* ではなく、*me* (話し手)になっている点だけであり、これは、(8a)では認知主体が自身を概念化の対象として他者と同じように扱っていることを示している。つまり、(8a)では認知主体が自己を客体視し、客体化された自己である *me* を参照点 R として、トラジェクター|である *Vanessa* を捉えているということである。これを図示すると、図 2.7 のようになる。図 2.7 では、認知主体 G と参照点 R が同一物を指示していることを表すため同一指示線（点線）で G と R が結ばれている点以外は、基本的に図 2.6 と同じ認知図式である。

これに対し、(8b)では、これまでの分析とは大きく異なった概念化が行われている。Langacker (1990a)に従うと、(8b)は図 2.8 に示すように、グラウンド G が参照点 R として把握されている。そのため、この場合の *across* は話し手から見たテーブルの向こうに *Vanessa* が座っていることになる。これは、(8a)では客体として把握されていた参照点 R がグラウンド G になるということであり、主体的な把握(subjective construal)を受けようになったということを意味する。

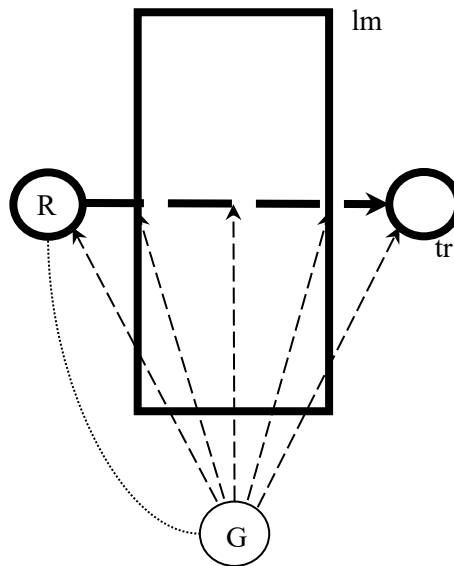


図 2.7 (8a)の図式化 (Langacker1990a:327 一部改)

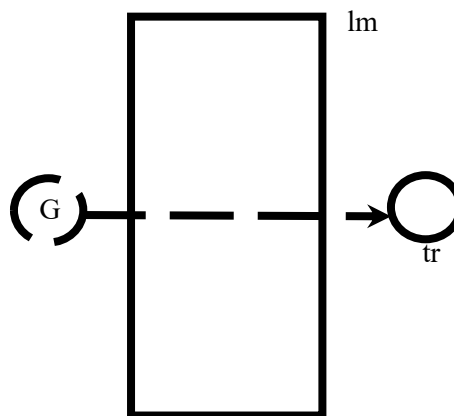


図 2.8 (8b)の図式化 (Langacker1990a:327)

ここでは、認知主体を表す G の主体性(subjectivity)が高いことを表すため、図 2.8 においては G を表す円が破線で描かれている(cf. Langacker 1990a:326)。ここで、注意しなければならないのは、図 2.5 から図 2.7 では、参照点 R は常に客体的に把握されていた(objectively construed)が、図 2.8 では、認知主体 G が参照点 R となっているため、参照点 R が主体的に把握されている(subjectively construed)ということである。整理すると、

第一種の主体化(subjectification)は、客体的な移動が消え、主体的な認知プロセスのみが顕在化することであるが、第二種の主体化(subjectification)は客体的な把握を受けている参照点 R が主体的な把握(subjective construal)を受けるようになることである。

深田(2001)によると、1990 年代初頭の Langacker の主体化(subjectification)の定義は、まだ十分に整理されていなかった。実際、(7)の定義に見られる「当該の関係の客体軸から主体軸への再調整 (the realignment of some relationship from the objective axis to the subjective axis)」という規定は、「再調整」という解釈の余地を残す表現が用いられていたため、その後、主体化の議論に混乱を招いた (cf. 深田 2001)。そこで、ここでは、解釈の余地を残さない別の個所の規定を取り上げる。(9)の規定では、明確に、主体化とは客体的に把握されていた実体がより主体的に把握されるようになることだと述べられている。

- (9) **Subjectification** (discussed more fully in Langacker 1990b) is a semantic shift or extension in which an entity originally construed objectively comes to receive a more subjective construal... (Langacker 1991:215)

たしかに、この規定は第二種の主体化には当てはまる。しかしながら、第一種には当てはまらない。第一種の主体化は、客体的要素に付随して当初よりあった主体的要素が客体的要素の消失に伴い顕在化することであるため、(9)に規定するような客体的要素が主体的把握を受けるような変化ではないのである。

実際、主体化とは何かという問題に関しては、その後、Langacker (1998)などで議論の対象となったが、Langacker (2008)以降、(10)に示す見解がとられている。

- (10) In a final means of transcending direct experience, mental operations inherent in a certain kind of experience are applied to situations with respect to which their occurrence is extrinsic. This is called **subjectification**, indicating that the operations come to be independent of the objective circumstances where they initially occur and whose apprehension they partially constitute. (Langacker 2008:528) (直接的な経験を越えていく手段としては、さらに、ある種の経験に固有の心的操作が、その心的操作の外部で生じる状況に適用されてくる、**主体化**をあげることができる。一般に、主体化においては、客体レベルで生じている状況とその心的操作が当初調和しているのが、徐々に独立してくるようになるのがその重要な特徴である。) (山梨監訳 2011:713)

(10)は、要するに、認知主体が外界の事物に関して何らかの経験をする場合に必要とされる心的な操作がそのような事物が存在しない状況においても使われるようになることが主体化であると述べているのだが、これは、第一種の主体化には適合するが、第二種の主体化には適合しないことに留意しておく必要がある。つまり、(10)に従うと、認知客体が認知主体に変わるという第二種の主体化は、もはや主体化ではないことになる⁹。

(10)に従うと、物理的移動や変化を認識するために用いられるスキャニングという心的な操作が、そのような移動や変化が存在しない状況を理解するためにも使われるようになったのが、(11a)の *across* であり、(11b)の *extend* であり、これが主体化の事例ということになる。そして、このような物理的移動や物理的変化を伴わない心的な移動や変

⁹ これに関して Langacker は明示的に述べているわけではないが、第二種の主体化に相当する事例は、Langacker (2008:467)では、視点構図(viewing arrangement)との関連で議論されている。視点構図の問題は、本研究では、5.3.2 節の議論に深く関わっている。

化のことを虚構移動(fictive motion), 虚構変化(fictive change)と呼ぶことがある。

- (11) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica. (=6b)
b. An ugly scar extends from his wrist to his elbow. (=3a)

(10)のように考えることにより, これまで主体化の事例とはみなされてこなかった現象も主体化の事例とみなされるようになる。例えば, 「友情」や「時間」などの抽象名詞は, 本来, 「石」や「木」などの物理的な物体を認識する際に用いられる心的操作を物理的な物体が存在しない場合にも適用した結果生じた概念を表しているということになる。要するに, 本来, 物でないものを物としてみなしているということである。そして, これを生産的に用いたものが名詞化(nominalization)と呼ばれる現象である。例えば, 動詞 *assassinate* から名詞 *assassination* を派生する場合に見られるようなある種の文法操作は, 実際には, 文法操作ではなく, 「暗殺する」という本来物体ではない事態(動作)に対し, 物体を認識するときに用いる心的操作を適用することを通して, 抽象的なモノとして捉えるという捉え方(construal)の問題であり, これは主体化の一例ということになる(cf. Langacker 2008:528-529)。

2.1.5 時間

2.1.3 節と 2.1.4 節では, 認知の主体と客体の関係に関する問題, すなわち, 主体性の問題に関して紹介した。そこで, 本節では, 第 3 章と第 4 章の議論で重要な役割を果たす「時間」という概念をこの主体性の観点から考察する。

Langacker (1990a:80-81)は, 「時間」という概念を, 処理時間(processing time)と把握時間(conceived time)に分けて考える必要があるとし, (12)のような定式を用いて両者の違

いを説明している。(12)は概念化者 C による事態把握の様子を定式化したものである。例えば、「10 時の時点ではうれしかった」という発話を 12 時に話し手が述べたという状況を考えてみよう。これを(12)の定式に当てはめると、時間 $t_i = 10$ 時、関係 $r_i =$ 「うれしい」、概念化者 $C =$ 話し手、時間 $T_i = 12$ 時ということになる。ただし、ここでいう関係 r (relation)は、認知言語学の術語であり、名詞類(nominals)がプロファイルするのがモノ(thing)であるに対して、動詞、形容詞、副詞、前置詞が共通してプロファイルする実体(entity)を指す(Langacker 1990a:74-81)。

$$(12) \begin{bmatrix} [r_i] / t_i \\ C \end{bmatrix} T_i$$

(Langacker 1990a:80)

(12)で重要なのは、この定式化には二つの時間 (t と T) が必要であるということである。このような状況における時間 t のことを Langacker は把握時間と呼び、時間 T のことを処理時間と呼び分けているが、要するに、(13)の引用に示すように、把握時間 t とは、認知の客体として把握された(objectively construed)時間のことであり、処理時間 T とは、認知の媒体となっている時間のことである。主体性の関連で言えば、処理時間とは主体的に把握された(subjectively construed)時間と言ってもいい。

- (13) When time is viewed in this capacity, as the **medium** of conception, it is referred to as **processing time**. Every conceptualization requires some span of processing time for its occurrence. [...] Processing time has to be distinguished from **conceived time** – that is, time as an **object** of conception. (Langacker 2008:79) (概念の媒体 (medium)として捉えられる時間は、**処理時間**と呼ばれる。すべての概念化は、ある一定の処理時間を必要とする。(中略) 処理時間と**把握時間**(conceived

time)は区別されなければならない。時間それ自体が概念の**対象**となるのが把握時間である。) (山梨監訳 2011:102)

さらに、この(12)の定式を動的なプロセスとして展開したものが(14)である。ここでいうプロセスとは認知言語学の術語であり、動詞という品詞に共通するプロファイルを指す (cf. 2.1.2 節)。例えば、「太郎が走る」などの動詞を含む表現のイメージは、一枚一枚の異なった静止画を時間軸に沿って展開するアニメーションとして分解することができるが、(14)も同様に、連続的な把握時間 $t_1, t_2, t_3, \dots, t_n$ において生じている一連の関係 $r_1, r_2, r_3, \dots, r_n$ として動詞のプロファイルを定式化したものである。

$$(14) \begin{bmatrix} [r_1]/t_1 \\ C \end{bmatrix}_{T_1} > \begin{bmatrix} [r_2]/t_2 \\ C \end{bmatrix}_{T_2} > \begin{bmatrix} [r_3]/t_3 \\ C \end{bmatrix}_{T_3} > \dots > \begin{bmatrix} [r_n]/t_n \\ C \end{bmatrix}_{T_n}$$

(Langacker1990a:81)

(14)において、処理時間 T も T_1, T_2, \dots, T_n と展開しているのは、概念化者 C が概念化を行うためには、必ず一定の処理時間の経過を必要とするからである。例えば、(15)の表現を考えてみよう。これを脳内で処理するためには、1 秒程度の非常に短い時間が必要であろう。それに対し、(15)が記述している事態は比較にならないほど長い時間がかかっているはずである。行列が町に完全に入るには、1 時間ほどの時間がかかっているかもしれない。このように考えると、(15)の表現には非常に短い処理時間 T と比較的長い把握時間 t の二つの時間概念が必要であることがわかる(cf. Langacker 2008:79)。

(15) The long procession slowly entered the city.

(Langacker 2008:79)

また、次の(16)のような事例も処理時間と把握時間を明確に区別する必要性を示している。(16a)は、事態が発生する順番と事態が概念化され表現される順番が一致する例であるが、(16b)のように、この事態を事態が発生する順番とはまったく逆の順番で表現することもできる(cf. Langacker 2008:79)。

(16) a. I quit my job, got married, and had a baby.

b. I had a baby, got married, and quit my job – in reverse order, of course.

(Langacker 2008:79)

図 2.9(a)は(16a)を図示したものである。矢印は把握時間 t と処理時間 T を表し、E1, E2, E3 は、それぞれ「仕事を辞めること」「結婚すること」「子供ができること」を表している。A, B, C は各事態の概念化を表し、a, b, c は各概念化に対応する言語表現を示している。言語表現と概念化はともに処理時間 T 上で共起するため実線で同じ時点につながれているが、事態は処理時間 T とは独立に把握時間 t 上につながれている(cf. Langacker 2008:80)。この考察からわかるのは、事態 E は処理時間 T とは独立しているため処理時間には拘束されないということである。

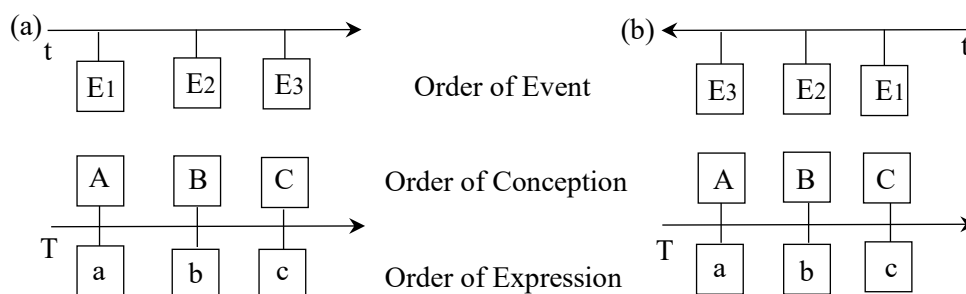


図 2.9 把握時間 t と処理時間 T (Langacker 2008:80)

実際, (16b)およびそれに対応する図 2.9(b)に示すように, 事態 E が発生する順番は処理時間 T に拘束される概念化の順番と一致する必要はない。ただし, (16b)の場合は, 事態は処理時間に従って $E_3 > E_2 > E_1$ という順番で心的にアクセスされるが, 実際には, 把握時間 t 上で事態が発生する順番に従って, 再度心的走査, つまり再概念化 (reconceptualize) される必要がある (cf. Langacker 2008:80)。このように, 極端な場合, 把握事態 t と処理時間 T の方向性が一致しない場合もあるという事実からも明らかなように, 両者は区別する必要があるのである。そして, このような「時間」に関する分析は, 第 3 章と第 4 章における時間に関する議論の前提となる。

2.1.6 身体性

認知言語学を特徴づける主張の一つに身体経験の重視がある (cf. Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1987; Johnson 1987 ; Lakoff and Johnson 1999 など)。実際, 以下の(17)の引用にあるように, 知性と身体との関わりは, 1980 年代から認知言語学でも身体性 (embodiment) の問題として強く認識されており, より広くは経験基盤主義 (experientialism) として認知言語学の研究パラダイムに哲学的な基盤を与えている。

- (17) Thought is embodied, that is, the structures used to put together our conceptual systems grow out of bodily experience and make sense in terms of it; moreover, the core of our conceptual systems is directly grounded in perception, body movement, and experience of a physical and social character. (Lakoff 1987: xiv) (思考とは身体性に関わるものである。すなわち, われわれの概念体系を構築するのに用いられる構造は身体的な経験に由来するものであり, それとの関連で意味を

生み出すものである。その上、われわれ概念体系の中核となる部分は、知覚や身体運動、身体的、社会的な性格の経験といったものに直接根差している。）

(池上他訳 1993: xiii)

例えば、(18)の引用が示すように、Lakoff and Johnson (1980)では、メタファーには、より具体的な経験を用いてより抽象的な概念を構造化するという一定の指向性があることが主張されているが、これは認知主体が自らの身体を通して外界との相互作用を行った結果として得た身体性の高い経験を通して、そのような経験を伴わない身体性の低い概念を理解するということを意味している¹⁰。

- (18) First, we have suggested that there is *directionality* in metaphor, that is, we understand one concept in terms of another. Specifically, we tend to structure the less concrete and inherently vaguer concepts (like those for emotions) in terms of more concrete concepts, which are more clearly delineated in our experience. (Lakoff and Johnson 1980:112) (第一に、筆者たちはメタファーには一つの「指向性」(*directionality*)があることを、すなわち、われわれはある概念を他の概念に基づいて理解する傾向があるのだということを指摘してきた。特に、経験の中により明瞭な輪郭をとって存在するより具体的な概念に基づいて、より具体性に乏しく本質的に曖昧な概念(たとえば感情のような概念)に構造を与える傾向がある。)(渡辺他訳 1986:169)

Lakoff and Johnson (1980:117-119)はこれに続く節で、人間の身体(知覚および運動神

¹⁰ このように考えると、2.1.4 節で扱った主体化とメタファーとの間に身体性という共通点があることがわかる。

経器官、知的能力、感情的気質など）や、物理的な環境と人間の身体との相互作用（動くこと、物体を操作すること、食べることなど）、同じ文化環境で生活している他者との相互作用（社会、政治、経済、宗教の制度に基づく）などから生じる経験のことを「経験の自然種(natural kinds of experience)」と呼び、このような経験の自然種は人間の本性の産物であるとしている。そして、経験の自然種の中でも、それ自体が具体性を欠いているものや明確な輪郭を持っていないものに関しては、十分に明確な構造を持っている概念を用いてメタファーを通して理解すると述べている。

例えば、Lakoff and Johnson (1980)によれば、「時間」に関する経験はほとんどすべてメタファーに基づいて理解される経験の自然種である。「時間」は具体性を欠いているために理解するのが難しい概念であるが、時間を空間概念と関係づける＜TIME IS A MOVING OBJECT（時間は動いている物体である）＞メタファーや、＜TIME IS MONEY（時は金なり）＞メタファーに基づいて理解されている。Lakoff and Johnson (1980)によると、例えば、「時は金なり」というメタファーを用いると、「お金」に関する具体的な身体経験を介して獲得した概念体系によって「時間」に関する概念体系を得ることになる。そして、このメタファーによって、部分的にはあるが、「時間」という抽象的な概念にある種の具体的な構造が与えられるのである。もちろん、メタファーによって与えられた概念構造が、他の側面を隠してしまうという側面もある(cf. Lakoff and Johnson 1980)。つまり、時間をお金に喩えることによって理解が促されることがメタファーの利点であるが、逆に、時間という現象の中のお金に関する知識と整合性がない部分については、無視されてしまうことにもなるのである。

次に、メタファーが認知モデル(cognitive model)として、深く人間の認識や知識の構造を支えている例を見てみよう。まずは、空間の方向性に基づいた「方向づけのメタファー(orientational metaphors)」の例である。例えば、様々な言語で＜HAPPY IS UP; SAD IS DOWN（楽しみは上、悲しみは下）＞などのような上下方向に関する表現がメタファー

として用いられることがある。この他にも内―外，前―後，着―離，深―浅，中心―周辺などがメタファーとして様々な表現に用いられる。これらはみな，空間の方向性に基づいて他の概念を理解するメタファーである¹¹。そして，これらのメタファーはすべて身体を通した経験から直接的に生じる概念であるといえる。

このように，具体性を欠いた抽象的な概念であっても，その根底には身体性があるという Lakoff and Johnson (1980)の主張は，今日に至るまで，認知言語学の基本的なテーゼとして広く検討されるようになっている。本研究でも，第3章において，身体を通した具体的な経験がメタファー表現の容認性にどのように関わっているのかについて検討する。

2.1.7 比喩

前節では，比喩の中でも特に身体性との関連が強いメタファーを紹介したが，本節では，メタファーとそれ以外の比喩との関係について簡単に紹介しておく。一般に，比喩と呼ばれる現象には，少なくとも，「少女は花だ。」のように「花」で「少女」を指すメタファー（隠喩），「おさがが来た。」のように「おさが」で「おさが髪の少女」を指すメトニミー（換喩），「花見に行く。」のように「花」で「桜」を指すシネクドキ（提喩）という三種類の比喩が存在すると言われている¹²。これらの比喩に関して，楠見(1995:183-186)は，瀬戸(1986/1997:196)の三種類の比喩の成立基盤に関する研究を発展させ，(19)のようにまとめている。

¹¹ この他に，＜INFLATION IS AN ENTITY＞などのような抽象的な存在を存在物として捉える「存在のメタファー(ontological metaphor)」や＜THEORIES ARE BUILDINGS＞などのような本来構造を持たない概念に対し何らかの構造を与える「構造のメタファー (structural metaphor)」などもある(cf. Lakoff and Johnson 1980)。

¹² シネクドキはカテゴリー階層を用いた第3章の分析に関わる。

- (19) a. 換喩（メトニミー）は「現実世界」における隣接性に依拠している。たとえば、「おさげ」で「おさげ髪の少女」を指す換喩が、現実の状況において空間的に隣接している。
- b. 提喩（シネクドキ）は「意味世界」における推論に依拠している。たとえば、[花] カテゴリーに {桜, 梅, ……} が含まれる関係は、現前にある関係ではなく、「意味世界」の関係である。
- c. 直喩・隠喩（メタファー）処理は「情緒・感覚世界」における類似性認知の経験に依拠することが多い。たとえば、「少女は花（のよう）だ」というのは、「現実世界」の「少女」と「意味世界」の「花」と結びつける情緒・感覚的意味の共有特徴を持っている。「情緒・感覚世界」状況や文脈の影響を受けやすいため、意味も柔軟に変化する（たとえば、「少女」は「小鳥」、「太陽」と結びつく）。したがって、直喩・隠喩の一義性は、換喩・提喩より低い。

(cf. 楠見 1995:183-186)

また、瀬戸(1995)は、メタファーをさらに悟性的メタファー（精神的認識）と感性的メタファー（身体的知覚）に大別した上で詳細な分類を行っているが、感覚形容詞を取り上げる本研究との関連で言えば、メタファーの一部には身体的感覚に基づいたグループがあることが興味深い¹³。

また、山梨(1988)は、比喩の修辭的な叙述で重要な役割を担うのは、あるカテゴリーに関する「常識的な知識や日常生活の経験を通して主観的に決められる二次的で派生的

¹³ メタファー分類の詳細については、瀬戸(1995)の巻末表を参照。

な特性」(顕現特性)¹⁴であるとし、「狼」と「宝石」の例を挙げて、メタファー解釈に関与するのは、その表現の指示対象を生物学的に特徴づける中核概念の部分ではないと指摘している(山梨 1988:28-29)。そして、この山梨(1988)の指摘に従うと、メタファー解釈にとって重要なのは、経験を通して得られる主観であるということになる。

以上、認知言語学の基本となる考え方を紹介してきたが、その中でも特に、身体経験や主観がどのように言語現象に関わっているかという問題意識が本研究の根本的な問いとなっている。

2.2 日本語の形容詞に関する先行研究

2.1 節では本研究の分析の前提となる理論的背景や道具立てについて紹介した。そこで、本節では、形容詞という品詞に関してこれまでどのような研究が行われてきたか、特に、本研究で取り扱う日本語と中国語の感覚を表す形容詞に関する先行研究について紹介する。

日本語の形容詞に関する先行研究は数多く存在するが、その中でも代表的なものとして西尾(1972)と八亀(2008)が挙げられる。西尾(1972)は、日本語の形容詞を、属性形容詞、感情形容詞、属性と感情の両面を持つ形容詞に分け、形容詞が表す属性の主体とその属性の内容、また、形容詞の意味に見られる主観的な側面について、数多くの例を挙げながら分析している。一方、八亀(2008)は、形容詞を状態形容詞と特性形容詞に分類し、特性形容詞を述語とする文では話し手の評価が背景化され、状態形容詞では、出来事としての対象への意味づけは背景化し、話し手の評価が前面化してくるという主張を行っている。

¹⁴ カテゴリーの顕現特性はプロトタイプを特徴づける特性でもある(山梨 1988:21)。

以下では、それぞれの研究を詳しく紹介する。

2.2.1 西尾(1972)

西尾(1972)は、まず、日本語の形容詞を、客観的な性質・状態の表現をなすもの（属性形容詞）と、主観的な感覚・感情の表現をなすもの（感情形容詞）に分けている。目安としては、「～がる」がつけられるのが感情形容詞であり、つけられないほうが属性形容詞であるということになる。例えば、「あかい」は「*あかがる」とは言えないので属性形容詞、一方、「いたい」は「いたがる」と言えるので感情形容詞ということになる¹⁵。また、主語の人称制限によっても分けられる。感情形容詞は一人称しか主語にならないのに対し、属性形容詞はこのような制限がない。例えば、感情形容詞である「いたい」は特別な文脈がない限り「*太郎がいたい」とは言えない。

しかしながら、このような分類は絶対的なものではなく、属性形容詞の感情形容詞的用法や感情形容詞の属性的用法があり、感情と属性の両面をもつ形容詞などもある。例えば、「あかい」「あおい」などの色彩は外界の物体の属性であるため属性形容詞に分類されるが、色彩は人間の感覚を用いた経験であるという側面もあり、その意味では、感覚を表しているとも言える。また、「かなしい」や「いたい」などは、通常、感情や感覚を表すため感情形容詞であるが、このような感情形容詞であっても、「かなしい別離」や「いたい予防接種」などの事例が示すように、感情や感覚を持つ主体とは関係ない「別離」や「予防接種」などの事物の一般的な性質を描写するために用いることもできる。さらに、「こわい」「にくらしい」「さびしい」「暑い」「すごい」「面白い」「おかしい」「かわいい」などは、西尾(1972)によると、感情と属性の両方の性格を合わせ持ってい

¹⁵ ここでは例として挙げられている形容詞を「漢字」「ひらがな」のどちらの表記にするかは、西尾(1972)に従うことにする。

る (cf. 西尾 1972:21-36)。

また、上述の感情形容詞は、より正確には、感覚形容詞（例えば、「いたい」と感情形容詞（例えば、「なつかしい」）にさらに分解することができ、この感覚形容詞もさらに A グループと B グループに分けられる。A グループは、「まぶしい」「まばゆい」「うるさい」「けむたい」などの感覚を受ける体の部分が特定の個所に限定されるような性質のもので、B グループは、「ねむい」「暑い」「さむい」などの体全体で感じられる性質のものである (cf. 西尾 1972:36-42)。

西尾(1972)は、さらに、属性形容詞が表す属性の主体とその属性の内容の関係について多くの事例を挙げながら説明しているが、特に、人に関する属性を表す形容詞については、持続的な属性か、一時的な属性か、両方かという観点から、以下の図 2.10 のように整理している¹⁶。

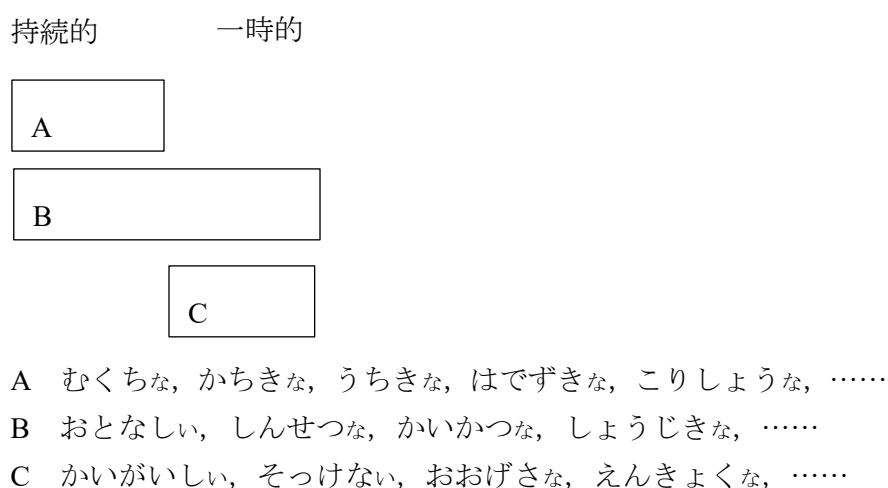
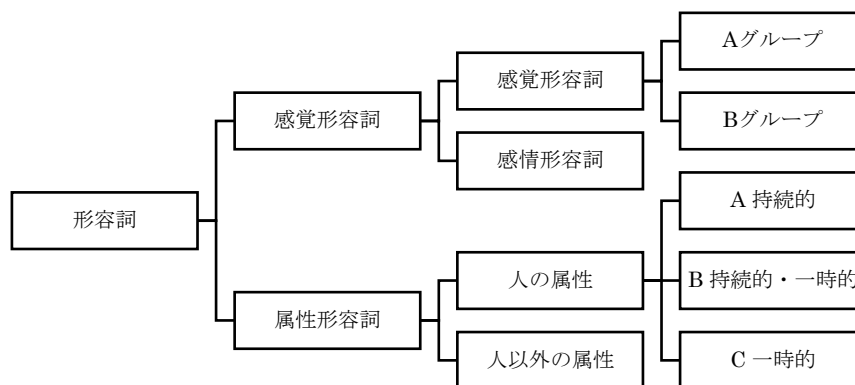


図 2.10 人に関する属性形容詞（西尾 1972:129）

¹⁶ ここでいう「属性の主体」とは認知主体が描写する対象のことであるため、前節までの議論に則して言うならば認知の客体ということになる。また、ここでは西尾(1972)の原文に従い、形容詞接尾辞の「な」「い」を小さくしてある。

例えば、A グループに属する「むくちな」という属性は、属性の主体である人物の持続的な属性を表しており、C グループに属する「かいがいしい」という属性は、その人物のその時の一時的な属性である。さらに、「おとなしい」などの B グループは一時的にも持続的にも使える¹⁷。

西尾(1972)に沿って以上の分類をまとめると次のようになる。



このような分類体系を示したうえで、西尾(1972)は、形容詞の意味における主観的な側面について以下に示すように程度の問題であると述べている。

- (20) 形容詞はものごとの性質や状態を表す語類だと言える。性質や状態というのは、人間の主観からかなり独立的な客観的なものも考えることができよう。そして、形容詞の中には、ある程度客観的だといえるような性質や状態を表わすものも存在していると考えられる。ただし、主観をはなれた、まったく客観的な性質などは、すくなくとも単語のあらわす意味の世界にはあり得ないであろう。主観的といい、客観的といっても、相対的・程度的な違いにす

¹⁷ 実際には、一時的に「むくち」であることも、持続的に「かいがいしい」こともありうるため、その意味では、このように分類することには問題があると思われるが、持続性と時間的限定性は人の属性を議論する上では重要な指標である。

ぎないと言わなければなるまい。(西尾 1972:176)

例えば、事物の性質や状態を表す形容詞として代表的な「あかい」「しかくい」「ほそい」「くらい」などは、主観側での好悪や選択などから独立しているため、客観的な要素が多いと言えるが、「よい」「うつくしい」「くだらない」のような評価的な形容詞は、主観的な要素が強いと言える (cf. 西尾 1972:186)。また、感情形容詞「うらやましい」の場合は、主観的な側面が直接に表されており、客観的な側面は前提的な条件に過ぎない。

一方、属性形容詞に属する「まだるっこい」の場合は、客観的な属性を積極的に表している面があると考えられる。それに対し、属性形容詞「いやらしい」は主観性の濃い属性形容詞であるため、ある主観的な情意を呼び起こすような客観的属性を表すという性格を持っていると言える (cf. 西尾 1972:180)。

また、「こわい」「さびしい」「きびしい」「暑い」のような感情形容詞と属性形容詞の両面を持っている語は、客観面が支配的であれば、属性形容詞とみなされるのに対し、主観面が支配的になると、感情形容詞とみなされるようになる (cf. 西尾 1972:182)。

2.2.2 八亀(2008)

八亀(2008)は、形容詞の分類に時間的限定性というカテゴリーを用いている (cf. 八亀 2008:28-29)。八亀(2008)によると、時間的限定性とは、「具体的・一時的・偶発的なく現象」か、ポテンシャルで恒常的なく本質」かの違いをとらえるもの」(八亀 2008:28-29)である。その上で、八亀(2008:38)は、荒(1989)、樋口(1996, 2001)などと同様に形容詞を特性形容詞と状態形容詞の二つに分類し、特性形容詞の評価の客体は相対的に恒常的で

あるが、状態形容詞の評価の客体は相対的に一時的・偶発的であると述べている¹⁸。ただし、ここで用いられている「評価」とは、形容詞における話し手の主体的な関わり方のことである。

そして、八亀(2008:39-43)は、「時間的限定性」と「評価」を軸として用い、日本語の形容詞を図 2.11 に示すように A～E の五つのタイプに整理している¹⁹。

図 2.11 では、従来の「属性形容詞」の大半は A グループに属し、従来の「感情形容詞」の大半は E グループに属している。そのため、A グループと E グループに属する形容詞が多く、B・C・D に属する形容詞は限られている。以下に、各グループの特徴および具体例を挙げる。

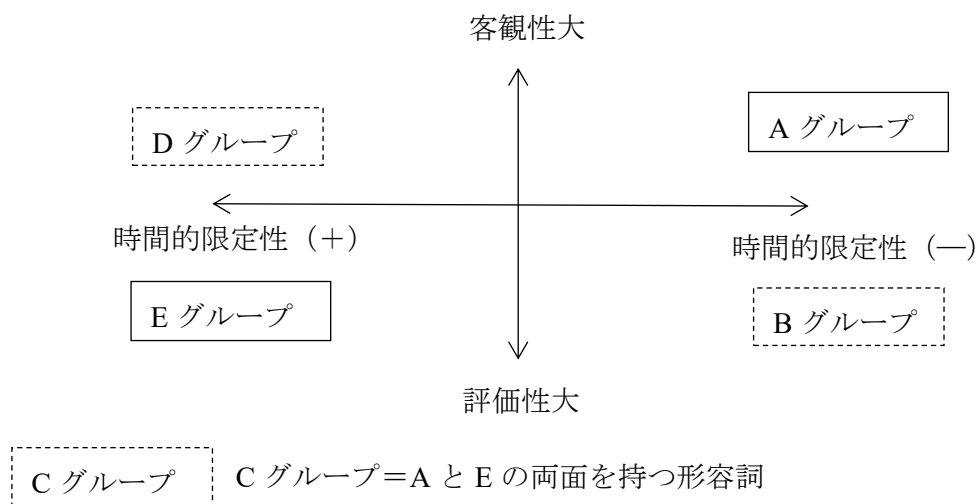


図 2.11 時間的限定性と評価を軸とする形容詞分類（八亀 2008:40）

¹⁸ 八亀(2008)の言う「評価の客体」とは、認知言語学的には「認知客体」のことであり、西尾(1972)の「属性の主体」に相当すると考えてよい。

¹⁹ 図 2.11 の縦軸は、主観性（客観性）または、主体性（客体性）の軸と考えたほうが良いと思われるが、ここでは八亀(2008)に従って「客観性大⇄評価性大」のままにしてある。

A グループには、時間的限定性を示さない「属性形容詞」の大半が属しており、八亀(2008)はこのグループを「特性形容詞」と呼んでいる。基本的に《特徴のもちぬし》に《特徴》をさしだす構造が前面化されるため、通常、評価主体は明示されない²⁰。例えば、(21)を見てほしい。

(21)	(話し手)	<u>おかあさんの手</u> って	<u>大きい</u> ね ²¹
	《評価の主体》	《特徴のもちぬし》 《評価の客体》	《特徴》 《評価そのもの》

(八亀 2008:41)

「おかあさんの手って、大きいね」と言った場合、「お母さんの手」は《特徴のもちぬし》という側面と《評価の客体》という側面の両方があるが、ここでは、そのうちの《特徴のもちぬし》という側面が前景化されている。また、「お母さんの手」が持つ「大きい」という《特徴》は話し手からの《評価そのもの》でもあるが、これも《特徴》という側面が前景化されている。(21)において《特徴のもちぬし》と《特徴》が太字になっているのは、これらが前景化されていることを表している。一方、(21)の《評価の主体》は話し手であるが、話し手は背景化されているために言語化されていない。要するに、「大きい」という形容詞は、通常、対象に内在的な特徴として理解するものであって、話者が行う評価とは独立した概念であるということである。

また、B グループも時間的限定性を持たない特性形容詞であるが、「すきな」「きらいな」などに見られるように話し手の好悪、つまり評価が前面に出る点で A グループとは異なっている。例えば、(22)の「このバンド好きよ」と言った場合、話し手が《評価

²⁰ 「《特徴のもちぬし》に《特徴》をさしだす構造」という表現は八亀(2008)の原文に従ったものであるが、「モノが本来特徴として持っている構造」と理解してよいものと思われる。

²¹ (21)–(27)の下線部と太字は筆者による。

の主体》であり、「バンド」が《評価の客体》、そして、「好き」が《評価そのもの》になり、これらの側面が前景化されているが、ここでは、そのバンドが本来的に持っている特徴に関する側面は背景化されていると言える。

(22)	(話し手)	<u>このバンド</u>	<u>好きよ</u>
	《評価の主体》	《評価の客体》 《特徴のもちぬし》	《評価そのもの》 《特徴》

(八亀 2008:41)

ただし、八亀(2008)によると、B グループでは、話し手の恒常的な好悪は一時的なものではなく、固定化された態度を表しているため、評価そのものが前面化され、話し手が背景化されている。この背景化のため、通常、《評価の主体》である話し手は明示されない²²。

次に、八亀(2008)が「状態形容詞」と呼んでいる E グループ (図 2.11 の左下) を先に見ることにする。従来の、いわゆる、「感情形容詞」の大半がこのグループに当たり、時間的限定性を持つとともに評価的な面が前面化されるという特徴を持っている。E グループの状態形容詞に関しては、(23)に示すように評価主体 (=話し手) はふつう明示されないが、明示されるとは主観性が強く感じられる。また、「うれしい！」などのように「評価の客体」が明示されないこともあるが、その場合、「評価の客体」が明示されない方は主観性が強く感じられる。また、(24)に示すように状態形容詞が倒置されて文頭に出ると、＜表出＞の用法に近づくと考えられる。

²² もちろん、個人的な好悪であることをあえて示したい場合などは「私、このバンド好きよ」などのように《評価の主体》を明示することはできる。

- (23) (話し手) 誕生日覚えていてくれて うれしいわ
 《評価の主体》 《評価の客体》 《評価そのもの》
 《特徴のもちぬし》 《特徴》
- (24) (話し手) はずかしいわ, こんな服
 《評価の主体》 《評価そのもの》 《評価の客体》
 《特徴》 《特徴のもちぬし》

(八亀 2008:43)

D グループも時間的限定性があるという点で状態形容詞に属するが、基本的に、《特徴のもちぬし》に《特徴》をさしだす構造が前面化されるという点が E グループとは異なる。例えば、「いそがしい」「あわただしい」「まっかな」「まっしろな」などが D グループに属し、(25)に示すように、これらの形容詞では、通常、評価の主体は明示されない。

- (25) (話し手) 西の空が 真っ赤だ
 《特徴のもちぬし》 《特徴》
 《評価の主体》 《評価の客体》 《評価そのもの》

(八亀 2008:42)

最後は、特性形容詞と状態形容詞の両側面を持つ C グループ（「あつい」「いたい」「おいしい」「おもしろい」「つまらない」「かわいい」など）である。C グループにおいては、《特徴のもちぬし》に《特徴》をさしだすという記述的な構造と評価的な面が結抗する。そのため、(26)では前面化を表す太字表記がない。ただし、通常、評価主体は明示されないが、明示されると評価的側面が前面化されることになる。また、(27)に示すように、E グループと同様、形容詞が倒置されて文頭に出ると、＜表出＞に近づく。

- | | | | |
|------|---------|----------------------|----------------------|
| (26) | (話し手) | <u>このカレーライス</u> | <u>おいしいね</u> |
| | 《評価の主体》 | 《評価の客体》
《特徴のもちぬし》 | 《評価そのもの》
《特徴》 |
| (27) | (話し手) | <u>かわいいねえ</u> | <u>この子猫</u> |
| | 《評価の主体》 | 《評価そのもの》
《特徴》 | 《評価の客体》
《特徴のもちぬし》 |

(八亀 2008:42)

同じように形容詞を「状態形容詞」と「特性形容詞」に分類する樋口(2001)と八亀(2008)が異なっている点は、D グループの扱いである。樋口(2001)は、D グループの形容詞をA グループとB グループの形容詞が属する「特性形容詞」に含めているが、八亀(2008)は時間的限定性の観点から、明らかに一時的状態を表しているこれらの形容詞は特性形容詞とは異なると主張している。

また、八亀(2008)がC グループを設けた点も際立っている。八亀(2008)によると「おもしろい」「かわいい」「おいしい」などが述語になる形容詞述語文においては、これらの形容詞は、特性形容詞と状態形容詞の中間的な性質を持っている。そして、これらの形容詞においては、評価の客体の属性をさしだすと同時に、評価者の感情的な反応も表している。また、同じくC グループに属する、一般的に「感覚形容詞」と呼ばれる「あつい」「さむい」などが述語になる形容詞述語文については、主体性の観点から二面的な性質を持っていることを指摘している。例えば、「いたい」という表現においては、「話し手が痛い」という主体的な面と「とげが痛い」という客体的な面の両方が表されている (cf. 八亀 2008:102-104)。

以上、日本語の形容詞に関して、重要な研究を二つ紹介した。西尾(1972)は日本語の形容詞を客観と主観の側面から整理してその後の研究の方向性を示している点で評価できるが、記述レベルに止まっていると言わざるを得ない。一方、八亀(2008)は時間性と評価性（主観性・主体性）を分類の軸に据えている点で本研究に着想を与える重要な

研究であると言えるが、やはり記述レベルに留まっている感が否めない。

2.3 中国語の形容詞に関する先行研究

日本語と同様に、中国語の形容詞に関する研究も盛んである。その中でも、最も有名なのが朱德熙(1956)である。朱德熙(1956)は形容詞を単純形式と複雑形式に分類し、単純形式は事物の恒久的不変的属性を表すのに対し、複雑形式は話者の主観的評価と事物の状態や様相を描写するため、複雑形式には一種の潜在的可変性が含まれると主張している。一方、张国宪(2006a,2006b)は認知言語学の観点から中国語の形容詞を扱ったものである。张国宪(2006a)は属性形容詞の判定基準を三つの公式で説明し、张国宪(2006b)では、中国語の形容詞を属性形容詞²³、状態形容詞、変化形容詞に分類し、それぞれの形容詞に対して認知言語学からの規定を行っている。この規定によると、属性形容詞は一括的走査(summary scanning)を用いて、喚起されたイメージの全体をプロファイルするものであり、状態形容詞は順次的走査(sequential scanning)を用いており、イメージの全体は背景化される。また、张国宪(2006b)は、状態形容詞は順次的“定格(freeze-frame)”走査であるのに対し、変化形容詞は“stop”しない順次的連続走査である点で異なっていると、前者は静態的であるのに対し後者は動態的であると主張している。

以下では、それぞれの研究を詳しく紹介する。

²³ 中国語研究では、朱德熙(1956)以降、広く「性質形容詞」、「状態形容詞」という用語が使われているが、张国宪(2006b:7)では、「性質形容詞」は「属性形容詞」と呼んだ方がより適切であると指摘されているため、本研究でも、これにならい「性質形容詞」を「属性形容詞」と呼ぶことにする。ただし、前述した西尾(1972)でも「属性形容詞」という用語が用いられているが、これは客観的な性質・状態を表す形容詞と規定されているため、本研究で用いることにする中国語の「属性形容詞」とは厳密には一致しないことに注意してほしい。

2.3.1 朱德熙(1956)

一般的に、中国語の形容詞に関して研究する場合の出発点として有名なのが、呂叔湘(1953)と朱德熙(1956)であるが、ここでは、朱德熙(1956)に基づいて中国語形容詞の基本的な体系を紹介する。まず、朱德熙(1956)は中国語の形容詞を形式(form)の観点から“简单形式(単純形式)”と“复杂形式(複雑形式)”に分け、さらにその下位分類に見られる文法機能の異同について検討を行っている。以下に形式面から見た朱德熙(1956)に基づいた形容詞の分類体系を示す。

(一) 単純形式

I 単音節形容詞

“大(大きい)” “红(赤い)” “多(多い)” “快(速い)” “好(良い)”

II 一般の二音節形容詞

“干净(清潔だ)” “大方(鷹揚だ)” “糊涂(惚けている)” “规矩(行儀が良い)”

“伟大(偉大だ)”

(二) 複雑形式

I 重疊型形容詞

① 完全重疊型

(AA 型²⁴) “小小儿²⁵(小さい)” “远远儿(遠い)”

(AABB 型) “老老实实(おとなしい)” “干干净净(清潔だ)”

²⁴ 朱德熙(1956)では、単音節形容詞を“x”と表記し、単音節形容詞が重疊された型を“xx 的格式(xx の型)”，二音節形容詞を“xy”と表記しているが、本研究では、近年主流となっている形容詞の表記法に従い、AA 型、AB 型などで表記する。

²⁵ 北京語では、AA 型の後には“儿”が付くが、標準語では AA 型の後に“儿”は使われない。

② 不完全重畳型

(A 里 AB 型) “胡里胡涂 (惚けている)” “古里古怪 (風変わりだ)”

II 接尾成分を伴う形容詞

① 二音節の接尾成分 (ABB 型)

“黑乎乎 (真っ黒だ)” “热乎乎 (ほかほかだ)” “臭哄哄 (悪臭がふんぷんとする)” “乱哄哄 (がやがや騒がしい)” “甜丝丝 (じんわり甘い)” “凉丝丝 (ひんやり涼しい)” “光溜溜 (つるつるだ)” “酸溜溜 (酸っぱい)” “圆溜溜 (まん丸い)” “香喷喷 (よいにおいがふんぷんと漂っている)” “红通通 (真っ赤だ)” “蓝英英 (透き通るように青い)” “绿油油 (緑したたる)” “黑魑魑 (真っ暗だ)” “干巴巴 (乾いてからからだ)” “硬梆梆 (硬くてかちかちだ)” “慢腾腾 (のろのろと緩慢だ)” “热腾腾 (熱くてほかほかだ)”

② 三音節の接尾成分

“傻里呱唧 (ぼけなすだ)” “脏里呱唧 (めちゃくちゃ汚い)” “黑咕隆咚 (真っ暗闇だ)” “灰不溜秋 (くすんだ灰色)” “白不雌列²⁶ (色褪せて白っぽくなっている)”

III BA 型の形容詞²⁷

“霎白 (血の気を失い真っ青だ)” “冰凉 (氷のように冷たい)” “通红 (真っ赤だ)” “鲜红 (鮮紅色だ)” “魑黑 (真っ暗だ)” “喷香 (よいにおいがふんぷんと漂っている)” “粉碎 (こなごなだ)” “稀烂 (ぐちゃぐちゃだ)” “贼亮 (嫌味に

²⁶ 今の時代では、“白不吡咧”と表記する。

²⁷ 朱德熙(1956:4)では、この類の形容詞の呼び方を明示していないが、朱德熙(1956:4)によると、この類の二音節形容詞の第一音節は元の意味を失い接頭辞に近くなっている。これを踏まえたうえで、吕叔湘主编(1999:719)では表記している“双音节形容词 BA (二音節形容詞 BA)”を参照し、本研究では、この類を「BA 型の形容詞」と呼ぶことにする。

光っている)” “精光 (すっからかんだ)” の類の形容詞

IV 形容詞を中心に構成されたフレーズ

① 程度副詞あるいは一部の程度を表す代詞と形容詞とから成るフレーズ

“很大 (とても大きい)” “挺好 (すごく良い)” “非常漂亮 (非常に美しい)” “那么长 (そんなに長い)” “多么新鲜 (なんとも珍しい)”

② 並列された形容詞から成るフレーズ

“又高又大 (高く大きい)”

(cf. 朱德熙 1956:3-5; 以上, すべて筆者訳)

以上, 中国語の形容詞に対する形式面からの分類体系を紹介したが, 次に, 意味的側面からの分類について紹介する。朱德熙(1956:5)は, 意味の観点から, 形容詞の単純形式を甲類成分, 複雑形式を乙類成分と呼んで, 甲類成分は単純な属性を表すが, 乙類成分は“一种量的观念 (ある種の量の観念)”, あるいは量の観念を含む属性に対する話者の主観的評価行為と関連をもっていると指摘している²⁸。

もちろん, 甲類成分と乙類成分の内部はまったく均質であるというわけではない。甲類成分の中でも単音節形容詞は典型的な甲類成分であるが, 二音節形容詞は往々にして乙類成分の性質をも有している。そのため, 朱德熙(1956:6)は, 二音節形容詞は甲類成分から乙類成分へと徐々に変化する過程の途上にあることは明白であると述べている。

次に, 朱德熙(1956)は, これらの形容詞が連体修飾する場合の5つの特徴について, 以下のように整理している。

一つ目として, 甲類成分と乙類成分の両成分が名詞を修飾する場合には(28)に示す三

²⁸ つまり, おおよそ, 甲類成分は属性形容詞, 特性形容詞に当たり, 乙類成分は感情形容詞, 状態形容詞に当たると考えてよい。

つの型がある。甲₁型と甲₂型における連体修飾語は甲類成分であり、乙型における連体修飾語は乙類成分である。

- | | | | |
|------|----|------------|------------------|
| (28) | a. | 白紙（白い紙） | 甲 ₁ 型 |
| | b. | 白的紙（白い紙） | 甲 ₂ 型 |
| | c. | 雪白的紙（純白の紙） | 乙型 |

（cf. 朱德熙 1956:7; 筆者訳）

限定・非限定の観点から見た場合、甲₁型と甲₂型の修飾は限定修飾である。例えば、“白紙”では、“白”という属性を用いて“紙”という類名を限定している。そのため、“白紙”と言う時、それが指すものが別の類ではない、例えば“紅紙（赤い紙）”や“黒紙（黒い紙）”等ではないということを確定することとなる。一方、乙型の修飾は非限定的で描写的である。例えば、“雪白的紙（雪のように白い紙）”や“挺白的紙（すごく白い紙）”における“雪白的”や“挺白的”は、紙の種類を限定するのではなく、言及した事物の状態や様相を描写するためのものである。甲₁型と甲₂型の違いは、甲₁型は慣用的、熟語的な結合体であるのに対し、甲₂型は臨時的な組み合わせである点にある²⁹。このため、甲₂型においては限定修飾の働きが特に顕著で、往々にして対比を強調する意味を帯びる。乙型も甲₂型と同様に、乙類成分と名詞を任意に組み合わせることができる。甲₁型だけが多くの場合固定した結合しかできない（cf. 朱德熙 1956:7）。

他にも、甲₂型の“的”と乙型の“的”は全く同じではないということに注意しなければならない。甲類成分に接続した“的”には名詞化の機能が認められるが、乙類成分に

²⁹ ちなみに、甲₁型を「白紙」、甲₂型を「白い紙」と日本語で訳し分けることはできない。日本語の「白紙」は中国語の“白紙”と同様慣用的用法で用いられるが、「何も書き込まれていない紙」「何も印刷されていない紙」などの特殊な意味を表してしまうので、ここでは(28a)(28b)ともに「白い紙」と訳しておいた。

接続した“的”にそのような機能は認められないため、乙型は明らかに限定修飾する甲型とは異なっている。そして、単音節形容詞とは異なり、ほとんどの二音節形容詞（例えば，“伟大（偉大だ）”“聪明（賢い）”“可怜（かわいそうだ）”など）は“的”と結合しても名詞構造に変化しない。しかも、二音節形容詞からなる連体修飾語は描写的なものであり、限定的なものではない。そのため、以上の二点の違いから、二音節形容詞は乙類成分的な性格を持っていることがわかる（cf. 朱德熙 1956:13-17）。

また、朱德熙(1956)は、甲類成分と乙類成分の形容詞が連用修飾語になる場合についても考察している。まず、一般に形容詞の連用修飾が表すのは動作の様態や状態である。そのため、描写的である乙類成分は連用修飾語として用いられるが、限定的である甲類成分は連用修飾には不向きである。実際、甲類成分である単音節形容詞が動詞を修飾する（連用修飾する）ことは広く知られているが、その多くが熟語的表現に限られており、自由に連用修飾が可能であるとは言えない。単音節形容詞の中で真に連用修飾語となりうるのは“多（多い）”“少（少ない）”“早（早い）”“晚（遅い）”等のいくつかの限られた形容詞のみである（cf. 朱德熙 1956:18-24）。

- (29) a. 就 和 李六子 高高 地 爬 到 树 上……³⁰
so with LiLiuzi high-high AUX climb reach tree on

(朱德熙 1956:22)

(そこで李六子と2人で高く木に登る…)

- b. * 就 和 李六子 高 地 爬 到 树 上……
so with LiLiuzi high AUX climb reach tree on

(そこで李六子と2人で高く木に登る…)

³⁰ 朱德熙(1956:22)の原文では、形容詞“高高”の後ろは“的”となっており、朱德熙(1956:18)には、「“地”（“的”とも書く）」と説明されているが、現在では、形容詞が動詞を修飾する際には、“的”ではなく“地”を付加すると一般的にされているため、ここでは“地”に替えてある。また、(29)–(36)の下線部は筆者による。

c. 高 喊 (朱德熙 1956:21)

high shout

(大きな声で叫ぶ)

d. * 高 嚷 (朱德熙 1956:21)

high shout

(大きな声で叫ぶ)

e. 少 出去 几次 (朱德熙 1956:20)

few go out some times

(外出を数回少なくする)

(以上、すべての訳および傍線は筆者による)

(29a)に示すように、乙類成分の形容詞の場合は、“地”が付加されれば、自由に連用修飾語になることができる。それに対し、(29b)の単音節形容詞に“地”を付加しても、容認されない。(29c)のような単音節形容詞は二音節動詞を修飾できないばかりか、単音節動詞を修飾する場合であっても制約が厳しく、それぞれの形容詞が修飾できる動詞は限られており、そのほとんどは(29d)に示すように、他の動詞との置き換えが不可能である。このような現象は、単音節形容詞と動詞が自由に組み合わせることができない熟語であることを示している。したがって、熟語以外に、単音節形容詞は動詞を修飾する場合に、使用制限があると言える。また、(29e)に見られる単音節形容詞は、単音節動詞や二音節動詞だけではなく、様々な動詞を修飾できる。しかしながら、このような機能がある単音節形容詞は上述のように数が限られている。

また、朱德熙(1956)は、形容詞が述語になる場合に関しても、以下のように説明している。コピュラ³¹を含まないタイプ(30)を見てほしい³²。

³¹ コピュラ(copula)は、文の主語と述語を結ぶための補助的な品詞であり、英語の be 動詞に相当する。日本語で繫辞、繫合詞、むすび、連辞とも呼ばれる。

³² もう一つは、“这张纸是白的。(この紙は白いものだ。)”(朱德熙 1956:28)のように、コピュラを含むタイプである。この紙が「白いもの」であることを述べているため、

(30) a. 这 张 纸 很 白。
 this piece paper very white
 (この紙はとても白い。)

b. * 这 张 纸 白。
 this piece paper white
 (この紙は白い。)

(30a)は紙の白さについて描写的に述べていると言えるが、(30b)は“很”などの程度副詞を含まないと容認されない。なぜなら、(31a)に示すように、甲類成分は副詞とコピュラを含まない述語文で用いられると、比較や対照の意味を持つため、しばしば二つの事態を対比させて述べるときに用いられるのである。一方、(31b)のように、乙類成分を述語とする文には比較や対照の意味がないので、単独で用いられることが可能である (cf. 朱德熙 1956:26-27)。

(31) a. 屋里 黑， 外头 亮。 (朱德熙 1956:26)
 inside dark outside bright
 (部屋の中は暗く， 外は明るい。)

b. 屋里 黑魆魆 的。 (朱德熙 1956:27)
 inside dark-OTP(xuxu) AUX
 (部屋の中は真っ暗だ。)

(以上，筆者訳)

甲類成分と乙類成分は、述語として用いられた場合にさらなる差異が生じる。甲類成分からなる述語が表すものは事物の恒久的、不変的属性であるが、乙類成分からなる述

“白的”は名詞構造であると言える。

語は往々にして一種の潜在的変性を含んでいる場合のみに用いられる。そのため一時的な事態の変化を述べる発話環境においては、乙類成分しか述語とすることはできない (cf. 朱德熙 1956:27)。

(32) a. 小梅 在 公所 里 等 着。 公所 里 静悄悄 的。

Xiaomei at office inside wait PCT office inside quietly-OTP(qiaoqiao) AUX

只 听见 隔壁 院子 里， 孩子们 在 唱…… (朱德熙 1956:27)

only hear next-door garden inside children PCT sing

(梅さんは役場で待っていた。役場はひっそりと静かで、ただ隣の子供たちが歌うのが聞こえていた。)

b. * 小梅 在 公所 里 等 着。 公所 里 静。

Xiaomei at office inside wait PCT office inside quietly

只 听见 隔壁 院子 里， 孩子们 在 唱……

only hear next-door garden inside children PCT sing

(梅さんは役場で待っていた。役場は静かで、ただ隣の子供たちが歌うのが聞こえていた。)

(以上、筆者訳)

(32a)において「役場は静まり返っている」というのは一時的な現象であり、事態がいつでも変わる可能性があるため、乙類成分を用いることができる。それに対し、(32b)の“*公所里静。”が容認されないのは、変わらない属性を表す甲類成分である“静”が用いられているからである。

さらに、朱德熙(1956:31)は、形容詞は動詞（あるいは形容詞）の後ろに置かれ、動作（あるいは属性、状態）の状況や程度を表す機能があると述べており、甲類成分が動詞の後ろに置かれた場合を「甲式」と呼び、乙類成分が動詞の後ろに置かれた場合を「乙

式」と呼んで区別している。以下はその例である。

甲式

写得好³³。

(よく書いている。)

飞得高。

(高く飛んでいる。)

擦得干净。

(きれいに拭いてある。)

擀得细。

(細く延べてある。)

乙式

写得很好。

(とてもよく書いている。)

飞得高高的。

(高く高く飛んでいる。)

擦得干干净净的。

(すごくきれいに拭いてある。)

擀得细溜溜的。

(糸のように細く延べてある。)

(朱德熙 1956:33; 以上, すべて筆者訳)

このように、形容詞が補語になる際に、甲式が名詞を修飾すれば限定修飾語となり、乙式が名詞を修飾すれば描写的修飾語となる (cf. 朱德熙 1956:33)。実際、(33a)(34a)の甲式は種類を表す限定修飾語であり、(33b)(33b)の乙式は描写的に修飾する語である。

(33) a. 写得好的字。

write AUX good AUX handwriting

(よく書いている字。)

b. 写得很好的字。

write AUX very good AUX handwriting

(とてもよく書いている字。)

(34) a. 擀得细的面条好吃。

(朱德熙 1956:33)

roll AUX thin AUX noodle delicious

(細く延べてある麺がおいしい。)

³³ “得”は動詞と形容詞の間に置かれ、動作の様態または結果を導く助詞である。

- b. 想不到 碗 里 是 赶(擀)得 细溜溜 的 白 面条。
 unexpected bowl inside copula roll AUX thin-OTP(liuliu) AUX white noodle
 (思いがけなくて, とんぶりの中は糸のように細く延べてある白い麺だ。)
 (朱德熙 1956:33; 以上, 筆者訳)

(35a)の“飞得高(高く飛んでいる)”という甲式は時間副詞“马上(すぐに)”の修飾を受けることができないが, (35b)の“飞得高高的(高く高く飛んでいる)”のような乙式は時間副詞の修飾を受けることが可能である。なぜなら, “已经(すでに)”“早就(とっくに)”“连忙(急いで)”“马上(すぐに)”のような時間副詞の特徴は時間的意味を含む成分しか修飾できないのである (cf. 朱德熙 1956:35)。

- (35) a. * 马上 飞 得 高。
 immediately fly AUX high
 (すぐに高く飛んでいる。)
- b. 马上 飞 得 高高 的。
 immediately fly AUX high-high AUX
 (すぐに高く高く飛んでいる。)

最後に, 朱德熙(1956)が指摘した興味深い問題についても紹介しておく。朱德熙(1956:35)は, 重畳型形容詞と重畳する前の原型の違いは, 原型が単に属性を表すだけであるのに対し, 重畳型は属性に対する話者の主観的評価をも同時に表す点にあると述べている。これは, 重畳型は話者の感情をその内部に含んでいることを意味している。(36)を見てほしい。

- (36) a. 短 头发, 大 眼睛
 short hair big eyes
 (短い髪, 大きい目)

b. 短短 的 头发, 大大 的 眼睛 (朱德熙 1956:37)
 short-short AUX hair big-big AUX eyes
 (少し短い髪, ぱっちりとした目)

(以上, 筆者訳)

(36a)の“短”“大”は形容詞の原型であり, 髪と目の属性が単に「短い」「大きい」ことを表しているのに対し, (36b)の重畳型形容詞“短短”“大大”は髪と目の属性だけではなく, 話し手の感情を含んだ主観的な評価も表している³⁴。

朱德熙(1956)は中国語の形容詞を詳細に分類した現在の中国語の形容詞に関する研究の土台になった重要な研究であるが, 本節の最後で注目しておきたいのは, 朱德熙(1956)の研究で示された形式と意味の対応関係である。つまり, 中国語の形容詞の形式の違いは, 意味の違いを反映している, または, その逆に, 意味の違いが形式の違いに反映されるということである。本研究では, これをさらに発展させ, 一般的に形式上の制約とされている中国語の形容詞に関わる諸現象が, 実際は, 形式上の制約ではなく, 意味上の制約であるという可能性を追求していく。

2.3.2 张国宪(2006a, 2006b)

2.3.1 節では, 中国語の形容詞研究の出発点となる朱德熙(1956)を概観したが, ここでは, 認知言語学の観点を用いた中国語形容詞の研究, 张国宪(2006a, 2006b)を紹介する。まず, 张国宪(2006a)では属性形容詞であるかどうかの判定基準として以下の公式(37)を

³⁴ 最後に補足しておく, 後に, 朱德熙(1982:73)では, 意味の観点から形容詞を属性形容詞(“性质形容词”)と状態形容詞(“状态形容词”)に分けており, 単音節形容詞と一般の二音節形容詞は属性形容詞であり, それ以外は状態形容詞であると述べている。

提案している。张国宪(2006a)によると、程度性は形容詞の重要な意味特徴であり、典型的な属性形容詞は、「微量，中量，高量，極量」という程度が異なる副詞と組み合わせることができる。したがって，(37)の下線部に入ることができる形容詞が属性形容詞であるということになる。

(37) {最 很 比较 稍 } + _____ (张国宪 2006a:5)

例えば，“大（大きい）”と“最（最も），很（とても），比较（より），稍（ちょっと）”のいずれかの組み合わせは容認されるが，“*最雪白，*很雪白，*比较雪白，*稍雪白”のように，これらの副詞は“雪白（雪のように白い）”とは共起できない。したがって，“大”は典型的な属性形容詞であり，“雪白”は典型的な状態形容詞であることになる。また，“珍贵（貴重な）”という形容詞は，“最，很，比较”と共起することができるため属性形容詞と考えられるが，“*稍珍贵”のように“稍（ちょっと）”と共起することができないため，典型的な属性形容詞とは言えない。さらに，“宽阔（広い）”は“比较”とは共起することができるが，“最，很，稍”とは共起することができないため，“宽阔”が属性形容詞に属する度合いは低く，より状態形容詞に近いと言える。このように，属性形容詞と状態形容詞の間に明確な境界線はなく，両者は連続体をなしていると考えられる(cf. 张国宪 2006a:5-6)。以下の(38)は両者の中間をとらえるために张国宪(2006a)によって提案された判別式であるが，これに“大，珍贵，宽阔，雪白”を当てはめると，(39)のような結果が得られる。

(38) NP1 + 比 NP2 + _____ (张国宪 2006a:6)

(NP1 は NP2 より + _____) (筆者訳)

- (39) a. 瘦 死 的 骆驼 比 马 大。³⁵
 thin die AUX camel than horse big
 (痩せて死んだラクダは馬より大きい。)
- b. 这 张 照片 比 那 张 珍贵。
 this piece photograph than that piece precious
 (この写真はそれより貴重だ。)
- c. ? 长安 街 比 平安 大街 宽阔。
 Chang'an street than Ping'an big-street wide
 (長安通りは平安大通りより広い。)
- d. * 进口 面粉 比 本地 的 雪白。
 inport flour than local GEN snowy-white
 (輸入の小麦粉は地元のより真っ白だ。)

(张国宪 2006a:6; 以上, すべて筆者訳)

(38)の判別式に代入した(39a)と(39b)が容認されることから, “大”と“珍贵”は属性形容詞であることになる。注意したいのは, “珍贵”は公式(37)により属性形容詞としては非典型的であることが示されたが, (38)を使うことによって, 非典型的ながらも属性形容詞のカテゴリーに入ることが示されたことである。一方, (39c)は容認度が落ち, (39d)に至っては全く容認されないため, “宽阔”および“雪白”は属性形容詞であるとは言えない。このように, 公式(38)は典型的な属性形容詞だけではなく, 非典型的な属性形容詞も判別することができる(cf. 张国宪 2006a:6)。

ところが, たしかに(39c)は, 公式(38)に当てはめると容認度が下がるが, 文脈によっては容認される場合もある。そこで, “宽阔”のような形容詞を属性形容詞とはみなしていない。张国宪(2006a)は, (39c)の“宽阔”のような形容詞を属性形容詞のカテゴリーから除外するための判別式(40)も提案している。

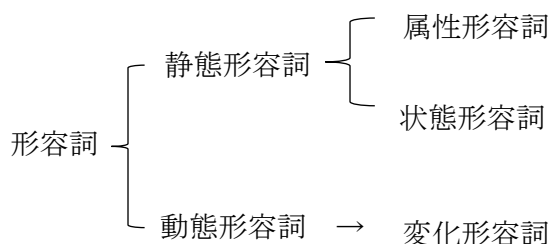
³⁵ (39)(41)の下線部は筆者による。

(40) _____ + NP

(张国宪 2006a:6)

张国宪(2006a)によれば, 属性形容詞の主な機能は名詞(モノ)の分類であるため, (40)の下線部に代入することができ, NPを直接的に修飾できる形容詞は属性形容詞であり, 直接的に修飾できないのは非属性形容詞であるということになる。例えば, “*宽阔大街(広い大通り)”は容認されないため, “宽阔”は属性形容詞ではないことになる。もちろん, “宽阔的大街(広い大通り)”のように“的”を付加すれば容認されるようになるが, その場合, “大街”を類別しているのではなく, “大街”を描写していることになる。

次に, 张国宪(2006b)は認知言語学の枠組みを用いて中国語の形容詞の機能について分析を行っている。张国宪(2006b)では, 中国語の形容詞は, まず, 静態形容詞と動態形容詞に大別され, それらは, 以下に示すように, 属性形容詞, 状態形容詞, 変化形容詞に分類されている。



(cf. 张国宪 2006b:7; 筆者訳)

以下に, それぞれ具体例を示す。(41a)の“凉(冷たい)”と(41b)の“冰凉(氷のように冷たい)”は静態を表す形容詞であり, (41c)の“凉(了)”は動態を表す形容詞である。静態と動態の差異は時間軸上での変化の有無による。また“凉(冷たい)”は恒久的な属性を表すため属性形容詞であるが, “冰凉(氷のように冷たい)”は臨時的な状態を表すので状態形容詞と呼ぶことができる。そして, (41c)の“凉(了)”は動態的な性状変

化を表しているのです、変化形容詞と呼ばれる (cf. 张国宪 2006b:6)。

- (41) a. 井水 涼, 不 像 河水, 不 能 冲澡。
well water cool NEG like river water NEG can take a shower
(井戸水が冷たい, 川水とは違うので, 井戸水を浴びてはいけない。)
- b. 晚上 井水 冰凉 的, 我 不 敢 冲 (澡)。
night well water ice-cold AUX 1SG NEG dare take a shower
(夜は井戸水が冷たかったので, 井戸水を浴びる勇気が出なかった。)
- c. 水 凉 了, 可以 冲澡 了。
water cool PRTcs can take a shower PRTcs
(水が冷たくなったので, 井戸水を浴びることができた。)

(张国宪 2006b:6; 以上, すべて筆者訳)

张国宪(2006b)は、属性形容詞と状態形容詞の区別をスキヤニングによる両者のプロファイルの違いに求めている (cf. 张国宪 2006b:9)。Langacker (1990:80)によると 2.1.2 節および 2.1.4 節で紹介したメンタル・スキヤニングには、大きく分けて、順次走査 (sequential scanning) と一括走査 (summary scanning) の二種類がある。順次走査とは、時間の経過に従って順次的に行う心的走査であるが、一括走査とは、時間の経過を累加的に捉えて一つのゲシュタルト (gestalt) として捉える心的走査である³⁶。例えば、英語の動詞 *cross* と前置詞 *across* の違いは、順次走査か一括走査かという概念化者の事態の捉え方の違いに帰することができる。順次走査で捉えた場合は *cross* で、一括走査で捉えた場合は *across* ということである。そして、张国宪(2006b)は、属性形容詞と状態形容詞の違いを図 2.12、図 2.13 のように図示している。

³⁶ ゲシュタルトとは、一つのまとまりのあるものとして知覚された構造体のこと (cf. 辻 2013:39)。

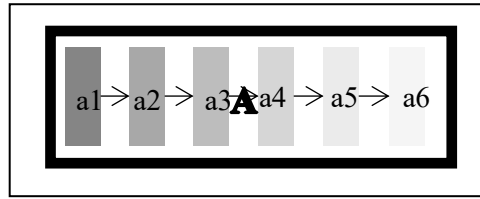


図 2.12 属性形容词のイメージ (张国宪 2006b:9)

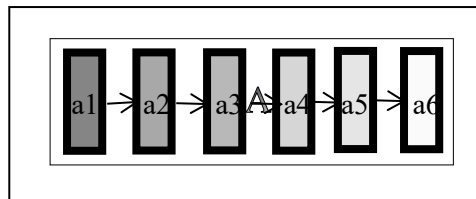


図 2.13 状態形容词のイメージ (张国宪 2006b:9)

张国宪(2006b)は以下のように説明している。図 2.12 においてプロファイルされているのは全体(A)であるのに対し、全体の部分(a1-a6)が背景化されている。ここでは、一括走査が使われている。それに対して、図 2.13 では、部分(a1-a6)がプロファイルされているが、全体(A)が背景化されている。ここでは、順次走査が使われている。つまり、张国宪(2006b)の主張は、属性形容词のイメージは一括走査により形成され、状態形容词のイメージは順次走査によって形成されているということである (cf. 张国宪 2006b:10)。

これに対し、张国宪(2006b)の変化形容词は図 2.14 のように理解することができるとしている。

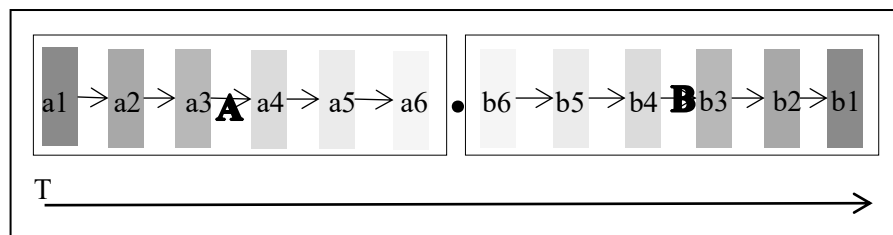


図 2.14 変化形容词のイメージ (张国宪 2006b:9)

図 2.14 内の一つ一つの小さい長方形の彩度は状態 a の程度（量）を表している。例えば、a1 は最も濃く描かれており、これは性質 A の程度（量）が最も高い（多い）ことを表している。逆に、a6 は最も薄く描かれており、これは a6 において性質 A の程度（量）が最も低い（少ない）ことを表している。中央の黒い点は変化の臨界点を表しており、性質 A の程度（量）がだんだん減っていき臨界点に到達した時点で性質 A の性状の変化が実現したことになる。この臨界点を過ぎると、性質 B が現れ始め、最終的には b6 において性質 B の程度（量）が最も高い（多い）状況になる。この変化のイメージにおいて、プロファイルされているのは、変化の臨界点と処理時間(T)である。张国宪(2006b)によると、状態形容詞と変化形容詞ではともに順次走査(sequential scanning)が行われるが、前者は、“定格（ストップモーション）” スキャンニングによるため、静態的であるが、後者は“连续（連続）” スキャンニングによるため、動態的なものとなっている（cf. 张国宪 2006b:11）³⁷。

また、张国宪(2006b)は、有界（限界のある）量値と非有界（限界のない）量値の観点から、属性形容詞と状態形容詞の分析を行っている（cf. 张国宪 2006b:141-142）。図 2.15 を見てほしい。有界量値とは、属性量をスケール上で表した場合の点または複数の点を含む一定の範囲を占めている値であり、非有界量値とは属性量のスケール上で厳密な境界線を引けないような値のことである。张国宪(2006b)によると、属性形容詞は非有界量値を表す形容詞であり、状態形容詞は有界量値を表す形容詞である。また、これらの属性形容詞と状態形容詞は、重畳、付加成分、または前に程度副詞などを加えて合成的な構造を持つ形容詞すると、さらに限定された有界量値を表すことができるようになる³⁸。

³⁷ ここで用いられている“定格（ストップモーション）” スキャンニングと“连续（連続）” スキャンニングは张国宪(2006b)独自の用語である。両者の違いは、Langacker の枠組みに従えば、処理時間 T の有無であると考えられる。

³⁸ 张国宪(2006b:142)の原文では、“量幅” “量段” “量点” となっているが、ここでは、

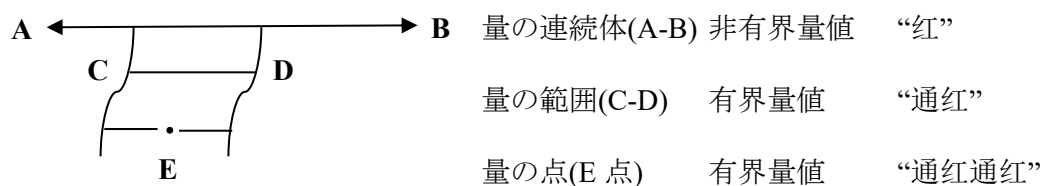


図 2.15 有界量値と非有界量値（张国宪 2006b:142;筆者訳）

“红（赤い）”は属性形容詞であり，スケール上で量的に捉えると色は徐々に変化していくため非有界的であると言える（図 2.15 の A-B）。一方，状態形容詞の“通红（真っ赤だ）”は，スケール上で量的に見た場合，ある一定の範囲に収まっているため有界的であると言える（図 2.15 の C-D）。この範囲内に収まっている量は，さらに数多くの点に分割することができる。“通红通红（極めて真っ赤だ）”はそのような量の点（図 2.15 の E）のひとつである（cf. 张国宪 2006b:142）。

もちろん，非有界的である“红（赤い）”は，“粉红（ピンク）”，“桃红（桃色）”，“水红（薄いピンク）”，“橘红（ミカン色）”，“血红（血のように赤い）”，“通红（真っ赤だ）”，“深红（濃い赤い）”，“紫红（紫がかった濃赤色）”，“殷红（どす黒い赤）”など複数の有界状態形容詞の集合であると考えられることもできる。これを図示すると図 2.16 のように示すことができるだろう（cf. 张国宪 2006b:142）。

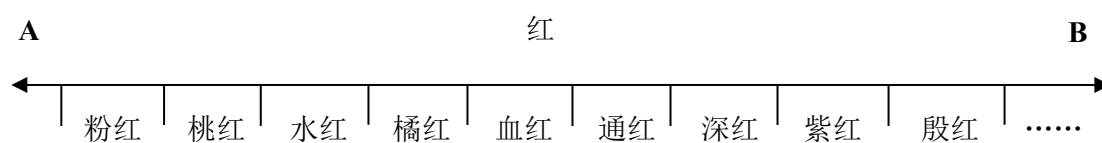


図 2.16 “红（赤い）”の集合

日本語での自然さを考えて，それぞれ「量の連続体」「量の範囲」「量の点」と訳した。

また，図 2.17 に示すように，この“红（赤い）”に“有点儿（ちょっと），比较（比較的に），十分（たいへん），非常（非常に），很（とても），最（もっとも）”などの程度副詞を加えることでさらに細かい有界的な一点や限定された範囲を指すこともできる（cf. 张国宪 2006b:142）。

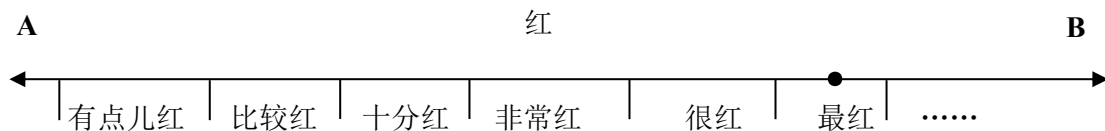


図 2.17 程度副詞＋“红（赤い）”

张国宪(2006b)によると，属性形容詞は形容詞という文法カテゴリーのプロトタイプであり，最も古いメンバーでもある。一方，状態形容詞は形容詞カテゴリーの中でも非典型的なメンバーであり，属性形容詞から派生したものであるため，より遅い時期に出現した表現であると言える。そして，臨時的に語を合成して合成構造を作ることによって，属性形容詞から状態形容詞を形成することもできる。上述のように，属性形容詞は非有界的であり，状態形容詞は有界的であるが，合成された構造はさらに狭い範囲または点を有界的に指すことになる。図 2.18 に示すように，属性形容詞から状態形容詞，さらに合成構造を持った形容詞は，属性量のスケールから見た場合，非有界から一定の範囲を持った有界，さらに範囲が限定された点にそれぞれ意味的に対応しているといえる。すなわち，形式の複雑化の程度と意味（量の特徴）の限定度が一致しているのである（cf. 张国宪 2006b:142）。

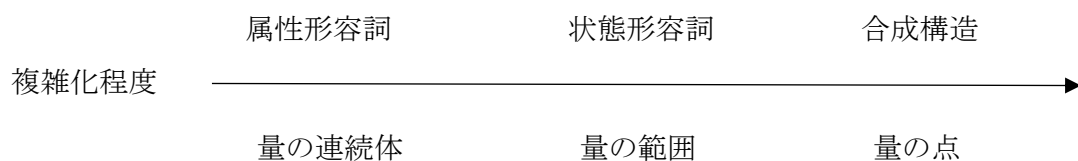


図 2.18 形容詞の形式と意味の対応（张国宪 2006b:142; 筆者訳）

以上、张国宪(2006b)の形容詞の性質に関する主張をまとめると、以下のようになる。時間に関しては、属性形容詞は恒久性を持っており、状態形容詞と変化形容詞は臨時性を持っている。

また、张国宪(2006b:312-316)は、主観と客観について、(42)の例を挙げて考察している。

- (42) a. 主人 沏 了 一 杯 浓浓的 的 咖啡。
master brew PRT_{CS} one CLF thick-thick AUX coffee
(主人は濃いコーヒーを入れた。)
- b. 主人 浓浓的 地 沏 了 一 杯 咖啡。
master thick-thick AUX brew PRT_{CS} one CLF coffee
(主人はコーヒーを濃く入れた。)

(张国宪 2006b:313; 筆者訳)

(42a)では、“浓浓的 (濃い)”は連体修飾語になり、話し手はコーヒーの一般的性質としてより客観的に叙述しているのに対し、(42b)における連用修飾語である“浓浓的 (濃い)”には話し手の主観が含まれ、“浓浓的 (濃い)”は話し手の主観的意欲が達成する状態を表している。すなわち、(42b)の主観性の程度は(42a)より高いのである (cf. 张国宪 2006b:313)。张国宪(2006b: 400)は、修飾関係において、典型的な連体修飾語は恒久的であり客観的であるが、典型的な連用修飾語は臨時的であり主観的であると述べている。

また、属性形容詞の恒久性は連体修飾語の恒久性と合致しており、状態形容詞と変化形容詞の臨時性は述語の臨時性の特徴と合致している。したがって、属性形容詞が一番相応しいのは連体修飾であり、後者の状態形容詞と変化形容詞は述語として用いられるのが最も相応しい (cf. 张国宪 2006b: 400)。

まとめると、张国宪(2006a, b)は、認知言語学の観点から中国語の属性形容詞、状態形

容詞，変化形容詞の分類とその判定基準を提案したという点で大変有益な研究である。しかしながら，张国宪(2006b)では，“凉(了)”は変化形容詞とされているが，実際には，変化を表すのは形容詞“凉”ではなく，助詞“了”であると考えられるため，本研究では“凉”も属性形容詞であるとする。したがって，変化形容詞について，まだ検討の余地がある。

最後に，张国宪(2006b)は品詞の連続性についても次のように述べている。形容詞は品詞分類において独立した地位を持っているが，“连续统（連続スケール）”として品詞を見た場合，形容詞は名詞と動詞の中間にあるため，典型的な形容詞以外に，名詞に十分に接近した形容詞や，動詞と似ている性質を持った形容詞もある(cf. 张国宪 2006b: 414)。このように品詞を連続的なスケールとして見る捉え方は，Givón (2001)とも共通しており，本研究でも第4章の主張にも関係する。

2.3.3 中国語の形容詞に関する品詞論

2.2 節と 2.3 節では形容詞という品詞をある意味で所与のものとして議論してきたが，実は，中国語の品詞に関しては様々な議論があることには注意しておかなければならない。例えば，中国語の形容詞は動詞の下位レベルカテゴリーであると主張する研究(Chao, Yuen Ren 1968:333-372)，中国語に，形容詞という品詞がなく，形容詞はすべて動詞であると主張しているものまである(cf. McCawley 1992)。

もちろん，これは形容詞に限って議論になっているわけではない。例えば，中国語の名詞は(43)に例示するように形容詞や動詞として使われることがある (cf. 张伯江 1994:339-346) ³⁹。

³⁹ 张伯江(1994)は，これを“功能游移(functional shifting)”と呼んでいる。

- (43) a. 真 够 雷锋 的 哎! (张伯江 1994:341)
 really enough Leifeng AUX SFP
 (本当に雷鋒だね。)
- b. 假装 特 学问。 (张伯江 1994:343)
 pretend very learning
 (とても知識が豊富なふりをする。)
- c. 有事 你 就 言语 一 声。 (张伯江 1994:339)
 something 2SG just word one sound
 (なんかあったら一言言ってください。)
- d. 先 把 饮料 给 冰 上。 (张伯江 1994:339)
 first let drink AUX ice up
 (まず飲み物を冷やしておく。)

(以上, すべて筆者訳)

(43a)の“雷锋”は無私で人を助ける有名人であるが、ここでは、「雷鋒らしい」という意味で、名詞から形容詞に転用されている。(43b)の“学问”は本来「学問」という名詞であるが、「知識が豊富な」のような意味を表す形容詞になっている。(43c)の“言语”は「言語」という名詞から、「言う」という動詞として使われている例である。(43d)の“冰(氷)”は「氷」を表す名詞であるが、「冷蔵庫に入れる」または「氷の上に置く」という行為を通じて「ものを冷やす」という意味の動詞として使われている。

また、中国語では、動詞も連体修飾語(形容詞)や目的語になる場合がある(cf. 沈家煊 1999:269-282)。一般的に、動詞の後ろに“的”を付加することで、名詞を修飾することができるようになることが知られているが、実際には、“的”をつけなくても動詞が直接名詞を修飾する例、すなわち、連体修飾語として使われる例もある。

- (44) a. 合作 項目⁴⁰
cooperate project
(協力する項目)
- b. 巡邏 地区
patrol district
(パロールする地域)

(沈家煊 1999:271; 以上, 筆者訳)

(44)の“合作(協力する)”と“巡邏(パロールする)”は, “的”を付加することなしで, それぞれ“項目(項目)”と“地区(地域)”を修飾している。このように, 後続する名詞を修飾することから, (44)は動詞が形容詞化されたものと分析することができるが, 「名詞+名詞」のような複合名詞である可能性も否定できない。ただし, 仮にそうであっても, 後続する名詞を修飾するという点では, 形容詞に近い名詞ということになる。

以上, ここで紹介したように, 中国語の品詞は安定しておらず, 使われる統語構造上の位置によって容易に異なった品詞とみなされるのである。これは品詞が比較的安定している日本語や英語などと異なる点である⁴¹。あるいは, 中国語独自の品詞分類基準が必要とされる可能性がある。

もちろん, 2.1.2 節で紹介したように, 概念内容だけでなく認知主体の捉え方までも意味構造に含めている認知言語学の枠組みでは, このように一つの語が異なった品詞として用いられることはまったく問題ない。それは, 認知言語学では, 品詞を決定する要因は認知主体が何をプロファイルするかによるからである。例えば, Langacker(2008:102-103)は, *yellow* が名詞, 形容詞, 動詞として使われる例を挙げて品詞

⁴⁰ (44)の下線部は筆者による。

⁴¹ もちろん, 日本語や英語でも中国語と同様に統語構造の位置に影響を受ける場合も少なからず見受けられる。例えば, 「逃げるが勝ち」の「逃げる」は動詞が名詞として用いられた例である。

について説明している。

- (45) a. **Yellow** is a nice color.
 b. The ball is **yellow**.
 c. Gradually the paper **yellowed**.

(Langacker 2008:102)

(45)では、それぞれ *yellow* という語が名詞、形容詞、動詞として使われている。そして、これを図示したのが図 2.19 である。まず、名詞として用いられた(45a)であるが、図 2.19(a)にあるように、色のスペース内の黄色が指す範囲 (Y 領域) が「モノ(thing)」としてプロファイルされている⁴²。

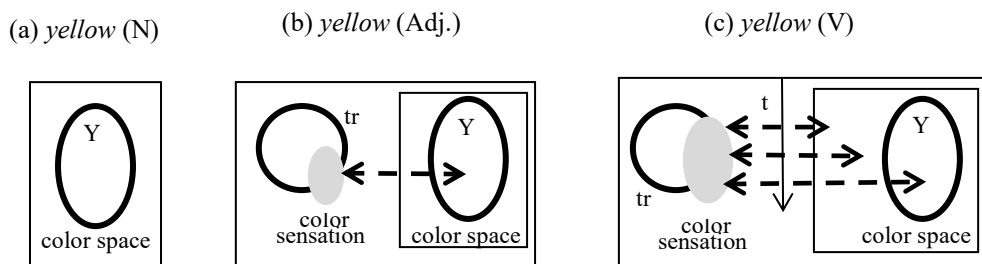


図 2.19 *yellow* の図式化 (Langacker 2008:102 一部改)

一方、形容詞として使われた(45b)の *yellow* の場合であるが、この場合は、トラジェクター *tr* と Y 領域との「関係(relation)」をプロファイルしている。名詞との根本的な違いは、名詞が「モノ」をプロファイルするのに対して、形容詞は「関係」(太線破線矢印)を

⁴² ここでの「スペース」は、「認知領域」、「認知ドメイン」と基本的に同じ意味で用いられている。

プロファイルしていることである。したがって、(45b)はボールと黄色との関係を表しているということになる。形容詞と動詞の相違点は、把握時間 t が喚起されるか否かである。そのため、動詞として *yellow* が用いられた(45c)の場合には、形容詞用法(図 2.19(b))には見られない把握時間 t が描かれている。そして、この把握時間に沿った変化としてトラジェクター tr と Y 領域の関係が認識され、その複合的な関係(complex relation)がプロファイルされているのである。

このように、認知言語学では、品詞の違いは認知主体が何をプロファイルとして捉えるかという捉え方の違いが反映されたものとみなされる。中国語の品詞に関する問題は、4.3.5 節で再度議論する予定である。

第3章 感覚形容詞のカテゴリー階層構造と時間把握

中国語の形容詞においては、複音節形容詞は問題なくメタファーとして用いられるが、単音節形容詞の場合は、慣用表現などの例外を除いては、基本的にメタファー表現として容認されない*。尤東旭(2004)、唐樹華(2010)などの先行研究では、これは音節的な制約であり、単音節形容詞は常に単音節語と組み合わせなければならないと述べている。しかしながら、これには反例も多く存在する。

本章では、感覚形容詞が喚起する概念内容に把握時間が含まれるかどうかという観点から、そのような使用制約が生じる認知的要因について考察を行う。まず、①中国語の単音節感覚形容詞は、意味的には、基本レベルカテゴリーの形容詞であるのに対し、複音節感覚形容詞はその下位レベルカテゴリーであるとしたうえで、②前者では把握時間が全く喚起されないのに対し、後者では把握時間がベースとして喚起されると主張する。そして、③創造的なメタファー表現においては把握時間を伴った事態を喚起する必要があるため、把握時間が喚起されない単音節感覚形容詞はメタファーとして用いることには適さないと提案する。

3.1 問題提起

中国語の感覚形容詞の比喩表現は、共感覚比喩をめぐっての研究は盛んに行われているが⁴³、メタファー用法の制約について人間の認知能力の観点から扱ったものは見当た

* 本章の内容は、張曉琳(2017, 2019)ですでに発表された内容に加筆修正を加えたものである。また、メタファーの詳細に関しては、2.1.7 節を参照。

⁴³ 中国語に関する共感覚比喩の研究では、銭鍾書(1979)は“通覚(共感覚)”が先駆けである。張壽康ら(1980)はそれを受け共感覚が生じる原因を深く探求している。また、汪少華(2001)、唐桂蘭(2003)は認知言語学の視点から共感覚比喩の構造とその特徴を

らない。例えば、これまでも中国語の感覚形容詞をメタファー的に用いる際に、複音節形容詞は容認されるが単音節形容詞は容認されないという制約があることが指摘されてきたが⁴⁴、なぜそのような制約が存在するのかについてはまだ明らかにされていない。そこで、本章では、単音節形容詞と複音節形容詞を中心にメタファー用法に関わる制約を検討する。

中国語の形容詞の主な用法には、述語になる用法(1)と名詞を修飾する用法(2)がある。興味深いのは、どちらの用法においても、触覚領域から視覚領域へのメタファー的な転用がなされると、単音節形容詞“冷”を比喩的に用いた(a)の場合は容認されないが、複音節形容詞“冷冰冰”を比喩的に用いた(b)の場合は容認されることである。このように、ほとんどの場合、中国語の単音節の感覚形容詞はメタファー解釈が許されない。そのため、(1a)は「彼は寒そうに見える」という意味だと少し強引な解釈を無理に与える人はいるかもしれないが、それでも、メタファーとして解釈する人はまずいないといえる。同様に、(2a)の“冷人”もメタファーとして解釈できず字義通りの体温の低い人という意味になってしまう。一方、(1b)(2b)に示すように、中国語において単音節ではなく複音節形容詞を用いればメタファー解釈が可能となる。

(1) a. * 他 的 外表 看起来 冷。

3SG GEN exterior look as cold

b. 他 的 外表 看起来 冷冰冰 的。

3SG GEN exterior look as cold-ice-ice AUX

(彼は見た目が冷たい。)

分析している。

⁴⁴ 例えば、尤東旭(2004:80)は、日本語の触覚形容詞の比喩は基本形容詞を中心にして展開されているのに対して、中国語の比喩は複合形容詞(＝複音節形容詞)が中心になっていると述べている。

(2) a. * 他 是 一 个 冷 人。

3SG COP one CLF cold person

b. 他 是 一 个 冷冰冰 的 人。

3SG COP one CLF cold-ice-ice AUX person

(彼は冷たい人だ。)

もちろん、単音節形容詞を用いるメタファー表現が一つもないわけではない。例えば、“冷笑（冷笑）”“热心肠（世話好きだ）”“硬仗（力ずくの戦い）”“红人儿（人気者）”“心狠手辣（残酷無情だ）”などである。しかしながら、その数は限られていて、かなりの程度で固定した結合であり、熟語としてすでに定着しているもののみである。これらの場合、単音節形容詞は名詞や動詞と緊密に結び付いて一つの語になっていると考えられる。

上述のような慣用表現以外で単音節形容詞をメタファー的に用いる場合には、かなり厳しい制約がある。本章では、中国語の感覚形容詞のメタファー表現における制約の背後にある認知的動機付けを明らかにし、中国語の感覚形容詞のメタファー表現には、話し手の身体性に基づく主観的な体験がともなわなければならないという制約があることを提案する。さらに、中国語感覚形容詞の時間把握という視点から、上述の制限が生じる認知的要因について考察する。

3.2 中国語の形容詞の使用制限に関する先行研究と問題点

中国語の形容詞に関する研究の出発点となるのは呂叔湘(1953)と 2.3.1 節で紹介した朱德熙(1956)である。朱德熙(1982:55)は、中国語の形容詞を“性质形容词（属性形容詞）”と“状态形容词（状態形容詞）”に分けているが、それらの分析を踏まえたうえで、尤

東旭(2003)は五感形容詞（＝感覚形容詞）を中心に中国語と日本語におけるメタファーの表現に関して研究を行っている。また、唐樹华(2010)は中国語と英語の感覚形容詞⁴⁵を中心に、メタファー拡張の差異とその原因を考察し、音節と構文の形式がメタファーの成立に影響を与えると主張している。そのほか、董伟娟・黄小苹(2010)は中国語の単音節味覚形容詞は他の字（語）と組み合わせることによって意味を豊かにし、使用範囲を拡張していると述べている。以下ではこれらの先行研究とその問題点について検討する。

3.2.1 形容詞の分類

先ほど 3.1 節で示したように、多くの場合、中国語の単音節の感覚形容詞は、メタファー解釈としては容認されない⁴⁶。しかしながら、(3)や(4)に示すように単音節形容詞であってもメタファー用法が容認される場合もある。(3b)(4b)のように“很（とても）”“特别（特に）”などの程度副詞がついた場合と(3c)(4c)のように対比で用いられた場合である。

- (3) a. * 他 的 外表 看起来 冷。(=1a)
 3SG GEN exterior look as cold
 b. 他 的 外表 看起来 很冷。
 3SG GEN exterior look as very-cold
 (彼は見た目がとても冷たい。)
 c. 他 的 外表 冷， 内心 热。
 3SG GEN exterior cold interior hot
 (彼は外見は冷たいが、心はあたたかい。)

⁴⁵ 唐樹华(2010)の研究対象は、味覚領域、温度領域、触覚領域、視覚領域に属している形容詞である。

⁴⁶ 詳細は尤東旭(2004:80)を参照。

- (4) a. * 他 是 一 个 冷 人。(=2a)
 3SG COP one CLF cold person
- b. 他 是 一 个 特别冷 的 人。
 3SG COP one CLF especially-cold AUX person
 (彼は特に冷たい人だ。)
- c. 他 是 一 个 外冷内热 的 人。
 3SG COP one CLF exterior-cold-interior-hot AUX person
 (彼は外見は冷たいが、心はあたたかい人だ。)

朱德熙(1956:5)は、程度副詞が付加された属性形容詞はもはや恒常的な状態を表す属性形容詞ではなく一時的な状態を表す状態形容詞とみなされると論じている。この主張に従えば、“冷”に“很”“特别”を加えた(3b)と(4b)が容認されるのは、これらが一時的な状態を表す状態形容詞であるからということになる。しかしながら、それだけでは、なぜ対比の(3c)と(4c)が容認されるのかについては一切説明がつかない。(3c)(4c)はともに恒常的な状態を表す属性形容詞が用いられているため、一時的な状態は表さないことになるからである。

3.2.2 連体修飾と連用修飾

2.3.1 節でも紹介したが、朱德熙(1956:17)は、“白纸（白い紙）”のような属性形容詞が直接名詞を修飾する場合は“比较固定的结构（熟語的な結合体）”であるのに対し、“白的纸（白の紙）”のような属性形容詞に“的”がついたうえで名詞を修飾する場合は“临时的组合（臨時的な組み合わせ）”であることを指摘している。この主張に基づき(5a)を分析すると、(5a)において属性形容詞の“冷”が“人”という名詞をメタファー的に修飾できないのは、“*冷人”が熟語的な結合体ではないからであるということになる。

(5) a. * 他 是 一 个 冷 人。(=2a)

3SG COP one CLF cold person

b. * 他 是 一 个 冷 的 人。

3SG COP one CLF cold AUX person

しかしながら, (5b)が示しているように, (5a)が容認されない理由は“的”がつくかどうかの問題とはいえない。なぜなら, 臨時的な組み合わせである“*冷的人”も容認されないからである。

まず, (5)に示したように, 単音節形容詞は“的”の有無にかかわらず連体修飾語としてメタファー的に用いることはできない。それに対し, 単音節形容詞が連用修飾語として用いられた場合には, “冷笑(あざ笑う)”のようにメタファー的に用いられる事例も少なからず存在する。ただし, それらはみな複合語や熟語などのいわゆる慣用表現に属するものであるため, あくまでも例外としてみなしたほうが良い(cf. 朱德熙 1956:19)。なぜなら, 複合語や熟語以外においては, やはり, (6a)に示すようにメタファー的使用が認められないからである。このことから, 連体修飾用法の場合も述語用法の場合と同じく, 単音節形容詞がメタファーとして用いられることに対する制約があると考えられる⁴⁷。

(6) a. * 他 冷 地 说。

3SG cold AUX say

b. 他 冷冰冰 地 说。

3SG cold-ice-ice AUX say

(彼は冷ややかに言う。)

⁴⁷ ただし, 吕叔湘(1953:6)は形容詞が動詞を修飾する時には「往々にして重疊形式にする必要がある」と述べていることから, (6a)が容認されないのは, メタファー制約以前に, 連用修飾に関する一般的な制約である可能性がある。

3.2.3 述語構文

朱德熙(1956:26)によると、中国語の形容詞述語構文に二つのパターンがある。一つは(7)のようなコピュラ“是”を含まない述語文であり、もう一つは(8)のようなコピュラ“是”を含む述語文である。両者の違いは、コピュラ“是”を含まない述語文に属性形容詞が用いられると比較や対比の意味をもつが、コピュラ“是”を含む述語文の場合にはそのような対比の意味はないことである。実際、(7a)が容認されないのは、“是”がないため対比を表す表現が必要であるにもかかわらず、それが明示されていないからであり、(7b)のように対比を表す部分“内心热”が明示されていれば“是”がなくとも容認される。

(7) a. * 他 的 外表 看起来 冷。 (=1a)

3SG GEN exterior look as cold

b. 他 的 外表 冷, 内心 热。 (=3c)

3SG GEN exterior cold interior hot

(彼は外見は冷たいが、心はあたたかい。)

上述の朱德熙(1956)の見解は、単音節形容詞の述語文はメタファーとして用いることには適さないという唐树华(2010)の主張とは明らかに異なっている。朱德熙(1956)の主張に従うと、(7)の容認性の差異は、メタファーとは無関係にコピュラ“是”に関する構文とそれが用いられる文脈との整合性の問題であるということになる。

もちろん、朱德熙(1956)による、コピュラ“是”を持たない構文とその構文が要求する対比の文脈との整合性による説明だけでは、(8)の差異をとらえることはできない。それは、対比の文脈を必要としないコピュラ“是”を含む述語文(8a)のような場合でも単音節形容詞の場合は容認されないからである。同じくコピュラ“是”を含む述語文(8b)

では、複音節形容詞“冷冰冰”が用いられるメタファー表現は容認される。

- (8) a. * 他 的 外表 看起来 是 冷 的。
3SG GEN exterior look as COP cold AUX
b. 他 的 外表 看起来 是 冷冰冰 的。
3SG GEN exterior look as COP cold-ice-ice AUX
(彼の見た目が冷たい。)

最後に、単音節形容詞が補語として用いられる場合に触れておきたい。《汉语形容词用法词典》によると、“冷”は“变冷了（寒くなった）”のように補語として用いられることができる⁴⁸。したがって、次の(9a)における“冷”が容認されないのは補語に関する構文上の制約ではなく、単音節形容詞に課されたメタファー制約であることになる。実際、(9b)に示すように、複音節形容詞である“冷冰冰”は補語としてメタファー的に用いられている。

- (9) a. * 他们 的 关系 弄得 冷。
3PL GEN relationship do AUX cold
b. 他们 的 关系 弄得 冷冰冰 的。
3PL GEN relationship do AUX cold-ice-ice AUX
(彼らの仲が悪くなった。)

朱德熙(1956), 沈家煊(1999), 李泉(2005)では、中国語の単音節形容詞は単独で述語や連用修飾語になることが難しく、これに関しても様々な制約があると指摘されている。そして、これらの研究を踏まえて、唐树华(2010), 唐树华ら(2011)は単音節形容詞のメタファー表現が容認されない理由の一つに構文上の制約があると主張している。ただし、

⁴⁸ 《汉语形容词用法词典》(2010:121)を参照。

そもそもなぜ単音節形容詞にはそのような構文の制約があるのかを示していない点で不十分であると言わざるをえない。

以上、単音節形容詞の使用に影響を与える構文について見てきたが、単音節形容詞のメタファー制約について議論するときに注意しなければならないことがある。それは、対比の文脈で述語として用いられる場合には、たとえ単音節形容詞であってもメタファー制約が働かないという点と、もう一つは、慣用表現の場合には単音節形容詞が連用修飾語としてメタファー的に用いられることがあるという点である。

3.2.4 音節制限の問題

中国語の歴史的な変化では、単語が単音節から複音節へと変化したという複音節化があったと言われている (cf. 石鏡 2010:313)。それでは、“冷”のような単音節形容詞をメタファー的に使用する際の制約の原因はこの複音節化の問題と関係しているのだろうか。この点に関しては、単音節形容詞は日常会話でよく使われるという事実から、複音節化がメタファー用法の制約であるとは考えにくいと言える。

単音節語は主に単音節語と組み合わせ、二音節語は二音節語と組み合わせるという呂叔湘主编(1999:9)の主張をそのまま受け入れると、単音節感覚形容詞のメタファー用法に関する制約は音節上の制約であることになるかもしれない。しかしながら、仮にこれを音節上の制約だと考えると、“*冷人 (冷たい人)” “*冰冷的笑话 (面白くない冗談)” とは言えない一方で、“冷笑话 (面白くない冗談)” “冰冷的人 (冷たい人)” は容認されるという事実が説明できない。このことから、中国語感覚形容詞のメタファー用法に課される制約は、純粋に音節上の制約であるとはできない。

また、中国語の感覚形容詞のメタファー用法に関して、単音節形容詞はメタファー的

に解釈されないという音節的な制約があることが提案されている (cf. 唐树华 2010)。

(10)を見てほしい⁴⁹。

(10) a. * 她 的 声音 甜。

3SG GEN voice sweet

(彼女の声が甘い。)

b. 她 的 声音 甜润。

3SG GEN voice sweet-moist

(彼女の声が甘い。)

(唐树华 2010:161; 筆者訳)

(10a)の単音節形容詞“甜”は容認されないが, (10b)に示すように, 単音節形容詞“甜”を複音節形容詞“甜润”に置き換えると容認されるようになる。このような事実をもとに, 唐树华(2010)は, メタファー表現として使われるのを制限しているのは, 形容詞の音節であると指摘している。その上で, 唐树华(2010)は, 意味が明確で安定している複音節形容詞の場合, 構文による支えを必要とせず, たとえ(10b)のような述語文であっても, メタファー表現として容認されるとしている。

確かに, メタファー解釈が容認されないのは単音節形容詞であり, 同様の意味を持つ複音節形容詞であればメタファー解釈が可能である。しかしながら, このような音節的制約説には多くの例外が指摘できる。例えば, 前述のように, 対比の文脈を与えると, (11)に示すように単音節感覚形容詞でもメタファー解釈が可能になるなどである。なぜ, このような例外現象が存在するのであろうか。

⁴⁹ 基本的に, 唐树华(2010)はメタファー解釈に関する制約の要因を形容詞の音節に求めているが, 構文の支えなどがあれば, 例外的にメタファー解釈が可能であることについても指摘している。

(11) a. 他 的 外表 冷, 内心 热。(=3c)

3SG GEN exterior cold interior hot

(彼なら外見は冷たいが, 心はあたたかい。)

b. 他 是 一 个 外冷内热 的 人。(=4c)

3SG COP one CLF exterior-cold-interior-hot AUX person

(彼は外見は冷たいが, 心はあたたかい人だ。)

実は, このような例外が存在すること自体よりも, このような例外が音節的な要因ではなく意味的な要因に動機づけられていることのほうが重要な意味を持つと考える。仮にこの現象が音節的な制約に基づくものであるのならば, 意味的な要因に容認性が左右されるはずがないからである。これは音節制約説にとっては深刻な反例といえる。そもそも, メタファーという意味的な現象に音節的な制約を想定すること自体に整合性はあるのであろうか。

董伟娟・黄小苹(2010)は, 味覚形容詞のメタファー表現に関する英中対照研究を通して, 中国語の単音節味覚形容詞は他の字(語)と組み合わせることによって意味を豊かにし, 使用範囲を拡張していると述べている。例えば, “甜蜜蜜(蜜のように甘い)” “辛苦(苦勞する, 苦しい)” “酸溜溜(酸っぱい, 妬み)” “热辣辣(ヒリヒリ)” などでは, 他の字(語)と味覚形容詞を組み合わせることによって意味が豊かになっている。それに対し, 英語の味覚形容詞は他の単語と組み合わせることなしに意味が豊かであるとしている。ただし, 仮にこの主張を支持したとしても, なお, 中国語の場合はなぜ他の字(語)と組み合わせる必要があるのかが明示されていない点で董伟娟・黄小苹(2010)の説明は不十分であると言える。

3.2.5 問題点の整理

ここで、これまで指摘されてきた事実について整理しておく。中国語の単音節感覚形容詞は、連体修飾、連用修飾（慣用表現を除く）、補語として用いられた場合には、いずれの場合もメタファー制約が適用され、メタファー的に用いることができない。また、述語として用いられた場合にも、コピュラ“是”を伴った場合には、メタファー制約が適用され、メタファー的に用いることができない。ところが、興味深いことに、コピュラ“是”が伴われずに述語として用いられる対比文の場合には、メタファー制約が適用されず、単音節感覚形容詞であってもメタファーとして用いることができる。

上述の先行研究を踏まえた上で、第3章は、単音節・複音節という特徴は意味に付随する現象だとし、メタファー解釈の可能性に関しては意味的アプローチをとる必要があると主張する。そもそも単音節形容詞は、後述するように、意味的には基本レベルカテゴリーであり、複音節形容詞は下位レベルカテゴリーである。そこから、このメタファー制約は、中国語の音節上の制約ではなく、基本レベルカテゴリーの感覚形容詞はメタファー解釈を許さないという意味上の制約と再定義したほうがよいことを提案する。つまり、“冷”は「冷たい」という感覚の基本レベルカテゴリーを表すためにメタファー解釈が不可能であり、“冷冰冰”“冷冷”“冰冷”などは、その下位レベルの感覚をカテゴリー化したものであるためメタファー解釈が可能であると考えるのである。

もちろん、そのように考える場合でも、なぜ、同じ基本レベルカテゴリーの感覚形容詞であっても、中国語では“冷人”というメタファー解釈ができないにもかかわらず、日本語では「冷たい人」というメタファー解釈が可能であるのかという問いに答えなければならない。以下では、上述の問いに答えるため、Langacker (1990a)などで提案されている認知文法の把握時間(conceived time)という概念を援用し、中国語の感覚形容詞の把握時間に焦点を当てて考察を行う。

3.3 提案

一般に、メタファー表現の背後には人間の認知能力が関わっていると考えられている。そこで、本章では、中国語の感覚形容詞のメタファー表現における認知的制約を明らかにしたい。

3.3.1 中国語感覚形容詞の分類とカテゴリー階層

朱德熙(1982:55)は、中国語の形容詞を属性形容詞と状態形容詞に大別し、属性形容詞は物事の恒常的な性質を表し、状態形容詞は物事の一時的な状態を描写するものであるとしている。本節ではまず、朱德熙(1982)の分類に従い“冷”に関わる形容詞を一例として次のように分類する。

属性形容詞：冷（寒い・冷たい）、冷酷（冷酷だ）…

状態形容詞：冷冷（寒い・冷たい）、冰冷（寒い・冷たい）、冷冰冰（寒い・冷たい）…

张国宪(2006a)の示した分類基準では、状態形容詞は“很（とても）”などの程度副詞の修飾を受けられず、比較構文にも用いられない。例えば、朱德熙(1982)では分類が明らかにされていない“冷酷”の場合は、“很冷酷（とても冷酷だ）”のように“很”を伴うことができ、“他比她冷酷（彼は彼女より冷酷だ）”のような比較構文も容認されることから、“冷酷”は属性形容詞であると分類されることになる。

また、二音節属性形容詞⁵⁰は、状態形容詞の性質も有していることから、状態形容詞

⁵⁰ 2.3.1 節ですでに紹介してあるが、朱德熙(1956)は属性形容詞を“单音节形容词（单音節形容詞）”と“双音节形容词（二音節形容詞）”に分けている（cf. 朱德熙 1956:3）。

へ徐々に変化する過程にあるという指摘がある（朱德熙 1956:6）。例えば、(12a)の二音節属性形容詞である“冷酷”は対象の属性を表すというより対象の一時的な状態を表すと考えることができる。つまり、属性形容詞が状態形容詞として使われていると考えるのである。ただし、この場合は、認知の客体（対象）の一時的な状態というよりはむしろ話し手の一時的な心理状態を描写しているととらえたほうがより適切である。“冷酷”なのはその人の一時的状態ではない。その人の恒常的な“冷酷”という属性をとらえている、話し手の主観的な心理状態が一時的なのである。逆に、上述で状態形容詞に分類されている(12b)の“冷冰冰”も、話し手の一時的な心理を表現するとともに対象の属性も表しているともいえる。つまり、属性形容詞と状態形容詞は文脈によりお互いの性質を持つことができるのである。(13)の“甜美”と“甜蜜蜜”も同様である。

- (12) a. 他 是 一 个 冷酷 的 人。
 3SG COP one CLF callous AUX person
 （彼は冷たい人だ。）
- b. 他 是 一 个 冷冰冰 的 人。(=2b)
 3SG COP one CLF cold-ice-ice AUX person
 （彼は冷たい人だ。）
- (13) a. 甜美 的 爱情
 sweet-beautiful AUX love
 （甘美な愛情）
- b. 甜蜜蜜 的 爱情
 sweet-OTP(mimi) AUX love
 （甘美な愛情）

以上の議論からわかることは、属性形容詞と状態形容詞という分類は揺らいでいるということである。時間が背景化されると事物の持っている属性が前景化され属性形容詞

となるが、話し手の発話時における心理面が前景化されるとその時点で事物の置かれている状態が前景化され状態形容詞とみなされるようになるのである。

次に、五感の 카테고리階層を用いて感覚形容詞を分析する。一般的なカテゴリーと同様に、五感も図 3.1 に示すように階層構造をなしている。感覚は、触覚、視覚、嗅覚、聴覚、味覚という五つのカテゴリーに分けられるが、この五感はさらに細かく分類される。例えば、中国語の場合において、“触覚”は、“热”“温”“冷”“硬”⁵¹などに分類され、意味的にも形態的にもこのレベルが基本レベルカテゴリーだと考えられる⁵²。

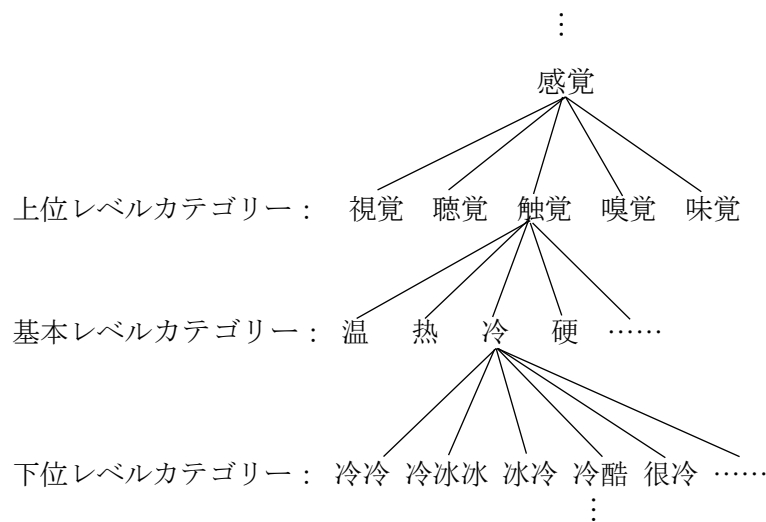


図 3.1 中国語の五感のカテゴリー階層構造

基本レベルカテゴリーの“冷”に対し、形態も複雑で意味的にも細かな状況を描写することができる“冷冷”“冷冰冰”“冰冷”のような形容詞は、下位レベルのカテゴリーでないと考えられる。

⁵¹ 「触覚」をもっと詳しく分類すると、「温熱感」「冷感」「触感」「痛痒感」「深部感覚」などに分けられる。「冷感」の下位レベルカテゴリーには、“冷”“凉”が含まれているが、本章の焦点は“冷”に関わる形容詞であるから、「触覚」の詳しい分類は省略する。

⁵² カテゴリー化に関しては、2.1.1 節を参照。

それでは、中国語の形容詞の種類に関して新たに整理しておく。朱德熙(1956, 1982)は、中国語の形容詞全般に関して形式、機能、音声の観点から分類を行っているが、表 3.1 は、この分類に基づいて本研究独自の分類を示したものである⁵³。例えば、朱德熙(1956, 1982) では、複音節形容詞である二音節形容詞は属性形容詞とされているが、表 3.1 では、複音節形容詞はすべて状態形容詞に分類されている。その理由は、朱德熙本人も認めている通り、一般的な二音節形容詞は状態形容詞の性質を有しているからである。また、表 3.1 の右端列は以上のように提案された感覚形容詞のカテゴリー階層を表している。属性形容詞・単音節形容詞は、カテゴリー階層から見ると基本レベルカテゴリー（以後、基本レベル形容詞）であり、状態形容詞・複音節形容詞はその下位レベルカテゴリー（以後、下位レベル形容詞）に当たる⁵⁴。

形式	機能	音声	感覚形容詞の カテゴリー階層
単純形式	属性形容詞	単音節形容詞	基本レベル形容詞
複雑形式	状態形容詞	複音節形容詞 (二音節,多音節形容詞,フレーズ)	下位レベル形容詞

表 3.1 中国語感覚形容詞の分類

⁵³ 朱德熙(1956, 1982)の形容詞の分類の詳細に関しては 2.3.1 節を参照。

⁵⁴ 認知言語学では意味を持たない形式だけの要素は存在しないと仮定している。そのため、“很”も抽象的な意味を担っていると考える。実際、“冷”と“很冷”は意味的に異なっており、後者はより具体的に「とても冷たい」「多少冷たい」などの日本語に対応するものと思われる。同様に、“冷冷”も“冷”とは異なり「ひやっと冷たい」「冷たくて冷え冷えしている」など、より具体的な状況を表すことになる。この意味で複音節形容詞は必ず単音節形容詞よりも下位のカテゴリーを表していると言える。

3.3.2 感覚形容詞のプロトタイプ

朱徳熙(1956:6)は、単音節形容詞が属性形容詞の典型的な成員であり、それ以外の一般的な二音節属性形容詞は周縁的な成員であると指摘しているが、この場合の「典型的な成員」とは認知言語学における「プロトタイプ」ではなく「基本レベルカテゴリー」のことを指しているものと思われる⁵⁵。実際、3.3.1 節の図 3.1 から分かるように、“冷”は基本レベルカテゴリーであり、“冷酷”などはその下位レベルカテゴリーに属していると分析される。そして、プロトタイプは同一レベルのカテゴリー間に見られるものであるため、“冷”の下位レベルを表す形容詞の中にもプロトタイプが存在することを予測する。実際、CJCS コーパスで検索すると、“冷酷”が使われる用例数は 18 件、“冷冰冰”は 8 件、“很冷”は 11 件と少ないのに対し、“冰冷”は 58 件、“冷冷”は 62 件と明らかに多くの用例が認められる。もちろん、使用頻度はプロトタイプを認定する決定的な項目ではないが、ここでは、下位レベルカテゴリーのプロトタイプは“冰冷”および“冷冷”であるとしておく。そのうち、“冷酷”が比喻で用いられている数は 18 件であり、“冷冷”は 60 件、“冷冰冰”は 4 件、“冰冷”は 12 件である。“很冷”が使われる比喻表現は小説の用例を集めている CJCS コーパスで 1 件も見つからなかったが、日常会話では時々見受けられる⁵⁶。

表 3.2 で興味深いのは、メタファーとして用いられている比率のばらつきである。表 3.2 から分かるように、“冷冷”のメタファー用例数が 60 件で、使用例全体の 97%がメタファー的に使われている⁵⁷。ところが、次いで全体の使用例の多い“冰冷”のメタファ

⁵⁵ プロトタイプに関しては、2.1.1 節を参照。

⁵⁶ CJCS コーパスのデータはすべて小説であるが、登場人物の会話の中で“很冷”がメタファー表現として用いられる例は見つからなかった。“很冷”は程度だけを表していて、小説ではより表現力がある“冷冷”“冷冰冰”“冰冷”をメタファー的に使う傾向があるようである。

⁵⁷ ただし、メタファー比率は 100%の“冷酷”は、基本義にも字義通りの意味はないこ

一比率は21%である。つまり、使用頻度の低い“冷冰冰”でさえメタファー比率は50%であるのにもかかわらず、使用頻度の高い“冰冷”がメタファーではなく字義的に用いられるほうがむしろ多いのである。もちろん、このような限られたデータから結論を出すことはできないが、少なくとも、プロトタイプ性はメタファー制約には関与していないことがうかがえる。

	用例数	メタファー用例数	メタファー比率
冷酷	18	18	100%
冷冷	62	60	97%
冷冰冰	8	4	50%
冰冷	58	12	21%
很冷	11	0	0%

表 3.2 “冷”の下位レベルカテゴリー形容詞の用例数とメタファー率

また、連続した色スペクトルが、人間のカテゴリー化の能力により、「赤」「オレンジ」「黄色」などに分節されているのと同様に⁵⁸、連続している温度感覚も、「熱い・暑い」「涼しい」「冷たい」などの感覚に分節されている。分節の仕方は言語によって異なるが、中国語の場合は、“冷”という基本レベルカテゴリーをさらに詳しく、“冷冷”“冷冰冰”“冰冷”などの下位レベルカテゴリーに分節しているのである。温感カテゴリーを分節する際に温度の差がどのような影響を表現に与えているのであろうか。

とから、慣用的なメタファー表現とみなして議論から除外してもよいであろう。“冷酷”は、温度に関する知覚表現である“冷”を含んでいるにもかかわらず、人に対して冷淡で思いやりがないことなどを表すメタファー表現のみで使われるのである。詳細は唐樹华ら(2011:53)を参照。

⁵⁸ 本多(2003:93)を参照。

“冷冷”はプロトタイプであり、属しているカテゴリーの中で最も“冷”の特徴を持っている典型的で一般的な感覚である。一方、“冷冰冰”は“冷冷”よりもさらに低い温度感覚を表しており、対象が「氷」の性質を少し持っているという感覚である。“冰冷”はまるで氷を触るように非常に冷たいという感覚を表し、“冷”という温度感覚をさらに具象化している。このように見ると、具体的な身体経験に基づいた温度感覚の差がメタファー表現に影響している可能性に気づく。このような形容詞がメタファー的に使われるとき、話し手の具体的な身体経験がより強く反映されると考えるのである。

3.3.3 感覚形容詞にみられる身体経験

(14)のような“冷”のメタファー用法が容認されないのに対し、(15)のような“冷冰冰”のメタファー用法が容認されるのは、これらが複音節形容詞であるという音節的な理由ではなく、これらが下位レベルカテゴリーであるという可能性を示唆する。そして、実際、このカテゴリー階層を用いると、(14)が容認されないのにもかかわらず、(15)と(16)が容認される理由を意味的に説明することができるようになる。

(14) a. * 他 的 外表 看起来 冷。(=1a)

3SG GEN exterior look as cold

(彼は見た目が冷たい。)

b. * 他 是 一 个 冷 人。(=2a)

3SG COP one CLF cold person

(彼は冷たい人だ。)

(15) a. 他 的 外表 看起来 冷冰冰 的。(=1b)

3SG GEN exterior look as cold-ice-ice AUX

(彼は見た目が冷たい。)

b. 他 是 一 个 冷冰冰 的 人。(=2b)

3SG COP one CLF cold-ice-ice AUX person

(彼は冷たい人だ。)

(16) a. 他 的 外表 看起来 很冷。(=3b)

3SG GEN exterior look as very-cold

(彼は見た目がとても冷たい。)

b. 他 是 一 个 特别冷 的 人。(=4b)

3SG COP one CLF especially-cold AUX person

(彼は特に冷たい人だ。)

これまで、(15)が容認されるのは複音節形容詞だからであると説明されてきた。しかしながら、そのような観点では、単音節形容詞に強意の副詞が付加されただけの(16)が容認される理由を別途説明しなければならない。それに対し、下位レベルカテゴリーにはメタファー制約が生じないと仮定すると、(15)の“冷冰冰”と(16)の“很冷”“特别冷”が容認されるのは、これらが下位レベルカテゴリーに属しているからであるという統一した説明を行うことができる。(15)の“冷冰冰”や(16)の“很冷”“特别冷”は、“冷”という感覚を細分化した（具体的には、認知主体の主観的な程度が加味された）下位レベルカテゴリーなのである。

もちろん、このようにメタファー制約をカテゴリー階層の問題とただけでは、従来の研究を別の視点から捉え直しただけに過ぎない。重要なのは、なぜ下位レベルカテゴリーにはメタファー制約が課されないのか、逆に、なぜ基本レベルカテゴリーにはメタファー制約が課されるのかに関する認知的動機付けを明らかにしなければならない。

感覚形容詞の下位レベルカテゴリーの音節的特徴は複音節になっていることであるが、意味的特徴はその具体性、身体性にある（cf. 2.1.6 節）。通常、認知主体である概念化者は自身の身体と外界との相互作用を通して生活しているが、下位レベルカテゴリー

はそのような経験を具体的に描写する際に用いられるレベルである。そして、例えば、(15a)や(16a)が容認されるのに対し(14a)が容認されないのは、“冷冰冰”や“很冷”は具体的な身体経験が喚起されるのに対し、“冷”はより抽象化された感覚を表しており、具体的な身体経験を喚起しないからであるところでは説明される。

実際、“冷冰冰”は認知主体が身体を通して得た具体的な感覚、つまり、身体経験に根差しており、“很冷”の場合は、程度副詞によって話し手の主観的判断が加えられ、より具体的な感覚を喚起する表現になっている。それに対し、“冷”が表している感覚はそのような具体的経験から切り離された抽象的な感覚である。

そして、Lakoff and Johnson(1980)が主張するように、メタファー写像が経験に根差しているのであれば、具体的な身体経験を伴わない基本レベルカテゴリーである“冷”が(14a)に示すようにメタファーとして用いられないのも頷ける。メタファー写像には、具体的な身体経験が重要な役割を果たすのである。

本節において、中国語感覚形容詞のメタファー用法に課される制約は、属性形容詞が基本レベルカテゴリーに属しているため、メタファー表現として容認されないと主張した。言い換えると、中国語の感覚形容詞は、話し手の具体的な身体経験に根ざした場合にのみメタファー表現として容認されるのである。

しかしながら、例えば、日本語の「冷たい」は中国語の“冷”と同じ基本レベルカテゴリーの感覚形容詞であると考えられるが、それにもかかわらず、日本語の場合のみ「冷たい人」というメタファー解釈が可能にあるのはなぜであろうか。次節では、中国語感覚形容詞に見られるメタファー制約に関する認知的動機付けについて、認知主体の時間把握の観点から分析を試みる。

3.3.4 把握時間

2.3.1 節で紹介したように、朱徳熙(1956)では、形容詞の単純形式(＝属性形容詞)は“的”を伴わずに連体修飾語として用いると種類を限定する働きをするとしている。例えば、“白紙(白紙)”では、“白”を使って紙の種類を限定し、“黒紙(黒紙)”“紅紙(赤紙)”などではないことを示している⁵⁹。一方、複雑形式(＝状態形容詞)が連体修飾語になる場合は状況を描写することになる。例えば、“雪白的紙(真っ白な紙)”は紙の分類を表すのではなく、紙の状況や様相を描写するのである。

この説明に従えば、“冷水(冷たい水)”のような基本レベル形容詞が連体修飾語になる場合は、水の状況を描写しているのではなく、水の種類を限定していることになる。

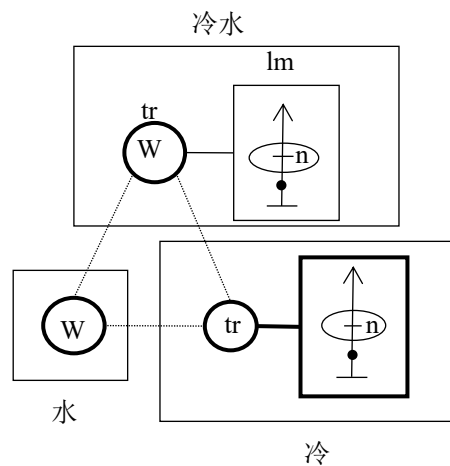


図 3.2 “冷水(冷たい水)”の合成構造

⁵⁹ “白紙(白紙)”に対して“的”を用いた“白的紙(白の紙)”のような表現もある。ただし、この場合は、“白紙”がもつ慣用性は失われ、強調のためにその場で合成された臨時的表現という意味合いが出る。そのため、“白的”は、種類の限定ではなく、発話状況において白さに注意を向けているニュアンスを持っている (cf. 朱徳熙 1956)。

図 3.2 は，“水”と“冷”の概念の合成過程を表しており，下段左の“水（W）”と下段右の“冷”が合成されて上段の“冷水”が成立する。上向きの矢印は温度の高さを測る尺度を表し， n と示された標準温度の領域の下にある黒丸が値の低さを表している。したがって，合成された構造では，“冷”によってプロファイルされるトラジェクター tr に“水”が対応し，その温度が標準値以下の値をとることが表されている。ただし，ここで留意しなければならないのは，“冷水”はその時点での水の状況を表しているのではなく，“水”の下位分類を表しているということである。

それに対し，“冰冷的水（氷のように冷たい水）”のように下位レベル形容詞が連体修飾語になる場合は，水の種類を限定しているのではなく，その時点での水の状況を描写していることになる。そして，一時的な状況を描写するためには必ず把握時間が喚起されなければならない。そのため，図 3.3 では，“冰冷”によって喚起される概念構造の中に把握時間 t （右方向矢印）がベースとして含まれていることに注意してほしい。これは，図 3.2 とは大きく異なる点である。

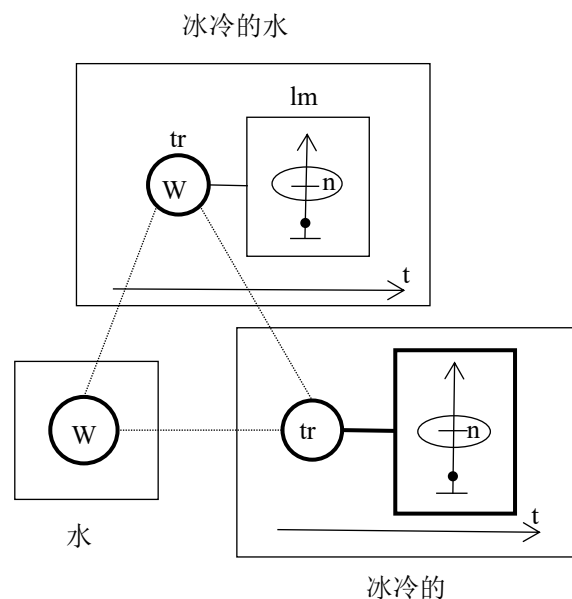


図 3.3 “冰冷的水（氷のように冷たい水）”の合成構造

そして、本章では、形容詞に見られるこのような状況描写と属性（種類の限定）の間には、話し手の捉え方のレベルで時間がベースとして喚起されているか否かの差異があると考ええる。その上で、把握時間がベースとして喚起されている場合にのみ感覚形容詞はメタファーとして解釈を受けることができると考えるのである。つまり、(14a)(14b)がメタファーとして解釈されないのは、基本レベル形容詞である“冷”では把握時間がベースとして喚起されていないからであるということになる。

実際、朱德熙(1956)では、属性形容詞が述語として用いられた場合、事物の恒久的、静態的な属性を表し、状態形容詞が述語として用いられた場合、事物の一時的な状態、つまり動態的な状態を表すと説明されている。その証拠として、基本的には、中国語の属性形容詞の形容詞述語文では、比較や対比などを表す場合を除き、“是”のようなコピュラが必要とされるが、状態形容詞の形容詞述語文では、“是”は一般的に用いられないと考えられる。これは、状態形容詞は一時的な事態を述べているため“是”を用いずに述語とすることができるが、恒久的、静態的な事態を表す属性形容詞の場合は“是”を用いない限り述語とすることができないからである。その理由に関しては後ほど図3.5で検討することにする。

興味深いのは、属性形容詞述語文であっても比較や対比などの特定の意味を表す場合だけは“是”が用いられないという現象である。例えば、属性形容詞述語文の(17a)では“是”が用いられていないが、これはこの文が対比の文脈で用いられているからである。それに対し、(17b)の“怪冷”は状態形容詞に分類されており、対比の文脈がなくとも“是”を用いずに述語文を作ることができる。

これは、対比という行為に含まれる時間的限定性によるものであると考えられる。対比という行為を行う際には、認知主体の認知処理に関わる処理時間が伴われる。もちろん、処理時間は把握時間とは異なる。そのため、メタファー制約に関与する条件を把握時間に限らず、より一般的な時間概念に広げる必要があるように思われるかもしれない。

(17) a. 今儿 冷, 昨儿 暖和⁶⁰。 (朱德熙 1956:26)

today cold yesterday warm

(今日は寒く, 昨日は暖かった。)

b. 今儿 怪冷 的。 (朱德熙 1956:27)

today really-cold AUX

(今日はすごく寒い。)

(以上, 筆者訳)

しかしながら, 以下に説明するように, 対比によって処理時間を導入すると, 把握時間がベースとして喚起されるようになるとここでは考えたい。恒久的な属性を処理時間で区切ることによりある種の時間的限定性が発生し, その時間的限定性は把握時間上でプロファイルされていると考えるのである。

このことは, 通常, 状態形容詞述語文は“是”が不要であるのに対し, 属性形容詞述語文は対比の文脈や“是”などが伴われない限り容認されないことの説明にもなっている。認知言語学では, 通常, 定形節(finite clause)は把握時間がプロファイルされていなければならないとされている⁶¹。これに従うと, 中国語の形容詞述語文にも必ずコピーの“是”が必要であることになる。実際, 属性形容詞述語文は, 通常, “是”によって把握時間のプロファイルを受けている。ところが, 上述のように, 対比の文脈においては“是”が不要になるということは, 対比という行為に把握時間のプロファイルを属性形容詞に与えることができることの証拠になるのである。把握時間をプロファイルしない限り, 文としては容認されないことを予測するからである。例えば, (18a)の属性形容詞“甜”は一時的状態を表さないため“是”なしでは形容詞述語文に用いられないが,

⁶⁰ (17)(20)(21)(23)の下線部は筆者による。

⁶¹ 英語の受動文に一見意味のないように思われる be 動詞が必要なのは, 把握時間をプロファイルするためである(cf. Langacker 1990a)。

(18b)のように，“是”を伴った場合は恒常的な属性を表す形容詞述語文として容認される。また，(18c)のような複音節の下位レベル形容詞は表 3.1 に示したように一時的状態を描写する状態形容詞であるため，“是”なしでも形容詞述語文に用いられる。

- (18) a. * 荔枝 甜。⁶²
 litchi sweet
 (レイシは甘い。)
- b. 荔枝 是 甜 的。
 litchi COP sweet AUX
 (レイシは甘い。)
- c. 荔枝 甜甜 的。
 litchi sweet-sweet AUX
 (レイシは甘い。)

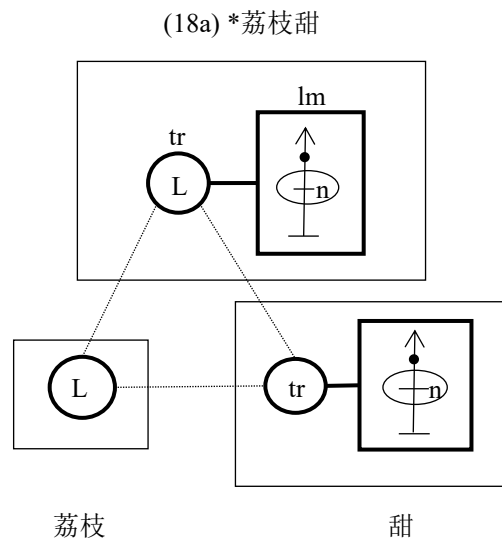


図 3.4 “*荔枝甜 (レイシは甘い。)”の合成構造

⁶² (18a)の容認性に“的”の有無は関与していない。実際，“的”をつけた“*荔枝甜的”も容認されない。

図 3.4 を見てほしい。これは、(18a)の合成過程を示したものである。“荔枝”は左下のプロファイルされた円で示されており、右下ボックスは“甜”の概念構造を表している。この合成構造で留意しておきたいのは、把握時間が全く喚起されていない点である。そして、このように把握時間がプロファイルを受けていない場合は、定形節（文）としては容認されない。

一方、単音節の基本レベル形容詞でも(18b)のように“是”を含む形容詞述語文に入ると容認されるようになる。(18b)に対応する図 3.5 では、“是”が英語の be 動詞に似た役割を果たしていることがわかる。“是”は、最下段の左のボックスに示すように、be 動詞と同じく非常に抽象的な事態を表すが、把握時間 t を表す矢印上の太線は、時間軸上での事態の展開がプロファイルされていることを表す。

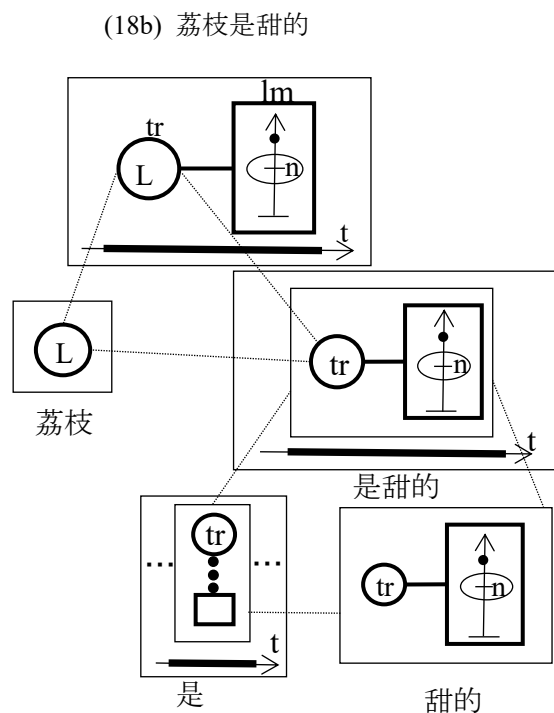


図 3.5 “荔枝是甜的（レイシは甘い）。”の合成構造

この“是”の概念構造と右下の“甜甜的”が合成し、中段右のプロセス的な合成構造が得られる。ここでプロセス的と述べたのは“是”から時間のプロファイルが継承されているからである。さらに、“荔枝”のプロファイルと“是甜甜的”のトラジェクターtrが統合した合成構造が上段の図式である。ここで注意しておきたいのは、“是”は具体的な概念内容を持たないということである。合成構造全体の中で“是”の果たす役割は、be動詞の場合と同じく、合成構造に把握時間のプロファイルをもたらすことだけなのである(cf. Langacker 1990a)。そして、容認されない(18a)と容認される(18b)の合成構造を比較してみると、両者の違いは、把握時間が喚起されプロファイルされているか否かだけであることがわかる。(18b)において、把握時間が喚起されない基本レベル形容詞“甜”が述語文として容認されるようになった理由は、“是”によって時間のプロファイルが与えられたからなのである。

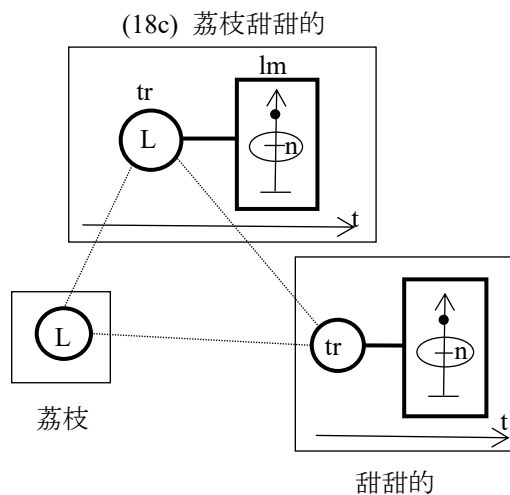


図 3.6 “荔枝甜甜的（レイシは甘い）”の合成構造

最後に、(18c)の“甜甜的”の述語文の概念構造を検討する。図 3.6 の右下に示しているように、複音節の下位レベル形容詞は一時的状態を描写する状態形容詞であるため、“甜甜的”では把握時間がベースとして喚起されている。そのため、“荔枝”と合成し

た後も上段の合成構造に見られるように把握時間が喚起されることになる。ただし、注意しなければならないのは、状態形容詞は把握時間が喚起するもののプロファイルまではしていない点である。そのため、図 3.6 でも把握時間 t の上に太線が描かれていない。これは動詞である“是”とは異なる点である。そして、図 3.6 からわかるのは、定形節として容認される条件は、プロファイルを受けているか否かにはかかわらず、把握時間が喚起されることである。状態形容詞“甜甜的”が“是”を伴わなくても単独で述語として用いられるのは、状態形容詞が把握時間を喚起するためである。

以上の考察をまとめると、中国語の属性形容詞は把握時間を喚起しないため“是”によって把握時間を補う必要がある、それに対し、状態形容詞は把握時間を喚起するため“是”によって把握時間を補う必要はないということである。

実際、属性形容詞では把握時間が喚起されないと考えたほうがよいという証拠もある。2.3.1 節で紹介したように、朱德熙(1956)によると、属性形容詞・状態形容詞は、連用修飾として動詞を修飾して副詞的に用いられる際のふるまいにおいても興味深い差異がみられる。例えば、一部の慣用表現を除き、属性形容詞“静”“圆”“高”は(19a)(20a)(21a)のように動詞を修飾することはできないが、状態形容詞“静静”“圆圆”“高高”は(19b)(20b)(21b)に示すように動詞修飾が可能であるという差異がある。

- (19) a. * 静 (地) 等 他 开 口。
 quiet AUX wait 3SG open mouth
 (彼が話し始めるのを静かに待っている。)
- b. 静静 地 等 他 开 口。
 quiet-quiet AUX wait 3SG open mouth
 (彼が話し始めるのを静かに待っている。)

(20) a. * 花儿 也 不 很多, 圆 (的) 排 成 一个 圈,
 flower also not many round (AUX) arrange become a CLF circle
 不 很 精神, 倒 也 整齐。
 not very lively but also neat
 (花も多くない, 丸く並んで輪になって, 元気ではないが, 整然として
 いる。)

b. 花儿 也 不 很多, 圆圆 的 排 成 一个 圈,
 flower also not many round-round AUX arrange become a CLF circle
 不 很 精神, 倒 也 整齐。 (朱德熙 1956:21)
 not very lively but also neat
 (花も多くない, 丸く並んで輪になって, 元気ではないが, 整然として
 いる。)

(21) a. * 就 和 李六子 高 (的) 爬 到 树 上……
 so with LiLiuzi high (AUX) climb reach tree on
 (そこで李六子と2人で高く木に登る…)

b. 就 和 李六子 高高 的 爬 到 树 上……
 so with LiLiuzi high-high AUX climb reach tree on
 (朱德熙 1956:22)

(そこで李六子と2人で高く木に登る…)

(以上, 筆者訳)

さらに, 2.3.1 節で紹介したように, 朱德熙(1956)は属性形容詞が補語として用いられる際, “已经 (もう)” などのような時間副詞と共起できないとも述べている。例えば, 属性形容詞 “红” “远” は(22a)(23a)に示すように容認されないが, 状態形容詞 “通红” “很远” の場合は(22b)(23b)に示すように容認されるのである。このことは, 属性形容詞では時間的な概念が喚起されないことを示唆している。また, (22a)(23a)に完了を表す助詞 “了” をつけると, (22c)(23c)に示すように容認されるようになるという現象もある。

これは, “了” の助けにより, 属性形容詞 “红” “远” が恒久的属性ではなく一時的な状態を表す状態形容詞になったからであると考えられる⁶³。

- (22) a. * 她 的 眼睛 已经 哭 得 红。
 3SG GEN eye already cry AUX red
 (彼女の目は泣いてもう赤くなっている。)

- b. 她 的 眼睛 已经 哭 得 通红。
 3SG GEN eye already cry AUX bright-red
 (彼女の目は泣いてもう真っ赤になっている。)

- c. 她 的 眼睛 已经 哭 得 红 了。
 3SG GEN eye already cry AUX red PRT_{CS}
 (彼女の目は泣いてもう赤くなった。)

- (23) a. * 那些 杠夫 们 已经 走 得 远。
 those pallbearer PL already go AUX far
 (その棺おけ担ぎの人たちがすでに遠く行った。)

- b. 那些 杠夫 们 已经 走 得 很远。 (朱德熙 1956:35)
 those pallbearer PL already go AUX very-far
 (その棺おけ担ぎの人たちがすでに遠く行った。)

- c. 那些 杠夫 们 已经 走 (得) 远 了。
 those pallbearer PL already go (AUX) far PRT_{CS}
 (その棺おけ担ぎの人たちがすでに遠く行った。)

(以上, すべて筆者訳)

⁶³ ちなみに, 张国宪(2006b:99-106)は, 「変化形容詞」という分類を提案し, 以下の二つの判別式を用いて判別することができるとしている。

NP + 已经 + ____ + 了 (NP はすでに一になった)
 NP + 没 + ____ (NP は一になってない)

これに従うと, “已经红了 (すでに赤くなった)。” と “没红(赤くなっていない)。” という表現は容認されるため, “红 (赤い)” は「変化形容詞」でもあるということになる。

もちろん、朱德熙(1956)が属性形容詞と状態形容詞の問題として取り上げた(19)から(23)の現象は、ここでいう基本レベル形容詞と下位レベル形容詞の差異に対応する。そして、基本レベル形容詞は動詞を修飾できず“已经(もう)”と共起できないという事実、加えて、“了”によって時間的限定性を与えられれば、基本レベル形容詞であっても“已经(もう)”と共起できるようになるという事実は、基本レベル形容詞が把握時間を喚起しないという本章の主張の傍証となるといえる。以上の考察から、基本レベルカテゴリーを表す属性形容詞は、基本的に把握時間を喚起しないと結論付ける。

そして、把握時間が喚起されるかどうかはメタファー表現の容認性にも影響を与える。同じ味覚経験を描写したとしても、(24a)(25a)の基本レベルカテゴリーの属性形容詞“甜”“酸”はメタファー表現としては容認されず、(24b)(25b)の下位レベルカテゴリーの状態形容詞“甜甜”“酸溜溜”はメタファー表現として容認されるが、本研究の主張に従うと、これにも把握時間の有無が関わっているということになる。基本レベル形容詞を用いた場合は、把握時間が喚起されずメタファーとして解釈されないが、下位レベル形容詞を用いた場合には把握時間が喚起されるためメタファーとして解釈されるのである。

(24) a. * 她 的 笑容 甜。

3SG GEN smile sweet

(彼女の笑顔が甘い。)

b. 她 的 笑容 甜甜 的。

3SG GEN smile sweet- sweet AUX

(彼女の笑顔が甘い。)

(25) a. * 他 用 酸 (的) 语气 说。

3SG use sour AUX tone say

(彼はねたんでいるような口調で言う。)

b. 他 用 酸溜溜 的 语气 说。

3SG GEN smile-OTP(liuliu) AUX tone say

(彼はねたんでいるような口調で言う。)

3.3.5 対比と変化の文脈

前述の唐樹華ら(2011)の主張によると、前出の(24a)が容認されないのは単音節形容詞が“是”を含まない述語文に用いられているため構文上の制約違反ということになる⁶⁴。それに対し、本章では、(24a)のメタファー表現が容認されない理由は構文上の制約ではなく、基本レベル形容詞は把握時間をベースとして喚起しないために一時的な状態を表すことができず、そのためメタファー表現として容認されないからであるということになる。

そして、そのように考えると、なぜ基本レベルカテゴリーの属性形容詞でも(26)のような対比の文脈が与えられると容認されるようになるかが時間性の観点から説明できるようになる。

(26) 他 的 外表 冷， 内心 热。(= 3c)

3SG GEN exterior cold interior hot

(彼は外見は冷たいが、心はあたたかい。)

実は、このような対比の場合、認知主体は評価の対象となる「彼の外見」と「彼の内心」という二つの事態を比較するために認知主体がある種のメンタル・スキニングを

⁶⁴ 実際、単音節形容詞を用いた(24a)に“是”を加えた“她的笑容是甜的”(彼女の笑顔は甘い)は、“说出的话也是甜的”(発することばも甘い)などの対比的な文脈を後続させることによって容認されるようになる (cf. 張 2019:168)。

行っていると考えられる⁶⁵。そしてこのメンタル・スキャニングという心的な操作自体に必然的に心的な時間が関わってくるのである。これは、処理時間に沿って行われる主体的な行為であり、そのため、対比文を発すること自体が身体性を伴った具体的な経験になっているのである⁶⁶。つまり、対比の文脈を与えると、基本レベルカテゴリーの属性形容詞においてもある種の時間概念が喚起されるようになるのである。したがって、対比の文脈において属性形容詞が「是」なしでメタファー表現として容認されるのは、図 3.7 に示すように、メンタル・スキャニングによって把握時間 t が喚起され、その一部がプロファイルされるようになるからである。

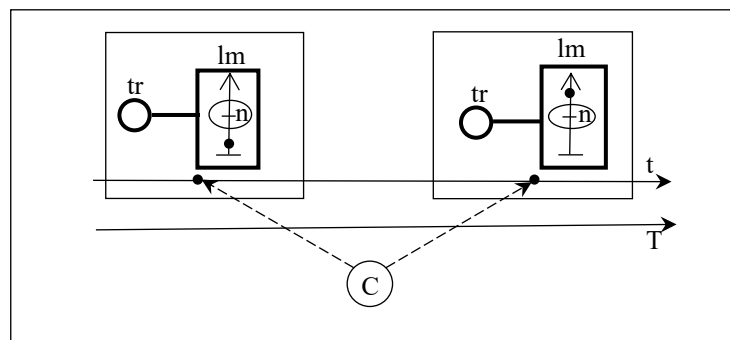


図 3.7 対比のメンタル・スキャニング

メンタル・スキャニングによって導入される処理時間 T は把握時間 t ではないが、前節で議論したように、ここでは、処理時間に沿って行われた対比という行為がある瞬間の属性に焦点を当てるため、把握時間を喚起すると考える。そのため、対比の文脈で用いられている場合には、属性形容詞であってもメタファー写像が認められると考える。

もう一つ興味深い事例を見てみよう。単音節形容詞“冷”を用いた(27)を見てほしい。

⁶⁵ 対比に見られるメンタル・スキャニングについては尾谷(2003)にも考察がある。

⁶⁶ 「処理時間」に関しては、2.1.5 節を参照。

予測される通り単音節形容詞“冷”を用いた(27a)は容認されないが、予測に反して、同様に単音節形容詞“冷”を用いた(27b)は容認されるのである⁶⁷。これはいったいどういうことであろうか。

(27) a. * 他们 的 关系 弄 得 冷。(=9a)

3PL GEN relationship do AUX cold

b. 他们 的 关系 变 冷 了。

3PL GEN relationship turn cold PRTcs

(彼らの仲が悪くなった。)

(27a)と(27b)は基本的に同じ状況を表す点は共通しているが、後者の“变冷了”は変化を強調するという点で異なっている。そこで考えたいのが事物の変化はどのように認識されるかという問題である。通常、変化を認識するためには、認知主体は把握時間に沿って変化前の状態と変化後の状態を認識し、それらを比較し、それらの差異を認識しなければならない。ところが、(27b)はそのような把握時間に沿った変化を表していない。(27b)が表しているのは、2.1.4 節で紹介した虚構変化(fictive change)である。例えば、(28)の日本語の例を見てほしい。(28)は「この道」が実際に「曲がる」という変化したことを表してはいない。ここで表されているのは、認知主体のメンタル・スキャニングによって生じた虚構としての変化なのである。

(28) この道はくねくね曲がっている。

このように見た場合、(27b)は「彼ら」の人間関係における「良い状態」から「悪い状態」

⁶⁷ (27b)の“冷了(冷たくなった)”の“冷”は、张国宪(2006b)では変化形容詞に分類されているが、“冷”に「変化」の意味を付与するのは“了”であると考えため、本研究では、“冷”はそのまま属性形容詞として扱うことにする。2.3.2 節を参照。

への変化というよりは、「彼ら」のその時点での人間関係を虚構的な変化の結果として描写しているのである。そして、この虚構変化には、処理時間に沿って行われる主体的な行為であるメンタル・スキャンニングが存在する。そのため、このような虚構変化を表すこと自体が身体性を伴った具体的な経験になっているのである。虚構変化を表す場合には、基本レベルカテゴリーの“冷”であってもメタファー写像が認められるのは、変化前の状況を想定し、そこから変化後の状況に至る過程自体が具体的な身体経験であるためであると理解される。

図 3.8 を見てほしい。これは(27b)の“冷了 (冷たくなった)”という虚構変化を表したものである。左の図式は「まだ冷たくなっていない」状況を表し、虚構の温度変化（中央の3つの点）を経て、右の図式の「冷たい」状況になっている。この図式に処理時間(T)があるのは、概念化者 C がメンタル・スキャンニングを行う際に実際の時間が必要だからである⁶⁸。これに加えて、状況の変化に内在する把握時間(t)が喚起されている。たとえ虚構的な変化であったとしても、変化する前と変化した後の状態を対比的に認識するためには時間が必要だからである。

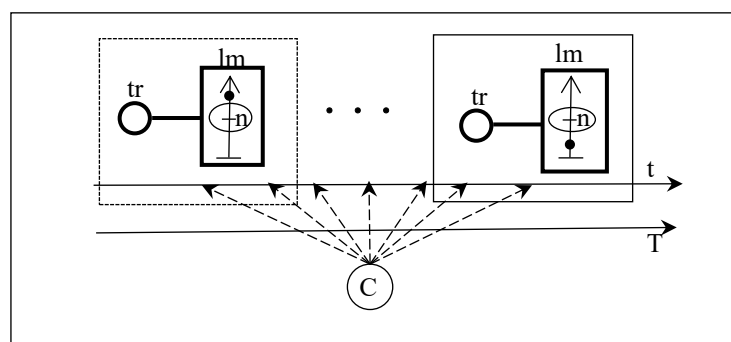


図 3.8 “冷了 (冷たくなった)” の図式化

⁶⁸ この処理時間(T)について、2.3.2 節の张国宪(2006b)図 2.14 も参照。

以上の議論から、属性形容詞がメタファー表現として解釈可能かどうかは、構文が決めているのではなく、その背後にもっと根本的な要因があることがうかがえる。つまり、把握時間の有無という事態の捉え方の問題によって、メタファーとして解釈できるかどうかは制限されていたのである。

実際、“冷”だけではなく、他の属性形容詞に同じ分析が可能である。例えば、属性形容詞“甜”のメタファー解釈は(29a)に示すように容認されない。しかしながら、(29b)の場合、同じ属性形容詞“甜”であるにもかかわらず、後ろに“了”に付けることによりメタファー表現として容認されるようになる。これは、話し手が彼女の「甘くない笑顔」と変化した後の「甘くなった笑顔」を対比することに伴って虚構変化を表すようになったため、把握時間(t)が喚起されるようになったからである。“了”はこの変化を表すために用いられたものである。

(29) a. * 她 的 笑容 甜。 (=24a)

3SG GEN smile sweet

(彼女の笑顔が甘い。)

b. 她 的 笑容 变 甜 了。

3SG GEN smile turn sweet PRT_{CS}

(彼女の笑顔が甘くなった。)

また、有標・無標の現象に関してもここでは統一的な説明を与えることが可能である。有標・無標について、属性形容詞と状態形容詞がメタファー的に使われるときに大きな差異が見られる。属性形容詞をメタファー的に使用するためには、以下のように有標で示される必要がある。“冷”と“暗”の例を見てほしい。①“很冷”“特别暗”のような程度副詞を用いる(30a)(31a)。②“变冷了”“变暗了”のような変化の表現を用いる(30b)(31b)。それ以外にも、③疑問詞“吗”を加えた場合(30c)(31d)や④否定詞“不”を

加えた場合(30d)(31d)などもメタファー制約が課されない。

- (30) a. 他 的 外表 看起来 很冷。 (=3b)
3SG GEN exterior look as very-cold
(彼は見た目がとても冷たい。)
- b. 他们 的 关系 变 冷 了。 (=27b)
3PL GEN relationship turn cold PRTcs
(彼らの仲が悪くなった。)
- c. 他 的 外表 看起来 冷 吗?
3SG GEN exterior look as cold SFP.Q
(彼は見た目が冷たいか。)
- d. 他 的 外表 看起来 不 冷。
3SG GEN exterior look as NEG cold
(彼は見た目が冷たくない。)
- (31) a. 他 的 脸色 看起来 特别暗。
3SG GEN face look as especially-dark
(彼の顔色がすごく暗い。)
- b. 他 的 脸色 变 暗 了。
3SG GEN face turn dark PRTcs
(彼の顔色が暗くなった。)
- c. 他 的 脸色 看起来 暗 吗?
3SG GEN face look as dark SFP.Q
(彼の顔色がすごく暗いか。)
- d. 他 的 脸色 看起来 不 暗。
3SG GEN face look as NEG dark
(彼の顔色が暗くない。)

(30)(31)に例示したように，“冷”“暗”をメタファー表現として用いる場合には，必ず何らかの有標的な表現にならなければならない。例えば，(30a)(31a)のように程度副詞を付加することによって有標的な表現にした場合，属性形容詞はむしろ状態形容詞の性質を持つようになりメタファー表現が容認されるのである。また，これ以外の有標的な表現に関しては，対比の文脈などによって把握時間をベースとして喚起するようになれば，メタファー表現として容認されるようになる⁶⁹。

興味深いことに，“冷冰冰”“暗暗”の場合は，上に挙げたように有標的な表現で示されると逆に容認性が落ちてしまう。これは，“冷冰冰”“暗暗”がすでに具体的なイメージを喚起しているため，さらに「程度(32a)(33a)」「変化(32b)(33b)」「疑問(32c)(33c)」「否定(32d)(33d)」の意味が含まれる有標的表現になることはできないからであると考えられる。ただし，“冷冰冰”“暗暗”の後に何も加えてはいけないわけではなく，あまり具体的な意味を表さない“的”や“地”などは加えることはできる（cf. 沈家煊 1999:302-307）。

(32) a. * 他 的 外表 看起来 很 冷冰冰 的。

3SG GEN exterior look as very cold-ice-ice AUX

（彼は見た目がとても冷たい。）

b. * 他们 的 关系 变 冷冰冰 的 了。

3PL GEN relationship turn cold-ice-ice AUX PRT_{CS}

（彼らの仲が悪くなった。）

c. * 他 的 外表 看起来 冷冰冰 的 吗？

3SG GEN exterior look as cold-ice-ice AUX SFP.Q

（彼は見た目が冷たいか。）

⁶⁹ ここでは，疑問文や否定文も対比の文脈とみなしている。疑問文の背後には，前提との対比や応答の候補同士の対比が潜んでおり，否定文の背後には，対応する肯定文との対比があるからである。

d. * 他 的 外表 看起来 不 冷冰冰 的。
 3SG GEN exterior look as NEG cold-ice-ice AUX
 (彼は見た目が冷たくない。)

(33) a. * 他 的 脸色 看起来 特别 暗暗 的。
 3SG GEN face look as especially dark-dark AUX
 (彼の顔色がすごく暗い。)

b. * 他 的 脸色 变 暗暗 的 了。
 3SG GEN face turn dark-dark AUX PRT_{CS}
 (彼の顔色がすごく暗くなった。)

c. * 他 的 脸色 看起来 暗暗 的 吗?
 3SG GEN face look as dark-dark AUX SFP.Q
 (彼の顔色が暗いか。)

d. * 他 的 脸色 看起来 不 暗暗 的。
 3SG GEN face look as NEG dark-dark AUX
 (彼の顔色がすごく暗くない。)

3.3.6 日本語の形容詞との対照

このように考えると、中国語と日本語の形容詞に見られる差異に関して一つの仮説が立てられるようになる。中国語の場合、日常の具体的な経験から基本レベル形容詞のスキーマが抽出される際に把握時間が完全に捨象されてしまったのに対し、日本語の場合は、抽出されたスキーマにおいて、把握時間が捨象されたスキーマと把握時間が捨象されていないスキーマが共存している可能性がある。図 3.9 と図 3.10 は日本語の「冷たい」を一例として把握時間の有無を図式化したものである。つまり、日本語の「冷たい」には少なくとも二つレベルの「冷たい」があり、把握時間がベースとして喚起されない基本レベル形容詞「冷たい¹」と、把握時間をベースとして喚起する下位レベル形容詞

「冷たい²」があると考えるのである⁷⁰。

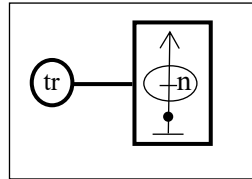


図 3.9 基本レベルカテゴリー「冷たい¹」

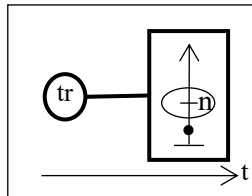


図 3.10 下位レベルカテゴリー「冷たい²」

(34) a. * 他 是 一 个 冷 人。(=2a)

3SG COP one CLF cold person

b. 彼は冷たい人だ。

(34b)に示したように、日本語の「冷たい」がメタファー表現として容認されるのは、中国語と異なり、日本語では下位レベル形容詞「冷たい²」が使われるためである。

このように、日本語では厳密には異なった概念を同じ「冷たい」という形式で表しているのに対し、中国語では両者に異なった形式（基本レベル形容詞“冷”と下位レベル形容詞“冰冷”など）を当てている。そして、メタファーとしての解釈が容認されるのは、一貫して下位レベルカテゴリーの方であるということになる。その理由は、創造的

⁷⁰ これは 2.1.7 節で紹介したシネクドキと呼ばれる現象である。例えば、「ごはん」という語で上位レベルカテゴリーである「食事一般」を指すことも、下位レベルカテゴリーである「炊いたお米」を指すこともある。

なメタファーが、把握時間が関与しない恒常的な属性描写とは相性が悪く、把握時間が不可欠である一時的な状態描写と相性が良いからであろう。

3.3.7 慣習性と創造性

繰り返し指摘しているように、創造性を全く感じられない慣用表現の場合は、“冷笑（冷笑）”“热心肠（世話好きだ）”“硬仗（力ずくの戦い）”“红人儿（人気者）”“心狠手辣（残酷無情だ）”などに見られるように基本レベル形容詞であってもメタファーとして用いることができる。この事実は、メタファーとして用いるためには把握時間を喚起する必要があるという本章の主張からどのように説明されるであろうか。

山梨(2000:209-211)は、一般的な慣用句について、図 3.11 に示される意味の変容のプロセスで説明している。A と B は、問題の言語表現の構成要素の意味を表し、X、Y は、その表現全体の意味を示す。また、これらの要素を囲む太線のボックスは、問題の意味が活性化（＝プロファイル）されていることを示し、破線のボックスは、問題の意味が抑制され背景化されていることを表す。

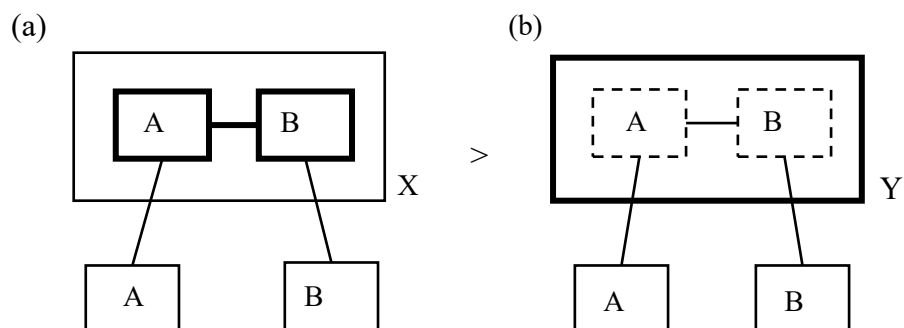


図 3.11 意味の変容のプロセス（山梨 2000:209）

山梨(2000: 211)は、慣用句の意味について「一般に、慣用句の意味は、構成要素の意味からは予測できない形で固定しており、その意味解釈は、具体的な文脈によって影響されないと考えられている」と述べている。「指切する」という慣用句の例を挙げ、一般的には「約束する」を意味し、文字通りに「指を切る」という解釈にはならない。したがって、このタイプの慣用句の意味は図 3.11(b)に示しているように、構成要素からは完全に予測できない総体（＝ゲシュタルト）に変容しているのである。

この説明に従うと、“冷笑（冷笑）”“热心肠（世話好きだ）”“硬仗（力ずくの戦い）”“红人儿（人気者）”“心狠手辣（残酷無情だ）”などのような単音節感覚形容詞が使われる慣用表現は、図 3.11(a)に示される A, B という言語表現の構成要素が活性化されるというわけではなく、図 3.11(b)のように、A と B の意味が背景化され、その表現全体の意味 Y だけが活性化されていると考えられる。つまり、慣用表現においては、それぞれの構成要素の意味は活性化されないということである。したがって、これらの慣用表現の構成要素である“冷（冷たい）”“热（熱い）”“硬（硬い）”“红（赤い）”“辣（辛い）”の意味はプロファイルを受けないということになる。

以上の考察からわかることは、本章で扱っているメタファー制約は、プロファイルされている要素のみに課せられるということである。したがって、たとえ感覚形容詞を構成要素に持っていたとしても、構成要素をプロファイルしない慣用表現の場合、制約の適用範囲外ということになるのである。

例えば、“冷笑（冷笑）”は慣用表現であるため、構成要素“冷”はプロファイルされていない。そのため、“冷笑（冷笑）”はメタファー制約の適用から外される。それに対して、“冷笑（冷笑）”の“笑”を、“*冷说（冷たく言う）”“*冷看（冷たい目で見える）”のように代えた場合には、慣用表現ではないため、“冷”は構成要素としてプロファイルされる。メタファー制約はプロファイルされている要素に課されるため、把握時間を喚起しない基本レベルカテゴリーを表す“冷”はメタファー解釈を許さないということ

になる。

3.4 まとめ

以上、本章では、中国語の基本レベルカテゴリー感覚形容詞のメタファー解釈に見られる制約の認知的要因について考察した。特に、メタファーとして解釈されるためには把握時間を喚起する必要があるという結論は、下位レベルカテゴリーの事態把握、つまり、日常経験における具体的な事態把握がメタファー使用にとって重要であることを主張するものである。

第4章 感覚範疇における擬態形容詞

本章では、日本語の擬態語との比較を通して中国語の感覚に関する擬態形容詞の認知プロセスを明らかにする*。後述するように、中国語の感覚擬態表現は必ず形容詞を伴わなくてはならない。これは日本語の擬態語にはない制約である。結論を先取りすると、本章では、そのような差異が生じるのは、日本語の擬態語では音によって直接に身体的なイメージが喚起されるのに対し、中国語の擬態表現では認知ドメインが未指定のままであり、具体的な概念内容を表すためには、形容詞による認知ドメインの指定が不可欠であるからであると考え。このような理由で合成された形容詞と擬態表現の合成構造をここでは擬態形容詞と名付け、中国語の感覚形容詞を、属性形容詞、状態形容詞、擬態形容詞の3つに分類することを提案する。その上で、属性形容詞は時間的安定性スケール上で最も安定性を持った形容詞であるために名詞に近いのに対し、状態形容詞ではやや安定性が下がり、認知主体の身体的経験を再現することによる動的な認知プロセスが含まれる擬態形容詞は最も動詞に近いと主張する。

4.1 問題提起

一般に、日本語のオノマトペは中国語より顕著に発達していると言われている (cf. 瀬戸口 1982:81)。実際、小野(2017:9)は、日本語のオノマトペに見られる擬音語は中国語に翻訳できるが、擬態語の場合は直訳できず、一般的には意識されることが多いと指摘

* 本章の一部は、第15回国際認知言語学会での口頭発表(Zhang, Xiaolin 2019)に基づいている。また、1.2節で説明したように、本研究で取り扱う現象は、「感覚」を表す中国語の形容詞であるが、その中でも特に本章では、感覚範疇における擬態形容詞を中心に研究を行う。“高高兴兴 (嬉しい)”, “悲戚戚 (悲しい)”などの感情に関する形容詞も擬態形容詞であるが、ここでは「感覚擬態形容詞」に含めない。

している。例えば、(1a)の大雨が降る音を表した日本語の擬音語「ざあざあ」は(1b)の中国語“哗哗”に対応しているが、擬態語である(2a)の「ほかほか」は、(2b)に示すように中国語に翻訳できない。この“乎乎”は、「風の吹く音」や「何かが充満している様子」を表し、“腾腾”は「気体や煙などが上昇している様子」や「ぼんやりしてはっきり見えない状態」を描写するが、擬態語としてこれらを用いた(2b)は容認されない。同様に、(3a)の「つるつる」も(3b)の“溜溜”に訳せない。(4b)の“悄悄”は音や声を立てないという意味を表すが、これも(4a)の擬態語「しん」に対応したものではない。

- (1) a. 雨がざあざあと降る。
b. 雨哗哗地下。
- (2) a. ふかしたてでほかほかのまんじゅう。
b. 刚 蒸 好 的 *乎乎 / *腾腾 的 馒头。
just steam done AUX OTP(huhu) / OTP(tengteng) AUX steamed bread
- (3) a. つるつるした肌。 (岩波書店『広辞苑』第六版)
b. *溜溜 的 皮肤。
OTP(liuliu) AUX skin
- (4) a. 家の中はしんとしている。 (小学館『日中辞典』第3版)
b. 家 里 *悄悄 的。
home in OTP(qiaoqiao) AUX
- (5) a. 刚 蒸 好 的 热乎乎 / 热腾腾 的 馒头。
just steam done AUX hot-OTP(huhu) / hot-OTP(tengteng) AUX steamed bread
b. 滑溜溜 的 皮肤。
slippery-OTP(liuliu) AUX skin
c. 家 里 静悄悄 的。
home in quiet-OTP(qiaoqiao) AUX

ところが、興味深いことに、“乎乎”“腾腾”“溜溜”“悄悄”のような擬態語であって

も、前に“热（熱い）”“滑（滑らか）”“静（静か）”のような形容詞がつくと、(5)に示すように、容認されるようになる。(5)では、ふかしたてのまんじゅうの様態や滑らかな肌の様態、静かな家の状況が生き生きと表現されている。

実は、日本語には「つるつる」や「ほかほか」のように表音的形態素のみによって構成される擬態語が存在するが、中国語の“溜溜”や“乎乎”などは必ず形容詞とともに用いられなければならないという制約がある⁷¹。そして、その理由は、これらの擬態表現は形容詞から切り離されると独立した具体的な意味を表すことができないからであるとされている（cf. 張恒悦 2016:163）。つまり、日本語では、音象徴表現だけで独立した語（擬態語）として扱われるのに対し、中国語の感覚表現では、音象徴表現だけでは独立した語として扱われず、単音節形容詞（A型）を伴わなければ独立した語として扱われないのである⁷²。実際、このような事情から、中国語では擬態表現を擬態語として扱うかは、まだ意見の一致を見ていない（cf. 王力 1943, 朱德熙 1956, 1982, 呂叔湘主編 1999 など）。本章では、上述のような形容詞が必要となる中国語の擬態表現を擬態形容詞と呼び、日本語の擬態語との比較を行い、その上で、両言語の認知プロセスの相違を明らかにする。

4.2 擬態語に関する先行研究

4.2.1 日本語の擬態語に関する研究

日本語オノマトペに見られる音と意味の関係、つまり音象徴性に関する研究は数多く

⁷¹ 本章の研究対象は、感覚を表す擬態形容詞であるため、感情を表す擬態形容詞、例えば、“急急燥燥（いらいら）”“战战兢兢（びくびく）”などは扱わない。

⁷² ここでは呂叔湘主編(1999)に従い、単音節形容詞を“A型”と表記することにする。

あり，中でも村上(1980)，堀井(1986)，田守・スコウラップ(1999)などではかなり詳細な検討が行われてきた。初期のものである村上(1980)では，多変量解析を通じて音素と意味の相関関係を示し，オノマトペにおける音象徴性の存在を明らかにしている。また，堀井(1986)は，擬態語における具体的な音声との対応関係を明らかにしている。具体的には，滑らかな進行を表わす場合には摩擦音（「するする，すらし」など）が多く使われ，急な変化や動きには促音（「さっさ，とっと」など）がよく使われ，震え動く時にはラ行音（「ふらふら，ひらひら，よろよろ」など）がよく現れるなどの例を挙げ，それぞれの音の性質とその組み合わせが様々な音象徴を引き起こすと主張している。さらに，田守・スコウラップ(1999)は，英語と日本語のオノマトペ語彙を詳細に比較し，カ行やサ行の音はきつい印象を与えるが，ナ行やマ行の音は柔らかい印象を与えるなどの音象徴性について検討している。

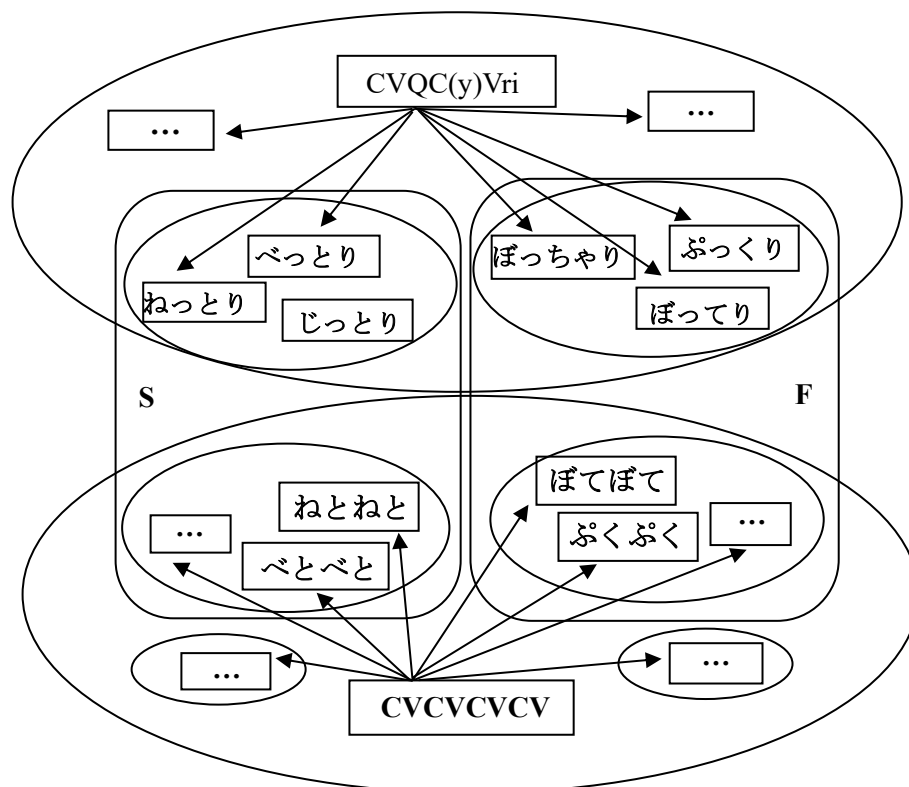


図 4.1 擬態語の形式と意味の対応関係（山梨 2000:245）

擬態語の形式と意味の対応関係をネットワーク図式で表した山梨(2000)は、粘着性を表す S 擬態語のグループと太っている様子を表す F 擬態語のグループに対応する形式同士のつながりを図 4.1 のように図式化している。「べっとり」「ねっとり」「じっとり」は意味から見ると粘着性がある S 領域に属しているが、形式面から見ると CVQC(Y)Vri というスキーマの事例として位置づけられている⁷³。一方、「ぼっちゃり」「ぷっくり」「ぼってり」は同じく CVQC(Y)Vri スキーマの事例となっているが、意味的には太っている様子を表す F 領域に入る。同様に、重ね型である CVCVCVCV の事例である「ねとねと」「べとべと」「ぼてぼて」「ぷくぷく」もそれぞれ S 領域と F 領域に属している。

近年では、浜野(2014)が、日本語オノマトペ表現においては特定の音素や音素の組み合わせが特有の音象徴的意味を喚起するとし、日本語オノマトペの音象徴の体系化を試みている。具体的には、オノマトペの語頭にある/h/が息の吹き出し、/m/がはっきりしない状態や不明瞭さ、/w/が動物や人間の発する音などという意味を象徴するなどと提案している。

認知的な研究では、早川ら(2010)が提案している触覚オノマトペ分布図が代表的である。オノマトペの分布を音の響きから分析すると、響きが近いオノマトペは分布図のなかでも近くに分布している。例えば、感性イメージとの関連が強い第一子音と第一母音の響きが、触感覚イメージと深い関わりがあるなどである (cf. 早川ら 2010:487-490)。

また、最新の研究動向としては、実験的手法を用いたものが多くなってきている。例えば、坂本(2019)はミネラルウォーター、炭酸水、無糖紅茶をベースに濃度と味が異なる 45 種類の飲み物を作成し、それらを被験者に飲んでもらい、オノマトペで味を描写してもらおうという実験を行っている。その結果、坂本(2019)は、「口触り・のど越しのよさは「フワ」「パチ」「ス」「シュワ」がつくオノマトペで表現され、キレは「ビリビリ」

⁷³ C=子音, V=母音, Q=促音, Y=拗音, ri=「り」

の‘b’や「ピリピリ」の‘p’，「ジュワジュワ」の‘zy’に表され，美味しさは甘いイメージの‘h’，さわやかな刺激‘p’などの音で表現される」と結論付けている。

このように，日本語に関していえば，オノマトペに関する研究は非常に多くの蓄積があると言える。

4.2.2 中国語の擬態語に関する研究

日本語とは異なり，中国語では，擬音語に関する研究は多数あるが，擬態語の研究は決して多いとは言えない。その理由は，おそらく，中国語では擬態語を独立したカテゴリーとして認識すること自体，まだ意見の一致を見ていないためであると思われる。例えば，王力(1943)，朱德熙(1956, 1982)，吕叔湘主编(1999)などでは擬態語は一つのカテゴリーとして認められていない。例えば，王力(1943:296-303)では，擬態語をカテゴリーとして認めずに，ある種の擬態語的な用法“绘景法（光景を描く方法）”であるとしている。この“绘景法”には，以下の三つの方法が挙げられている。

①叠字法（字を重ねる方法）

②骈语法（類似した字をペアにする方法）

③赘语法（余剩的な字をつけて四字熟語にする方法）（筆者訳）

一方，吕叔湘主编(1999:716-736)は，“圆乎乎的（まるっこい）”，“绿油油的（青くつやつやしている）”のような形容詞を“形容词的生动形式（生き生きと状況を描写する形容詞の形式）”と呼び，擬音と擬態の要素が含まれている形容詞の形式，品詞性の特徴を明らかにしている。その際，この“形容词的生动形式”を次のように分類している。

①单音節形容詞 A→AA 的:

红红的 (真っ赤), 白白的 (真っ白),
大大的 (でっかい), 圆圆的 (まるっこい)

②单音節形容詞 A+BB→ABB 的:

红通通的 (真っ赤), 圆乎乎的 (まるっこい),
慢腾腾的 (のろのろ), 绿油油的 (青くつやつやしている)

③单音節形容詞 A+BC→ABC 的

美不滋儿的 (浮き浮き), 圆得乎的 (まるっこい),

④单音節形容詞 A+XYZ→AXYZ 的

白不吡咧的 (白っぽい), 干不吡咧的 (かさかさ)
黑不溜秋的 (どす黒い), 滑不叽溜的 (ぬるぬる)

⑤二音節形容詞 AB→AABB 的

干干净净的 (すっきり), 壮壮实实的 (がっしり)

⑥二音節形容詞 AB→A 里 AB 的

慌里慌张的 (あたふた)

⑦二音節形容詞 BA→BABA 的

笔直笔直的 (まっすぐ), 通红通红的 (真っ赤)

(cf. 吕叔湘主编 1999:716-719; 以上, すべて筆者訳)

吕叔湘主编(1999:716-717)は, 单音節形容詞 (A 型) と接尾辞 BB の共起には, 習慣性があり, 方言差や個人差によって接尾辞 BB が異なることがあるとしているが, 接尾辞 BB の前につく单音節形容詞 (A 型) が決まっている場合もある。例えば, “歪歪 (歪んでいる, ふらふら)” は必ず “病 (病気)” の後ろにつき, “病歪歪的 (病気で元気がない

さま)”のようになり,“噴噴(噴き出る)”は必ず“香(芳しい)”の後ろにつき,“香噴噴的(ふんぷんとよいにおいがする)”のように表現される。また,以下に示すように,多くの単音節形容詞(A型)の後ろにつくことができる接尾辞BBもある。

洋洋(雰囲気広がる):喜洋洋的(喜びにあふれる),懶洋洋的(だるそうな),

暖洋洋的(ぽかぽか暖かい)

生生(動きや様子が生々しい):怯生生的(おどおど),活生生的(ぴちぴち),

脆生生的(さくさく)

墩墩(ずんぐりした):胖墩墩的(ずんぐりと太っている),厚墩墩的(分厚い)

(cf. 呂叔湘主編 1999:717; 以上,すべて筆者訳)

また,数は少ないが,“乎乎(充滿している)”,“溜溜(つるつる)”,“巴巴(欠けている,乾いている)”のような接尾辞BBは,様々な単音節形容詞(A型)と共起することができる。例えば,“溜溜(つるつる)”は,“直(まっすぐ),細(細い),酸(酸っぱい),滑(すべすべ),圓(まるい),稀(濃度が薄い)”などの後ろにつくことができ,“乎乎(充滿している)”は,“黄(黄色い),黑(黒い),粉(ピンク),灰(灰色),辣(辛い),湿(湿っぽい),稠(濃い),稀(濃度が薄い),軟(やわらかい)”などの後ろにつくことができる。そして,単音節形容詞(A型)は異なる接尾辞BBと共起することによって,意味やニュアンスを変えるのである(cf. 呂叔湘主編 1999:716-719)。

朱德熙(1956)は形容詞全般に関する研究である。2.3.1 節で紹介したように,朱德熙(1956:3-5)では,形式の観点から形容詞を“简单形式(單純形式)”と“复杂形式(複雜形式)”に分類しているが,朱德熙(1982:73-75)では,意味・用法の観点から形容詞を“简单形式”を属性形容詞,“复杂形式”を状態形容詞とする分類も提案している。以下は,朱德熙(1956)に示された,單純形式と複雜形式の分類とその下位分類である。

(一) 単純形式

I 単音節形容詞 “大（大きい）”，“紅（赤い）”

II 一般の二音節形容詞 “干浄（清潔だ）”，“大方（鷹揚だ）”

(二) 複雑形式

I 重ね型形容詞

① 完全重ね型（AA 型）“小小儿（小さい）”

（AABB 型）“干干净净（清潔だ）”

② 不完全重ね型（A 里 AB 型）“胡里胡涂（惚けている）”

II 接尾成分を伴う形容詞

① 二音節の接尾成分（ABB 型）“热腾腾（ほかほか）”

② 三音節の接尾成分 “黑咕隆咚（真っ暗闇だ）”

III BA 型の形容詞

“霎白（血の気を失い真っ青だ）”，“冰凉（氷のように冷たい）”

IV 形容詞を中心に構成されたフレーズ

① 程度副詞などと形容詞とから成るフレーズ：“很大（とても大きい）”

② 並列された形容詞から成るフレーズ：“又高又大（高く大きい）”

（cf. 朱德熙 1956:3-5; 以上、すべて筆者訳）

朱德熙(1956:5)は、意味の観点から、単純形式が表すものは単純な属性であるが、複雑形式が表すものは“一种量的观念（ある種の量の観念）”，あるいは量の観念を含む属性に対する話者の主観的評価行為と関連をもっていると指摘している。

上述のような朱德熙の形容詞に関する研究を受け、張恒悦(2016:170-171)は、形容詞重ね型 ABB と擬声語重ね型 ABB の関連性を考察し、これらの形式的類似性は、擬声・擬態という文法範疇の投影であると結論付けている。その上で、張恒悦(2016)は中国語の

品詞分類に「擬態詞」というカテゴリーを導入すべきであると主張している。しかしながら、形容詞の他の型、例えば、AB 型“冷酷（冷酷だ）”，AA 型“静静（静かだ）”，BA 型“冰冷（氷のように冷たい）”，AABB 型“热热闹闹（にぎやかだ）”などが擬態詞であるかどうかは言及されていない点で張恒悦(2016)には課題が残されていると言える。

4.2.3 擬態語に関する日中対照研究

擬態語に関する日中対照研究は非常に少ないが、ここでは瀬戸口(1982)と呉川(2005)の二つの研究を紹介する。瀬戸口(1982:81-97)は、日本語で擬音語・擬態語が発達している理由は、もともとの固有の日本語と、漢語から入ってきた語と、それ以外の外来語の導入により、日本語の音型、音感が非常に豊かになったからであると説明している。また、中国語の擬音語・擬態語について、瀬戸口(1982:87-92)は、①成語（战战兢兢／おどおど）、②強調型で表される AABB（慌慌张张／あたふた）、③形容詞 ABB（干巴巴／かさかさ）の三つの分類を提案している。その上で、日本語の場合は擬音語・擬声語が細分化していく傾向にあるが、中国語では包括的になる傾向があると述べている。

さらに、瀬戸口(1984:16)は、中国語の擬音語・擬態語が日本語より少ない理由として、日本語と比べると、中国語の動詞は、より具体的で細かい動作を表すことが多いことを指摘している。例えば、日本語の「見る」に対し、中国語には、“看（見る）”“盯（まじまじ見る）”“瞪（じろっと見る）”“瞭（遠くを見渡す）”“瞟（流し目で見る）”“瞥（横目でちらっと見る）”などがある⁷⁴。つまり、中国語では動作の様態が動詞に語彙的に組

⁷⁴ 瀬戸口(1984:16)では、“瞭（さっと見る）”“瞟（じろじろ見る）”という日本語訳を付けているが、ここでは、辞書や複数の母語話者の判断に従い、“瞭（遠くを見渡す）”“瞟（流し目で見る）”と訳した。

み込まれているため、独立に動作の様態を表す擬態語が発達する必要がなかったということである。

また、呉川(2005:131-134)は、中国語のオノマトペは、音象徴だけでなく、対象の状態に関する意味を表す語と関連している場合が多いため、日本語のように擬音語・擬声語・擬態語・擬容語・擬情語のように分類できない。そのため、中国語のオノマトペは「1字語・2字語・3字語・4字語・6字語」のように字数による分類に頼らざるを得ないとしている。また、この分類に加え、2字以上の語を「疊語型」、接辞が附いた語を「～然型」「～如型」「～乎型」「～若型」などに分類することも提案している。中国語と日本語の対応関係に関しては、日本語の擬態語は、中国語では①形容詞②副詞③動詞（句）④慣用句（四字熟語）などに対応していることも明らかにしている。

4.2.4 まとめ

擬音語・擬態語に関する研究は、日本語の方が中国語より盛んであり、様々な視点から詳しい研究がなされている。それに対し、中国語の場合は、擬音語に関する研究は多数あるのに対し、擬態語に関する研究は非常に少ない。これまで擬態語に関する日中対照研究があまり行われてこなかったのには、中国語には日本語のように独立した擬態語があまり発達していないという事情がある。

4.3 考察

4.3.1 カテゴリー階層構造

日本語の擬態語は多くが副詞であるのに対し、中国語では最初の一字が常に形容詞で

表される⁷⁵。また、日本語では、五感で感じる状態をオノマトペのような音象徴語だけで表現することができるが、中国語の場合は、音象徴語だけでどのような感覚を表すか不明であるため、感覚を表す形容詞が必ず音象徴語に付加されなければならないという特徴がある。本章では、第3章で提案された五感形容詞のカテゴリー階層構造(図3.1)を援用し、日本語と中国語に生じるこのような差異が何を意味しているのかについて検討する。

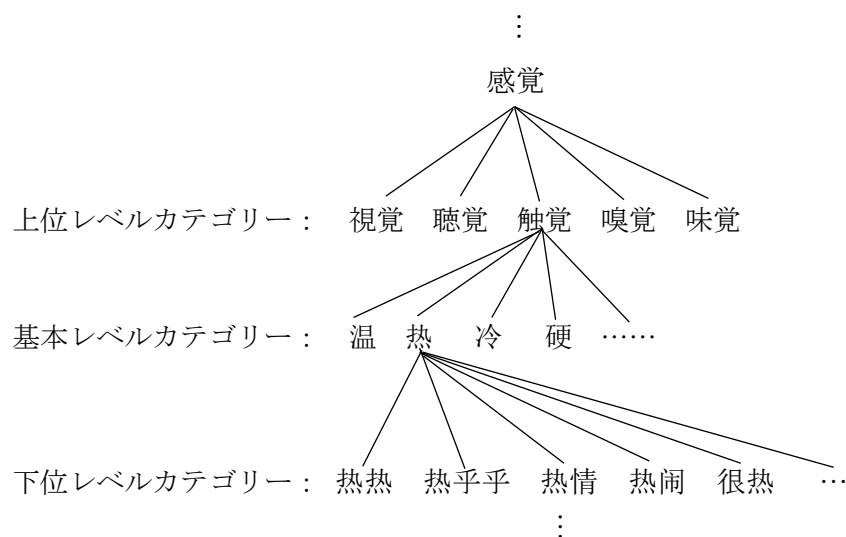


図 4.2 中国語の五感のカテゴリー階層構造 (図 3.1 一部改)

図 4.2 は、触覚のうちの温感を例にとって、五感のカテゴリー階層構造を図示したものである。基本的な感覚を描写する“热”“温”“冷”“硬”などのような単音節感覚形容詞 (A 型) を基本レベルカテゴリーとみなした場合、複音節感覚形容詞 (AA 型, ABB

⁷⁵ Inose(2008: 97-116)によると、日本語の擬態語の一部分は「する」を付けて動詞として使用できる。例：頭がガンガンする。また「な、に、の、だ」を付けて形容動詞として使われる。例：サラサラな髪、髪がサラサラだ。また、中国語では、稀に形容詞ではなく動詞や名詞が表現の最初にくることがある。例えば、“笑呵呵(ニコニコ)”, “水汪汪(みずみずしい)”。さらには、“蹦蹦跳跳(跳んだりはねたりする)” “晃悠悠(ゆらゆらする)” などの擬態動詞もあるが本研究では扱わない。

型, BA 型, AB 型, 很 A 型) などはその下位レベルカテゴリーとして位置づけられる。そして, 本章では, 第 3 章の議論に従って, この基本レベル形容詞は物の性質 (属性) を限定し, その下の下位レベル形容詞は物事の状態を描写すると仮定することにする。

以下は, 感覚を描写する際に擬態表現が用いられた事例である。例えば, (6)は温度感覚, (7)は触覚, (8)は聴覚から得た感覚を描写している。注目しておきたいのは, 中国語では必ず擬態表現の先頭に形容詞が来なければならない, 日本語にはこのような制限がないことである。

- (6) a. ふかしたてでほかほかのまんじゅう。 (=2a)
 b. 刚 蒸 好 的 热乎乎 / 热腾腾 的 馒头。 (=5a)
 just steam done AUX hot-OTP(huhu) / hot-OTP(tengteng) AUX steamed bread
- (7) a. つるつるした肌。 (=3a)
 b. 滑溜溜 的 皮肤。 (=5b)
 slippery-OTP(liuliu) AUX skin
- (8) a. 家の中はしんとしている。 (=4a)
 b. 家 里 静悄悄 的。 (=5c)
 home in quiet-OTP(qiaoqiao) AUX

(6a)の「ほかほか」は, 水蒸気が中から外へ出て上まで広がる様子を表していると言える。なぜなら, 浜野(2014:35, 30, 47-48)によると, 日本語のオノマトペの語頭にある/h/は息が吹き出す様子を表し, 二つ目の子音の位置である C₂ 位置の/k/の意味は, 「上下あるいは, 外から中, または中から外への運動」であり, 母音/-o-a/の音象徴は, 「小さなものが広がるか, あるいは結果として平らになる」ということなのである。そして, この音象徴の意味によって, 対象の熱さが喚起される。それに対し, 中国語の(6b) “乎乎”と“腾腾”はそれぞれ主に「充滿している, 広がっている」と「気が立ち昇る」な

どの意味を表しているが、複数の意味を持っているため、単独のままでは具体的な意味のはっきりしない。“热”と組み合わせられることによってはじめて温感を表していることがわかるのである。逆に、例えば、異なる形容詞と組み合わせられれば、“胖乎乎（ぶくぶく太っている）”“黑乎乎（真っ黒だ）”“雾腾腾（霧が深くてぼんやり見える様子）”“乱腾腾（乱れているさま）”などのように、まったく異なる様々な認知ドメインの意味を表すことも可能となる⁷⁶。

また、(7a)の「つるつる」の音象徴に関しては、浜野(2014:26, 38, 49)に従うと、/r/は「弛緩した表面の様子」、C₂位置の/r/は「回転，流動的な運動」、母音/-u-u/は「小さい突起や泡ができてその状態にあること」を意味するため、弛緩した表面で泡のように流動的な運動をすることであると考えられる。そのため、自然に「滑らかだ」という意味が喚起されるようになる。一方、中国語(7b)の“溜溜”は、水が大量に流れる様子、水滴の音、ぶらつく、ちらりと見るなどの意味を表し、“圆溜溜（ころころ）”“光溜溜（つるつるとして光っている）”“瘦溜溜（ほっそり）”“直溜溜（まっすぐ）”“酸溜溜（酸っぱい）”のように、他の単音節形容詞と共起すると全く異なる意味を表すことができる。そのため、日本語と異なり“溜溜”だけで「滑らか」のイメージを喚起するのは不可能である。“滑”と組み合わせるとはじめて「滑らか」の意味が喚起されるのである。

さらに、浜野(2014:32)によると、/s/は「抵抗のない表面を滑る様子、順調さ、滑らかな運動」などを示すことが多く、そのため、「シーン」は、「滑らかで、音を立てない」という意味があり、「静けさ」を表すとされている。もちろん、「シーン」と「しん」では多少のニュアンスは異なると思われるが、基本的には、(8a)の「しん」にはこの浜野(2014)の説明が当てはまる。一方、(8b)の中国語の“悄悄”は音や声が軽微の様子を表す

⁷⁶ 五感形容詞以外に、例えば、“大（大きい）”“小（小さい）”“深（深い）”“浅（浅い）”“远（遠い）”“近（近い）”などの空間認知の形容詞が“乎乎”“腾腾”などの擬音・擬態を表す語と組み合わせることができない場合もある。

がそれだけでは「静けさ」の意味を成さない。“静”と共起し，“静悄悄”になって初めて静まり返っている状態を表すことができる。

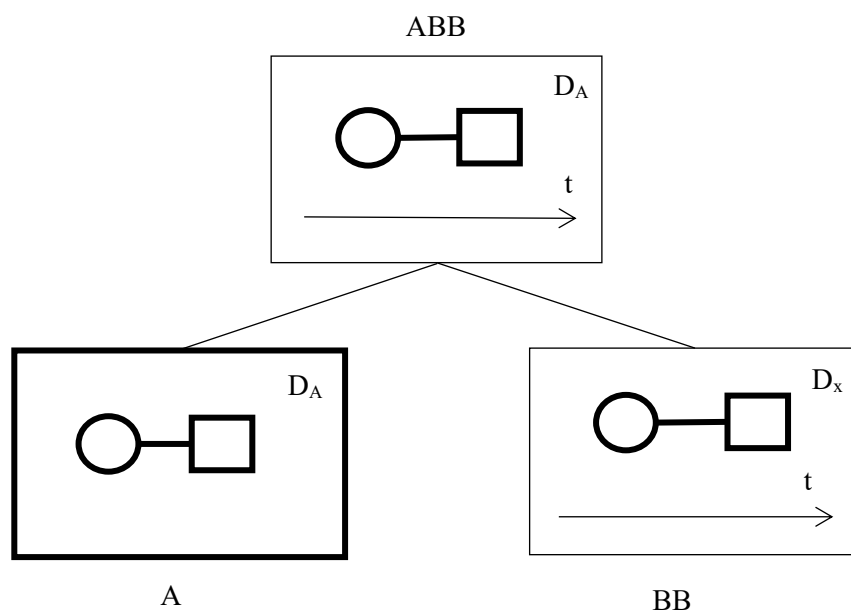


図 4.3 ABB 型の合成構造

上述の考察より，中国語の擬態表現は単独では特定の感覚を表さず，単音節感覚形容詞と合成されることによって感覚の領域である認知ドメインを確定する必要があることがわかる。図 4.3 は，中国語の(6b)(7b)(8b)に見られる ABB 型形容詞の合成構造である。左下の太線ボックスはプロファイル決定子である単音節形容詞（A 型）を表し， D_A はこの形容詞の認知ドメインを表している。一方，右下のボックスは音象徴表現 BB を表し，この認知ドメインは未指定であるため D_x としてある。ただし，音象徴表現 BB においては，後述するように，認知主体の何らかの心的経験が伴われると考えられることからベースとして把握時間 t が喚起されると仮定する。そして，この単音節形容詞（A 型）と音象徴表現 BB が合成されたものが上のボックスに示されている。合成された結果である ABB 型形容詞では，認知ドメイン D_A が指定されると同時に把握時間 t がベー

スとして喚起されている。そして、このような合成過程は、ABB 型形容詞だけではなく、他の AA 型、BA 型、AABB 型などにも生じていると考えられる。ここで、特筆すべき点は、AA 型の合成過程である。図 4.4 を見てほしい。

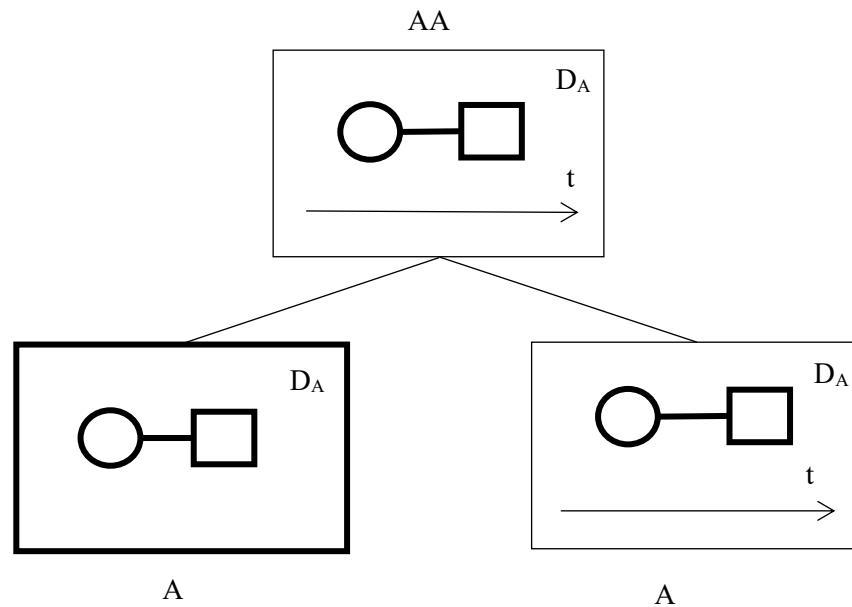


図 4.4 AA 型の合成構造

左下の太線ボックスは前述のように、プロフィール決定子である単音節形容詞 (A 型) を表すが、右下のボックスは AA 型の二番目の A を表している。そして、この二番目の A には、認知主体の主観的な把握が含まれると考えられる。そのように考えるのは、認知主体が感情を込めて“热热的 (熱くて気持ちがいい)”“瘦瘦的 (やせ細っている)”などを発話した場合、“热热一的”“瘦瘦一的”のように二番目の A が長音になるからである。“*热一热的” “*瘦一瘦的”のように最初の A が長音になることはないのである⁷⁷。もちろん、これだけでは証拠として不十分であるが、一つの傍証となる。このよう

⁷⁷ “热热一的”“瘦瘦一的”は日本語の「あつーい」「ほそーい」と同じようなニュアンスである。

に二番目の A に認知主体の主観的な把握が含まれていると考えられることから、図 4.4 の右下のボックス内には、把握時間を表す t が描かれている。

以上の分析から次のことが明らかとなった。擬態表現 BB は、単独では認知ドメインが未指定であるため、必ず単音節形容詞 (A 型) と合成されなければならない。その際、単音節形容詞 (A 型) が合成構造のプロファイルを決めるプロファイル決定子となるため、擬態表現 BB と合成された構造 ABB は形容詞となるが、この擬態形容詞 ABB は擬態表現 BB から把握時間 t を受け継ぐ。品詞横断的な現象から見れば、中国語においては、感覚形容詞 ABB 型だけではなく、擬声語、感情形容詞、動詞の ABB 型も同じように、A というプロファイル決定子により、認知ドメインが指定され、合成構造になっている。例えば、“哗啦啦 (がらっ, ざあっ, さらさら)” “呼噜噜 (ひゅうつ, ごろごろ)” “轰隆隆 (どかん)” などの擬声語, “喜滋滋 (うれしい)” “乐悠悠 (喜ばしい)” “悲戚戚 (悲しい)” などの感情形容詞, “笑嘻嘻 (にこにこしている)” “哭唧唧 (泣いている)” “晃悠悠 (ゆらゆらしている)” などの動詞が挙げられる。

4.3.2 中国語感覚形容詞の再分類

第 3 章では、単音節形容詞 (A 型) は基本レベル形容詞であり、物の性質を限定する属性形容詞であると考えた。そして、単音節形容詞 (A 型) 以外の形容詞は、より具体的なイメージを喚起するため、下位レベル形容詞であると提案している。これを踏まえて、中国語感覚形容詞の分類とそのカテゴリー階層構造を提案した。ここでは、第 3 章、に従いつつも、それをさらに細分化し、属性形容詞、状態形容詞と擬態形容詞に分類した表 4.1 を提案する。

形式	機能	音声	カテゴリー階層
単純	属性形容詞	単音節形容詞 A 型	基本レベル形容詞
複雑	状態形容詞	AB 型“冷酷（冷酷だ）”“热闹（賑やかだ）” “很硬（とても硬い）” など	下位レベル形容詞
	擬態形容詞	AA 型“静静（静か）” ABB 型“甜蜜蜜（甘い）” BA 型“冰冷（氷のように冷たい）” BABA 型“冰冷冰冷（氷のように冷たい）” AABB 型“热热闹闹（にぎやか）” ABAB 型“热闹热闹（にぎやか）” など	

表 4.1 中国語における感覚形容詞の再分類

一般的な二音節形容詞（AB 型）（例えば，“冷酷（冷酷だ）” “热闹（にぎやかだ）” など）は状態形容詞に分類される。その理由は、朱德熙(1956:3-41)も認めている通り、一般的な二音節形容詞は状態形容詞の性質を有し、意味的には描写的な表現であり、限定的なものではないからである。また，“很硬（とても硬い）” “又高又大（高く大きい）” などの AB 型ではないが形容詞を中心に構成された表現は形容詞の意味に程度を加えたり、二つの形容詞の特徴を同時に持っていたりすることから、意味的には、状態形容詞であると考えられる。そして本章では、上述の属性形容詞と状態形容詞を除くすべての形容詞を「擬態形容詞」と分類すべきであると主張したい。

品詞の分類に関しては、多くの先行研究では、上述の擬態形容詞は属性形容詞と状態形容詞とともに「形容詞」という品詞に分類されているが、北京大学中文系现代汉语教研室(1993)と郭锐(2002)では、上述の擬態形容詞を形容詞の下位分類ではなく、「状態詞」という一つの品詞として扱っている。また、張恒悦(2016)は形容詞重ね型 ABB を「擬態詞」という文法範疇としている。

しかしながら、本章は状態形容詞と擬態形容詞を形容詞の下位分類として考えている。

なぜなら、状態形容詞と擬態形容詞は、図 4.3 に示しているように、単音節形容詞（A 型）というプロファイル決定子が不可欠であるため、合成された構造も必ず形容詞となるからである。また、同じように擬態表現である“揺摇晃晃（ふらふら）”“蹦蹦跳跳（ひょこひょこ）”などは擬態動詞と呼ばれている。これらは動詞の下位レベルカテゴリーに属しており、瀬戸口(1984:16)で挙げられている“看（見る）”“盯（まじまじ見る）”“瞪（じろっと見る）”“瞭（遠く見渡す）”“瞟（流し目で見える）”“瞥（横目でちらっと見る）”などのように明らかに擬態を伴った動詞もある。そのため、本章で扱っているような形容詞的な擬態表現だけを特別に状態詞、擬態詞などとすることはできないのである。もちろん、擬態動詞と擬態形容詞を合わせて擬態語（状態詞、擬態詞）などとするのであれば、まだ検討の余地はある。つまり、本章では多数の先行研究と同じく、状態形容詞と擬態形容詞を独立した品詞ではなく、形容詞の下位レベルカテゴリーとして扱うことにする。

4.3.3 状態形容詞と擬態形容詞

先行研究（cf. 北京大学中文系现代汉语教研室 1993, 郭锐 2002, 張恒悦 2016 など）では、すでに述べたように、擬態詞（または状態詞）を状態形容詞から切り離して独立したカテゴリーとするべきであるとしているが、以下では、その理由について認知言語学の観点から考察してみたい。

ここでは、この擬態形容詞の特徴は、対象の状態を客観的に描写するだけでなく、話し手が対象にある種のメンタル・コンストラクション(mental construction)を加え、対象の状態を臨場感を伴って生き生きと描写することにあると考える。ここで言うメンタル・コンストラクションとは、その対象の状態を知覚したときの話し手の身体的経験を

感覚のレベルで再現することである。したがって、この場合の「生き生き」とは、話しの身体的な経験を感覚レベルで再現する様子を表している。

例えば、(9a)では“热闹 (にぎやか)” (二音節形容詞 (AB 型) : 状態形容詞) が連体修飾語として用いられた例であり、(9b)は“热闹” が述語として用いられた例である。(9b)には対比または強調のニュアンスが感じられるが、ともに市場のにぎやかな状態を描写しているだけである。(10)の“甜美 (甘くて美しい)” も同様に、連体修飾語にも述語にもなり、女の子の外見や声を修飾できる。

- (9) a. 这 是 一 个 热闹 的 市场。

this COP one CLF lively AUX market

(これはにぎやかな市場です。)

- b. 这 个 市场 热闹。(那 个 市场 冷清。)⁷⁸

this CLF market lively (that CLF market desolate)

(この市場はにぎやかです。(あの市場はひっそりしている。))

- (10) a. 她 是 一 个 甜美 的 女孩。

3SG COP one CLF sweet-beautiful AUX girl

(彼女は可愛らしい女の子だ。)

- b. 她 不仅 长 得 漂亮, 而且 声音 甜美。

3SG not only look AUX beautiful but also voice sweet-beautiful

(彼女は可愛いだけではなく、声も甘い。)

それに対し、“热热闹闹” (AABB 型 : 擬態形容詞) の場合は、(11a)のように連体修飾語になる場合は容認度が低く、(11b)のように述語として用いられた場合は問題なく容認される。“甜甜蜜蜜”も(12)に示すように、述語になる場合は容認されるが、名詞を修

⁷⁸ (9b)は後ろの文が省略されない場合は、明らかに対比文である。省略された場合も容認されるが、その場合は対比や強調の意味が含まれる。

飾する場合は容認度が落ちる。

- (11) a. ? 这 是 一 个 热热闹闹 的 市场。

this COP one CLF lively-lively AUX market

(ここはにぎやかな市場です。)

- b. 这 个 市场 热热闹闹 的。

this CLF market lively-lively AUX

(この市場はにぎやかです。)

- (12) a. ? 她 是 一 个 甜甜美美 的 女孩。

3SG COP one CLF sweet-sweet-beautiful-beautiful AUX girl

(彼女は甘くて可愛い女の子だ。)

- b. 她 不仅 长 得 漂漂亮亮 的，

3SG not only look AUX beautiful-beautiful AUX

而且 声音 甜甜美美 的。

but also voice sweet-sweet-beautiful-beautiful AUX

(彼女は可愛いだけではなく、声も甘い。)

“热热闹闹”は擬態形容詞であるという本章の分析を取り入れると、(11b)では、話し手がにぎやかな市場を実際に見たときの知覚経験を、まるでその場で経験しているかのように、心内で再現するというメンタル・コンストラクションを対象の状態描写に加えて行っていると考えられる。“热热闹闹”のような AABB 型の擬態形容詞が、名詞の状態を静的に描写する連体修飾ではなく、述語として用いられるほうが一般的なのは、このメンタル・コンストラクションという動的な認知プロセスを含むためである。そして、本章で“热热闹闹”のような形容詞を状態形容詞ではなく擬態形容詞と呼んだほうがよいと考えるのは、このメンタル・コンストラクションの動的な認知プロセスがまさに擬態に当たるからである。

4.3.4 属性形容詞と擬態形容詞

ここでは属性形容詞と擬態形容詞の違いについて検討する。中国語の擬態形容詞と日本語の擬態語に見られるメンタル・コンストラクションとは身体的経験の再現であるため、話し手が実際に経験しえないことを擬態形容詞や擬態語で表現すると違和感のようなものが感じられる。例えば、属性形容詞（A型）を用いた(13a)の“甜酒”は甘い味がついているお酒というお酒の特徴を表しており、日本語の(13b)の「甘いお酒」も同様にお酒の特徴を表しているといえる。そして、これらは擬態形容詞・擬態語ではないため、話し手の経験というよりはむしろ修飾する名詞の性質を表しているといえる。

- (13) a. 我 喝 过 甜 酒。
1SG drink done sweet alcohol
b. 私は甘いお酒を飲んだことがある。
- (14) a. 我 喝 过 甜 丝丝 的 酒。
1SG drink done sweet-OTP(sisi) AUX alcohol
b. 私は沁みるように甘いお酒を飲んだことがある。

それに対し、擬態形容詞を用いた(14a)の“甜丝丝的酒”はお酒の種類ではなく、話し手が甘いお酒を飲んだ際の味覚経験を述べている。つまり、飲んだお酒の甘さを経験として喚起しているのである。接尾辞“一丝丝”は形容詞の後について、「しみわたる」様子を表しているため、(14b)では「沁みるように甘い」と訳したが、その場合、(13b)にはない、話し手の身体に染み渡るような経験を喚起しているようなニュアンスが生じる。

これに対し、話し手の実感を伴った経験を表す(14)を否定文にすると興味深い差異が現れる。属性形容詞（A型）を用いた(15a)は問題なく容認されるが、(15b)には少し違和感がある。もちろん、(15c)のように、「沁みるように甘い」別の飲み物を飲んだ経験が

あり, そのような味のするお酒を飲んだことがないという解釈であれば全く違和感はない⁷⁹。

(15) a. 我 没 喝 过 甜 酒。

1SG NEG drink done sweet alcohol

(私は甘いお酒を飲んだことがない。)

b. ? 我 没 喝 过 甜 丝丝 的 酒。

1SG NEG drink done sweet-OTP(sisi) AUX alcohol

(私は沁みるように甘いお酒を飲んだことがない。)

c. 我 没 喝 过 像 蜂蜜 一样 甜 丝丝 的 酒。

1SG NEG drink done like honey the same sweet-OTP(sisi) AUX alcohol

(私は蜂蜜みたいな沁みるように甘いお酒を飲んだことがない。)

(15b)の違和感の正体は, 実感を伴った経験を表す表現を用いているにもかかわらず, その経験を否定していることによる, ある種の矛盾を感じるからである。つまり, “甜甜的酒”や「沁みるように甘い」という表現からは, 話し手の経験が実感を伴って喚起されることが期待されるため, すでにその経験を持っていることが前提となる。それにもかかわらず, その経験自体を否定すると, この前提が覆されるのである。

同様のことが, 仮定・条件表現の場合にも指摘できる。例えば, 甘い菓という種類について述べている, 属性形容詞(A型)を用いた(16a)は, 問題なく容認されるが, 擬態形容詞“甜丝丝”や擬態語「沁みるように甘い」を用いた(16b)には違和感がある。これは, 否定の場合と同じく, 仮定表現の場合も実際にその甘さを経験していないためである。話し手の身体的な経験を再現する擬態形容詞や擬態語を用いるためには, 先行する

⁷⁹ (15)から(17)は作例であるが, 複数の母語話者によってチェックを受けている。いずれの母語話者も, (15a)(16a)(17a)の単音節形容詞が用いられる文が最も一般的であり, (15b)(16b)(17b)は容認されるが, 違和感があると述べている。

実体験が必要なのである。ただし、(16c)も(15c)と同じように、飴を食べた経験を薬を飲むことに転用するような文脈では容認されるようになる。

(16) (非常に苦い薬を飲んだ後)

- a. 药 如果 是 甜 的, 就 好 了。

medicine if COP sweet AUX just fine AUX

(もし、薬が甘いものだったら、よかったのに。)

- b. ? 药 如果 是 甜 丝丝 的, 就 好 了。

medicine if COP sweet-OTP(sisi) AUX just fine AUX

(もし、薬が沁みるように甘かったら、よかったのに。)

- c. 药 如果 是 像 糖 一样 甜 丝丝 的,

medicine if COP like candy the same sweet-OTP(sisi) AUX

就 好 了。

just fine AUX

(もし、薬が飴みたいに沁みるように甘かったら、よかったのに。)

また、未知のことに関して質問する場合も前述するように、属性形容詞が問題なく容認されるが、対応している擬態形容詞が用いられると容認度が低くなる。(17)を見てほしい。話し手は聞き手の姉の容姿を知らないという前提があり、相手の姉の身長と体つきに対して尋ねる時に、(17a)の属性形容詞“高(背が高い)”“瘦(痩せている)”が使われるのは一般的である。(17b)の擬態形容詞“高高(のっぽで)”“瘦瘦(痩せ細っている)”を入れ替えると容認度がかなり低くなる。なぜなら、擬態形容詞には話し手が実際に経験したことが含まれ、未知のことを尋ねる場合に矛盾するのである。しかしながら、(17c)のように、“那种(そのような)”を入れると、話し手の頭に別の人の様子が思い浮かべられ、経験したことを再現する認知プロセスがあるため、容認されるようになる。

る。

- (17) a. 你 姐姐 长 什么 样子? 个子 高 吗? 瘦 吗?

2SG sister look like what appearance height tall SFP.Q thin SFP.Q

(お姉さんはどんな外見なの? 背が高くて痩せているの?)

- b. ? 你 姐姐 长 什么 样子? 个子 高高 的 吗? 瘦瘦 的 吗?

2SG sister look like what appearance height tall-tall AUX SFP.Q thin-thin AUX SFP.Q

(お姉さんはどんな外見なの? のっぽで、痩せ細っているの?)

- c. 你 姐姐 长 什么 样子? 是 那种 个子 高高 的,

2SG sister look like what appearance COP that kind height tall-tall AUX

瘦瘦 的 吗?

thin-thin AUX SFP.Q

(お姉さんはどんな外見なの? のっぽで、痩せ細っているような人なの?)

以上をまとめると、次のようになる。中国語の属性形容詞である単音節形容詞(A型)は名詞の種類(属性)を表すのに対し、擬態形容詞は話し手の身体的な経験を表す。また、単音節形容詞が使われる場合には、記述対象の持っている客観的な属性が顕在化しているのに対し、擬態形容詞が使われる場合には、話し手の主観が相対的に顕在化している。つまり、擬態形容詞では、記述対象に対して話し手の身体経験再現というメンタル・コンストラクションを行うことになるのである。これは、擬態形容詞による表現が、対象の状態を客観的に表現するのではなく、自分自身の情意や感覚を融合させて表現する、つまり、身体的な経験を喚起することによって認知主体の経験が生き生きと再現することを示唆している。

4.3.5 時間的安全性

擬態形容詞は形容詞の下位分類に属しているが、必ずしも形容詞として使われるとは限らない。ここでは時間的安全性の観点からこの現象について考察する。

Givón (2001:54)は図 4.5 のような時間的安全性(temporal stability)のスケールを提案し、動詞・形容詞・名詞の連続性を唱え、形容詞研究に大きな影響を与えている。図 4.5 は、名詞・形容詞・動詞という順で時間の安全性が推移していることを示している。これによると、形容詞は名詞と動詞の間に位置し、同じ形容詞でも *green* のような属性形容詞は名詞に近く、*sad* のような状態形容詞は動詞に近い。

most stable.....			least stable		
tree,	green	sad,	know	work	shoot
noun	adj	adj	verb	verb	verb

図 4.5 The scale of temporal stability (Givón 2001: 54)

前節で見たように、中国語の擬態形容詞は、身体的経験を喚起することによって経験を生き生きと再現する機能を持っている。そして、このような身体的経験は、永続的な属性と異なり時間的安全性がより低いと考えられるため、時間的安全性スケール上ではより動詞に近い形容詞であると考えられる。

また、図 4.5 のスケールを日本語の各品詞を当てはめると図 4.6⁸⁰のようになる。最も

⁸⁰ Vendler(1957)は、動詞を状態動詞(state verb), 活動動詞(activity verb), 達成動詞(accomplishment verb), 到達動詞(achievement verb)という四種類に分類しているが、これは純粋な動詞分類ではなく、目的語や着点句などが含まれた「動詞句」分類であるため、ここでは、「動詞」のみに着目し、達成動詞を活動動詞として扱うことにする。

高い時間的安定性を持っているのは名詞であり、次いで形容詞、副詞、動詞の順となる。荒(1989)、樋口(1996, 2001)、八亀(2008)に従い、形容詞を特性形容詞と状態形容詞の二つに分類した場合、前者がより時間的に安定しており、後者の方がより一時的な状態を表している。例えば、「大きい」などは特性形容詞であり、形容詞の中ではより時間的な安定性を持ち、名詞に近い位置を占めている。

most stable.....least stable			
木(tree)			
noun			
大きい	冷たい	忙しい	うれしい
{attributive adj.	{{	dynamic adj.	}
	とても	ずっと	あっさり ざあざあ
	degree adv.	temporal adv.	mimicry onomatopoeia
		知っている	散歩する 到着する
		state verb	activity verb achievement verb

図 4.6 日本語における時間的安定性のスケール

また、「冷たい」などの五感形容詞は特性形容詞と状態形容詞の両方に属している。これは、3.3.6 節ですでに議論したように、日本語の「冷たい」は、基本レベルカテゴリーと下位レベルカテゴリーにまたがっているからである。図 4.7 では基本レベルカテゴリーを「冷たい¹」、下位レベルカテゴリーを「冷たい²」として示している⁸¹。そして、この基本レベル形容詞の「冷たい¹」が特性形容詞であり、下位レベル形容詞の「冷た

⁸¹ これはシネクドキと呼ばれる現象と同じである。詳しくは 2.1.7 節および注 70 を参照。

い²」が状態形容詞であるため図 4.6 のように両者にまたがる記述になっている。また、「忙しい」などの形容詞は一時的な状態を表すものの、「うれしい」などの人の感情が持つ時間的限定性よりは時間的に安定して継続的な状況を表している。

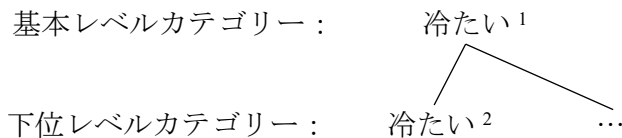


図 4.7 日本語の「冷たい」のカテゴリー階層構造

副詞においても時間的な安定性には差異が見られる。図 4.6 にも示したように、形容詞などを修飾する程度副詞（「とても」「非常に」など）は動詞などを修飾する時間副詞（「時々」「ずっと」など）より時間的に安定しており、擬態語（「あっさり」「のんびり」など）は一般的な副詞よりさらに時間的な安定性が低いと考えられる。擬声語（例えば、「ざあざあ」「どん」）は、音という一時的現象をまねることから動詞に近く、時間的な安定性は非常に低いといえる。

次に、中国語の品詞を図 4.5 のスケールに当てはめてみる。2.3.2 節で紹介したように、“连续统（連続スケール）”として品詞を見た場合、形容詞は名詞と動詞の間にあるため、典型的な形容詞以外に、名詞にかなり近い形容詞や、動詞と似ている性質を持った形容詞もある（cf. 张国宪 2006b: 414）。これに従い、本章は中国語の属性形容詞、状態形容詞、擬態形容詞がスケール上でどのような位置に占めているかを図 4.8 で詳しく説明する。図 4.8⁸²に示しているように、属性を表す基本レベル形容詞（A 型）（“冷（冷たい）”“甜（甘い）”“热（暑い・熱い）”など）は性質を恒常的なものとして捉えており

⁸² 吕叔湘主编(1999:716-719)では挙げている ABC 型, AXYZ 型, A 里 AB 型, BABA 型を紙幅の制限で省略することになる。

名詞に近いと考えられる。このため、これらを(18)に示すように副詞的に用いることができないのである⁸³。

most stable.....						least stable		
树(tree)								
<hr/>								
noun		{ mimicry }				mimicry		
A		AB	BA	ABB	AA	AABB	悲伤(sad)	ABAB
<hr/>								
basic level adj.		{ lower level adj. }				emotional adj.		lower level adj.
<hr/>								
		很(very)		一直(always)		哗哗(sound of water)		
<hr/>								
		degree adv.		time adv.		onomatopoeia		
<hr/>								
		知道(know)		散步(walk)		到达(reach)		
<hr/>								
		state verb		activity verb		achievement verb		

図 4.8 中国語における時間的安定性のスケール

- (18) a. * 他 冷 地 说……
3SG cold AUX say
(彼は冷たく言う…)
- b. * 小王 冷 地 看 了 姐姐 一 眼。
Xiaowang cold AUX look PRT_{CS} sister one glance
(王さんは姉を冷たい目つきでちらりと見た。)
- c. * 她 甜 地 笑 着。
3SG sweet AUX smile PCT
(彼女は甘く笑っている。)

⁸³ “冷笑 (冷たく笑う／冷笑する)” という表現は副詞的用法であり、ここでの主張の反例に当たるかもしれないが、このような表現は慣用表現と見なされるべきである。

d. * 他们 热 地 聊 着。

3SG hot AUX chat PCT

(彼らは熱く話している。)

それに対し，状態を表す下位レベル形容詞の中でも状態形容詞 AB 型“冷酷（冷酷だ）”“热情（熱情的）”などは，(19)のような副詞的な用法も可能である。状態を表す下位レベル形容詞の AB 型である“冷酷（冷酷だ）”“热情（熱情的）”などは事物の性質を一時的な状態として捉えることができるため，スケール上では A 型と擬態形容詞の中間に現れる。

(19) a. 他 冷酷 地 说……

3SG callous AUX say

(彼は冷酷に言う…)

b. 他 热情 地 对 我 说……

3SG enthusiastic AUX with 1SG say

(彼は私と熱っぽく語る…)

また，擬態形容詞の AA 型“静静（静かだ）”“甜甜（甘い）”など，BA 型“冰冷（氷のように冷たい）”“火热（火のように熱い）”など，ABB 型“甜蜜蜜（蜂蜜のように甘い）”“酸溜溜（酸っぱい，ねたむ）”などは，(20)–(22)に示すように副詞としても用いられ，モノの性質を一時的なものとして捉えており，時間的安定性の観点から見るとより動詞に近いと考えられる。

- (20) a. 她 总是 在 他 身旁 静静 地 听 着。
 3SG always stay 3SG beside quiet-quiet AUX listen PCT
 (陈廷一《宋氏家族全传》)

(彼女はいつも彼のそばで静かに聞いている。)

- b. 她 甜甜 地 笑 着, …… (刘慈欣《三体 II》)
 3SG sweet-sweet AUX smile PCT

(彼女は甘く笑っていて…)

- (21) a. 小王 冰冷 地 看 了 姐姐 一 眼。 (李樯《孔雀》)
 Xiaowang ice-cold AUX look PRT_{CS} sister one glance

(王さんは姉を冷たい目つきでちらりと見た。)

- b. …… 救灾 工作 已经 火热 地 展开。
 disaster relief work already fire-hot AUX start
 (《人民日报 1998 年》CCL)

(災害救助活動はすでに盛んに行われていた。)

- (22) a. 她 干脆 甜 蜜蜜 地 靠 在 向 南 的 怀 里。
 3SG just sweet-OTP(mimi) AUX lean against Xiangnan GEN arms
 (石康《奋斗》)

(彼女は直接向南さんの懷に甘えて寄り掛かった。)

- b. 我 酸 溜溜 地 问。
 1SG sour-OTP(liuliu) AUX ask

(私はねたんで聞く。)

(以上, すべて筆者訳)

以下に擬態形容詞の AA 型, BA 型, ABB 型は文の中での容認度から, 時間的安定性のスケール上にそれぞれの位置を分析する。(23)(24)の用例を見てほしい。(23a)(24a)の A 型がメタファー解釈を受けないことは前述のとおりだが, これ以外では, BA 型である“火热(23b)”, “冰冷(24b)”も容認度が落ちている。

(23) a. * 心里 热。

interior hot

(心はあたたかい。)

b. 心里 热乎乎 / 热热 / * 火热 的。

interior hot-OTP(huhu) hot-hot fire AUX

(心はあたたかい。)

(24) a. * 他 的 外表 看起来 冷。

3SG GEN exterior look as cold

(彼は見た目が冷たい。)

b. 他 的 外表 看起来 冷冰冰 / 冷冷 / * 冰冷 的。

3SG GEN exterior look as cold-ice-ice / cold-cold / ice-cold AUX

(彼の見た目が冷たい。)

もちろん, (25)の対比文における“火热, 冰冷 (BA 型)”は容認されるようになることから, “火热, 冰冷 (BA 型)”は語彙的にメタファー使用が認められないということではないことがわかる。

(25) a. 他 的 外表 冷, 内心 热。

3SG GEN exterior cold interior hot

(彼の外見は冷たいが, 心はあたたかい。)

b. 他 的 外表 冰冷, 内心 火热。

3SG GEN exterior ice-cold interior fire-hot

(彼の外見は冷たいが, 心はあたたかい。)

以上からわかることは, “火热, 冰冷 (BA 型)”は対比を表す場合を除いて, 述語になる場に“热, 冷 (A 型)”と同じメタファー制約を受けるということである。したがっ

て, “冰冷” のような BA 型は AA 型, ABB 型より, A 型に近いと言える。

また, (26)–(29)に示した, “热热, 冷冷 (AA 型)” “热乎乎, 冷冰冰 (ABB 型)” “火热, 冰冷 (BA 型)” などの表現からは大きな意味的な差異は感じられないが, 微妙な容認度の差異が生じている。

- (26) a. 热热 的 眼神

hot-hot AUX eyes

- b. 热乎乎 的 眼神

hot-OTP(huhu) AUX eyes

- c. 火热 的 眼神

fire-hot AUX eyes

(熱い目つき)

- (27) a. 他 是 一 个 冷冷 的 人。

3SG COP one CLF cold-cold AUX person

- b. 他 是 一 个 冷冰冰 的 人。

3SG COP one CLF cold-ice-ice AUX person

- c. 他 是 一 个 冰冷 的 人。

3SG COP one CLF ice-cold AUX person

(彼は冷たい人だ。)

- (28) a. 他 热热 地 说。

3SG hot-hot AUX say

- b. 他 热乎乎 地 说。

3SG hot-OTP(huhu) AUX say

- c. 他 火热 地 说。

3SG fire-hot AUX say

(彼は冷ややかに言う。)

- (29) a. 他 冷冷 地 说。

3SG cold-cold AUX say

- b. 他 冷冰冰 地 说。

3SG cold-ice-ice AUX say

- c. 他 冰冷 地 说。
 3SG ice-cold AUX say
 (彼は冷ややかに言う。)

(26)(27)の例はすべて容認される文であることは確かだが，その中でも，(26a)(27a)から(26c)(27c)の順で容認度が高くなる。つまり，(26c)(27c)がもっとも自然な表現であると言える。それに対し，(28)(29)の例もすべて容認される文であるが，(28a)(29a)から(28c)(29c)の順で容認度が低くなる。つまり，(28a)(29a)がもっとも自然な表現ということである。“热乎乎，冷冰冰（ABB 型）”は述語構文と連用修飾構文のどちらの場合においても，容認度が中間領域にあることが分かる。

このように，AA 型，ABB 型，BA 型が使われる構文や文脈において容認度に差が生じるのはなぜであろうか。以下では，その原因を明らかにするために，“冷冷”“冷冰冰”“冰冷”を一例として，構文上でそれぞれどのような成分になる場合が多いかを明らかにする。これらがどのような成分になるかを CJCS コーパスで検索した結果は以下の表 4.2 に示す通りである。

	述語	連体修飾語	連用修飾語	補語	合計
冷冷	5	9	48	0	62
冷冰冰	1	4	3	0	8
冰冷	6	50	0	2	58

表 4.2 “冷冷”“冷冰冰”“冰冷”の成分別用例数⁸⁴

表 4.2 から“冷冷”“冷冰冰”“冰冷”の用例の分布には偏りがあることがわかる。“冷

⁸⁴ “冰冷”だけではなく，“霎白（血の気を失い真っ青だ），通红（真っ赤だ），冰凉（氷のように冷たい），魑黑（真っ暗だ），喷香（旨そうな匂い）”などの BA 型も，連用修飾語より，連体修飾語として使われる場合が圧倒的に多い。

冷”は連用修飾語として使われることが多く、“冰冷”は連体修飾語になる場合が圧倒的に多い⁸⁵。また、“冷冰冰”は連体修飾語にも連用修飾語にもなることができ用例に偏りは見られないが、全体として使用例が少なかった。以上の分布からいえることは、(26)–(29)に見られる容認性の差異は、メタファー制約によるものではなく、そもそも“冷冷”“冷冰冰”“冰冷”が本来的に持っている構文上の分布の差異によるものであることがわかる。

修飾関係において、典型的な連体修飾語は恒久的であり客観的であるが、典型的な連用修飾語は臨時的であり主観的である (cf. 张国宪 2006b: 400)。以上の分析から見れば、図 4.8 に示すように、BA 型は連体修飾語になる場合が多いため、スケール上ではより A 型に近い、AA 型は連用修飾語になる場合が多いため、より動詞に近いと言える。ABB 型は BA 型と AA 型の間位置を占めていることになる。

次は、AABB 型擬態形容詞は(30)(31)に示すように、連体修飾語として用いられるより、述語として使われるのが一般的であるため、図 4.8 のスケール上では、他の擬態形容詞と感情形容詞の間に置かれている。AABB 型“热热闹闹 (にぎやかだ)”“甜甜蜜美 (甘くて美しい)”も(32)に示すように副詞としても用いられる。

(30) a. ? 这 是 一 个 热热闹闹 的 市场。 (=9a)

this COP one CLF lively-lively AUX market

(ここはにぎやかな市場です。)

b. 这 个 市场 热热闹闹 的。 (=9b)

this CLF market lively-lively AUX

(この市場はにぎやかです。)

⁸⁵ CJCS コーパスでは“冰冷”が動詞を修飾する例はなかったが、《汉语形容词用法词典》には、“冰冷地回了一句 (冷ややかに言い返した)”のような例文がある(《汉语形容词用法词典》(2010:13)を参照)。しかしながら、このような例は使用頻度が低い上に、“冷冷”よりも容認度が低いといえるため、“冰冷”には構文上の制約があると考えられる。

- (31) a. ? 她 是 一 个 甜甜美美 的 女孩。(=10a)
 3SG COP one CLF sweet-sweet-beautiful-beautiful AUX girl
 (彼女は甘くて可愛い女の子だ。)
- b. 她 不仅 长 得 漂漂亮亮 的，
 3SG not only look AUX beautiful-beautiful AUX
 而且 声音 甜甜美美 的。(=10b)
 but also voice sweet-sweet-beautiful-beautiful AUX
 (彼女は可愛いだけではなく、声も甘い。)
- (32) a. 1993 年 的 春节 热热闹闹 地 过去 了。
 1993 year GEN Spring Festival lively-lively AUX past PRT_{CS}
 (常珊珊 《1994 年报刊精选》 CCL)
 (1993 年の春節をにぎやかに過ごした。)
- b. 元月 18 日 小成 和 小王 甜甜美美
 January 18 Xiao Cheng and Xiao Wang sweet-sweet-beautiful-beautiful
 地 办 了 婚事。(《人民日报 1993 年》 CCL)
 AUX get PRT_{CS} marriage
 (一月 18 日成さんと王さんが幸せそうに結婚式を挙げた。)
- (以上，筆者訳)

“冷静冷静 (静める，落ち着く)” “凉快凉快 (涼む)” などの ABAB 型は(33)に示すように，動詞としても使われることから，図 4.8 の時間的な安定性のスケール上においてかなり右の位置を占めていると考えられる。

- (33) a. 他 笑 一 笑，叫 葡萄 先 洗洗 脸，
 3SG laugh AUX laugh let Putao first wash-wash face
 喝 口 水，冷静冷静。(严歌苓《第九个寡妇》)
 drink some water cool down-cool down
 (彼はちょっと笑った。葡萄さんに向かって，まず顔を洗って，水を飲んで，落ち着いてと言った。)

b. 大 小姐， 歇 会儿， 凉快凉快 吧。 (凌叔华《绣枕》)

lady rest moment cool off-cool off SFP

(お嬢様， ちょっと休んで， 涼んでください。)

(以上， 筆者訳)

以上のことから，中国語では形容詞が副詞（連用修飾語）として使われるだけではなく，動詞として使われることからわかる。さらに，中国語の形容詞は(34)に示すように事物を指す名詞として用いることもできる。

(34) a. 老实 最 重要。⁸⁶

honest most important

(おとなしいことは最も重要だ。)

b. 他 喜欢 干净。

3SG like clean

(彼はきれい好きだ。)

(沈家煊 1999:283; 以上， 筆者訳)

(34)の“老实（おとなしい）”と“干净（きれいだ）”は属性形容詞（基本レベル形容詞）であり，事物を指す名詞としての機能を果たしている。それに対し，興味深いことに，これらの形容詞を重ね型にした(35)の“老老实实”と“干干净净”は名詞としての機能を持つことができない。そのため，(35)に示すように，これらの文は容認されない。

(35) a. * 老老实实 最 重要。

honest-honest most important

(おとなしいことは最も重要だ。)

⁸⁶ (34)の下線部は筆者による。

b. * 他 喜欢 干干净净。

3SG like clean-clean

(彼はきれい好きだ。)

このことは、基本レベル形容詞（属性形容詞）“老实”“干净”は名詞に近いが、下位レベル形容詞である擬態形容詞“老老实实”“干干净净”は名詞からは遠いことを示している。つまり、Givón (2001)の時間的安定性スケールに従うと、擬態形容詞は形容詞の中でも時間性が不安定な動詞寄りの位置を占めていることになる。

以上から言えるのは、中国語の品詞は、はっきりとした切れ目がないスケール上で示されるような連続性を持っていることであり、このようにある語が複数の品詞にまたがることは、カテゴリー化の柔軟性の観点からも支持されることである。そして、本章で提案した擬態形容詞は、プロファイルの変更により形容詞よりも動詞に近い副詞になることがある一方で、動詞から遠い名詞にはなりづらいということがわかったが、これは、擬態形容詞の時間的安定性が低いことの証左となる。

4.3.6 擬態形容詞の評価性

本章では、擬態形容詞という形容詞の新たな分類を提案しているが、本節では、その評価性について考察する。前節では時間的安定性を基準に形容詞の性質を考察してきたが、形容詞の特徴を分析する際には、これに加えて評価性を考慮に入れる必要がある。実は、2.2.2 節ですで見たとように、八亀(2008)でも時間的限定性（＝時間的安定性）以外に客観性／評価性という軸を分類基準として設けている（cf. 図 2.11）。そして、八亀(2008)の評価性が客観性と対の概念とされていることからわかるように、この評価性とは一般的な意味での価値判断を表す概念ではなく、むしろ一般的な意味での「主観性」

に関わる概念である（cf. 2.1.3 節の脚注 6）。ただし、「主観性」という用語は、第 5 章で考察する事態内視点とほぼ同義で用いられたため、ここでは、誤解を避けるために「主観性」という用語を用いない。そこで、本章では、八亀(2008)にならって「評価性」という用語を用いることにする。ただし、繰り返しになるが、ここでの評価性とは決して価値判断や対象への話し手の評価を表すものではない。

前節では、時間的安定性のスケール上に属性形容詞、状態形容詞、擬態形容詞を位置づけたが、実際には、擬態形容詞は属性形容詞や状態形容詞とは評価性の面でも異なっている。例えば、“干干净净（すっきり）”“漂漂亮亮（美しい、綺麗だ）”など視覚に基づく擬態形容詞と、“大大方方（鷹揚だ、ゆったりとしたさま）”“老老实实（正直だ、大人しい、きまじめだ）”などのような人の性格を評価する擬態形容詞は、描写対象（＝認知客体）の客観的な性質や状態を描写するのではなく、話し手（＝認知主体）の心的な意味づけ作用を表している。この認知主体の心的な意味づけ作用をここでは評価性と呼ぶことにする。

まず初めに、“干干净净（すっきり）”を一例として取り上げ、擬態形容詞のカテゴリー一階層構造を明らかにする。“干净（綺麗だ、清潔だ）”の重ね型である“干干净净（すっきり）”は、図 4.9 に示すように、基本レベルカテゴリーと下位レベルカテゴリーにまたがっていると考えられる。これは、4.3.5 節で取り上げた日本語の「冷たい¹」「冷たい²」と同じで、シネクドキに基づいたカテゴリー化の産物である。

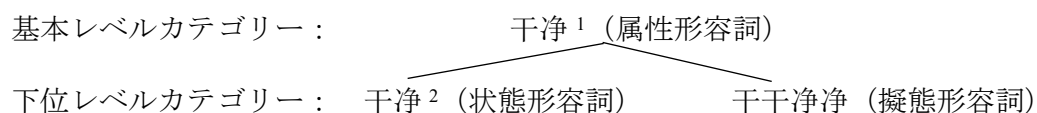


図 4.9 中国語の“干净”のカテゴリー階層構造

例えば、(36)の対比を見てほしい。両者の意味的な違いは、(36a)は種類を限定する属性形容詞“干净¹”であるとみなされるため基本レベルカテゴリーに位置付けられるが、(36b)は一時的な属性を把握する状態形容詞“干净²”であるとみなされるため下位レベルカテゴリーに位置付けられると思われる。つまり、(36)の“干净”は異なる階層に位置付けられるのである。そのため、(36a)はスーツなどの清潔感のある服の種類を表し、(36b)は、服の種類は問わず、きれいに洗濯してある服などを表す。

- (36) a. 干净 衣服
clean clothes
(清潔な服)
- b. 干净 的 衣服
clean AUX clothes
(清潔な服)

- (37) 干干净净 的 衣服
clean-clean AUX clothes
(さっぱりした服)

それでは、この状態形容詞“干净²”(36b)と(37)の擬態形容詞“干干净净”ではどこが異なるのであろうか。両者は、下位レベル形容詞であるという点で共通しており、一見すると差はないように思われるかもしれない。しかしながら、(37)の擬態形容詞の場合は、衣服の単なる状態を形容するのではなく、話し手の身体的感覚経験に基づいた意味づけ、つまり、評価がなされている。言い換えると、(36a)は、「清潔な服」という種類を表し、(36b)の“干净的衣服”は、目の前にある服の状態を描写しているという違いはあるが、両者とも認知客体である「服」が持っている客観的な特徴や状態を表している点は共通している。それに対し、擬態形容詞の(37)は単なる対象の性質を客観的に記述

するだけでなく、認知対象に対する話し手の身体的な感覚経験を喚起すること（メンタル・コンストラクション）を通して対象の評価を行っているのである。つまり、擬態形容詞では認知主体の事態把握への関与がより積極的に行われているのである。

4.3.7 重ね型擬態形容詞の新語

中国語では、二音節形容詞 AB が重畳され、AABB のような重ね型の擬態形容詞になる場合が多くある。例えば、“热闹（にぎやか）”、“冷清（ひっそりしている）”、“干净（綺麗）”、“漂亮（美しい）”、“老实（おとなしい）” が重畳され、それぞれ“热热闹闹”、“冷冷清清”、“干干净净”、“漂漂亮亮”、“老老实实”になる。それに対して、二音節形容詞 AB が重ね型 AABB にならない場合もある。例えば、“温暖（暖かい）”、“冷静（冷静）”、“清洁（清潔）”、“尖锐（するどい）”などは、AABB 型“*温温暖暖”、“*冷冷静静”、“*清清洁洁”、“*尖尖锐锐”になることはない。

興味深いのは、本来容認されないはずの AABB 型の形容詞が新語として容認されるようになることである。例えば、次の(38)から(40)の事例を見てほしい。これらはすべて近年見られるようになった新語である⁸⁷。“可爱（可愛い）”、“温柔（優しい）”、“冷酷（冷酷）”のような二音節形容詞はもともと AABB 重ね型にはなれなかったが、近年、“可爱爱”、“温温柔柔”、“冷冷酷酷”は容認されるようになった。

⁸⁷ これらの事例はインターネットの以下のサイトからとった。

(38a) <https://www.douban.com/group/topic/131589244/>, (38b) http://blog.sina.com.cn/s/blog_6c1216880102yls2.html, (38c) <https://www.zhihu.com/question/347234283>, (39a) <https://tieba.baidu.com/p/6322222653>, (39b) <https://tieba.baidu.com/p/6592918915>, (39c) <https://new.qq.com/omn/20190928/20190928A08EWQ00>, (40a) <https://www.douban.com/group/topic/162433438/>, (40b) <https://www.xiaohongshu.com/discovery/item/5bbb26ab910cf646d41384ca>, (40c) <https://tieba.baidu.com/p/6602788779>

- (38) a. 有的人，看起来 可可爱爱，背后……
 some people look as lovely-lovely behind
 (ある人は見た目が可愛い。裏では…)
- b. 今天，给大家 介绍 一个 可可爱爱 的 男孩子。
 today to everybody introduce one CLF lovely-lovely AUX boy
 (今日は、みんなに可愛い男の子を紹介する。)
- c. 怎样 成为 一个 可可爱爱 的 女孩子？
 how become one CLF lovely-lovely AUX girl
 (どのように可愛い女の子になれるか？)
- (39) a. 我 好 喜欢 温温柔柔 的 男孩子 啊。
 1SG very like tender-tender AUX boy SFP
 (優しい男の子が大好きだ。)
- b. 想 听 点 温温柔柔 的 声音。
 want leason some tender-tender AUX sound
 (優しい声を聞きたい。)
- c. 李英爱 年轻时 好 漂亮 啊， 温温柔柔 的 长相！
 Liyingai young very beautiful SFP tender-tender AUX appearance
 (若い時の李英愛がとても可愛い。優しい顔をしている。)
- (40) a. 王阳明 本身 的 气质 就 是 冷冷酷酷 的…
 Wangyangming oneself GEN temperament exactly COP callous-callous AUX
 (王陽明は持っている素質が冷酷的な感じだ。)
- b. … 冷冷酷酷 的 女孩 变成 了 可爱，阳光，活泼 的 样子。
 callous-callous AUX girl become PRTcs lovely sunshine sprightly AUX look
 (冷酷的な女の子は可愛く，朗らかで，活発的な様子になった。)
- c. 喻言 平常 是 一个 冷冷酷酷 的 人。
 Yuyan usually COP one CLF callous-callous AUX perpon
 (喻言はふだん冷酷な人だ。)

(以上，すべて筆者訳)

なぜこれまで容認されなかった AABB 型が近年では容認されるようになってきたのであろうか。本章では、次のような仮説を立てる。“可愛（可愛い）”，“溫柔（優しい）”，“冷酷（冷酷）”などの AB 型の状態形容詞は，時間的に安定している対象の属性を表す属性形容詞とは異なり時間的限定性を持つため，その場での話し手の評価を表しているように見えるが，本章で定義する意味での評価性はプロファイルしていない。つまり，話し手の気持ち（評価）を表現するという点では物足りなさがあるのである。そこで，このギャップを埋めるために，これらの状態形容詞から擬態形容詞（“可可爱爱”，“温温柔柔”，“冷冷酷酷”）を創造するようになった。擬態形容詞は，状態形容詞と異なり，認知主体（話し手）が対象に対して行ったメンタル・コンストラクションをプロファイルしているのである。

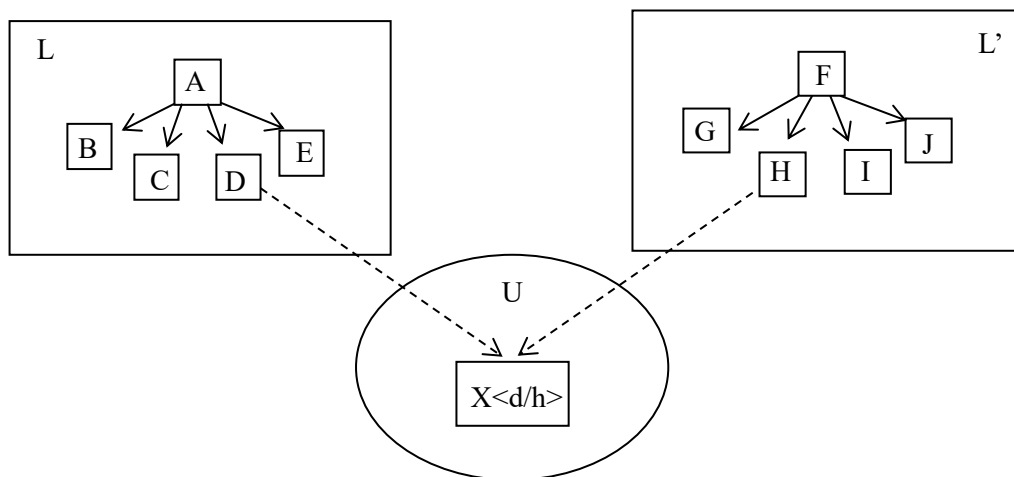


図 4.10 融合ネットワークモデル（山梨 2009:147）

形式面から見た場合，AB 型から AABB 型が新たに創造されるメカニズムは，山梨 (2009)の融合ネットワークモデル(Amalgam Network Model)で説明される（cf. 山梨 2009:147）。山梨(2009)は，日常言語の拡張的な言語表現を規定するネットワークモデルとして，図 4.10 を提案している。

この融合ネットワークモデルは、複数の慣習的な言語的知識の体系（L と L'）と言語使用の文脈（U）からなる。言語的知識の体系は、例えば、図 4.10 の左側のボックス L では、A がスキーマとしての言語ユニット、B-E がこのスキーマの具体事例であり、両者がサブ・ネットワークを構成している、図 4.10 の右側のボックス L' も同様である。実線の矢印は、スキーマからの事例化を示している。楕円は言語使用の文脈（U）であり、この文脈における言語ユニット X<d/h>は、D と H の相互作用によって創発的に発用する融合的な言語ユニットを示している。破線の矢印は創発的な拡張関係を表している（cf. 山梨 2009:147）。

以上の融合ネットワークモデルを用いて、ABAB 型の新語が創造されるメカニズムを図示したものが図 4.11 である。

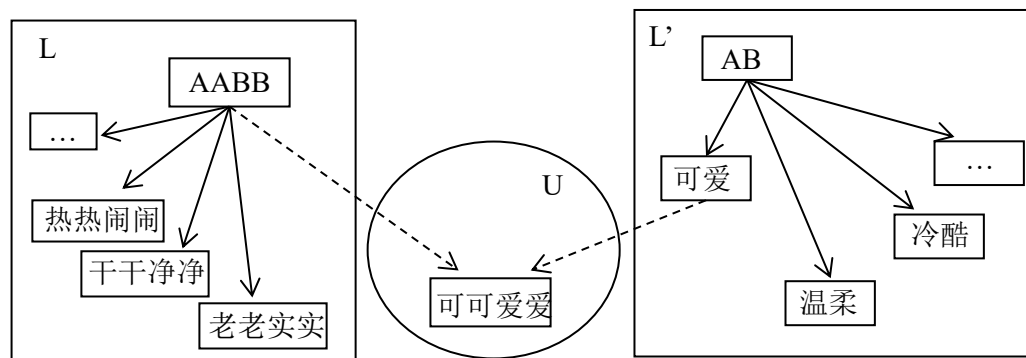


図 4.11 ABAB 型の新語の融合ネットワークモデル

左側のボックス L では、AABB 型の形容詞のスキーマとその事例である“热热闹闹”，“冷冷清清”，“干干净净”，“漂漂亮亮”，“老老实实”などがネットワークを形成している。一方、右側のボックス L' では、AB 型の形容詞のスキーマとその事例である“可爱”，“温柔”，“冷酷”などがネットワークを形成している。そして、この二つのネットワーク L と L' が相互に拡張することによって、新奇な言語使用イベント U で新しい言語表

現“可可愛愛”が拡張事例として発現するのである。もちろん、これは拡張事例であるため多くの中国語話者にとってはいまだに容認されないが、すでに慣習化が始まっており、若者の中では容認性が高まっている。

4.4 まとめ

本章では、日本語との違いを出発点として、中国語の擬態表現の分析を試みた。両者の大きな違いは、日本語では擬態表現が単独で語として成立しているが、中国語では、擬態表現は必ず形容詞を伴わなければならないことである。これは、日本語の場合は、擬態語の音象徴は単独で認知ドメインを喚起できるのに対し、中国語の場合、音象徴だけではイメージが喚起されにくく、具体的な概念内容を喚起する形容詞による認知ドメインの指定が必要であるからであると結論付けた。

これを受けて、本章では、中国語の擬態表現を独立した語とはみなさず、擬態表現に形容詞を加えたことで擬態形容詞になり、一つの形容詞とみなすべきであると提案した。このように新たな形容詞の下位分類を設けるのは、擬態形容詞が属性形容詞や状態形容詞にはない評価性をプロファイルしているからである。この評価性は、対象を形容する際に、認知主体の知覚経験を心内で再構築する認知操作、すなわち、メンタル・コンストラクションを有することによって生じる。

第5章 形容詞一語文の間主観性

日本語には、「痛っ！」のような形容詞の語幹だけが発話される一語文が存在する（cf. 笹井 2005, 富樫 2006, 今野 2012 など）*。それに対して、中国語には、そのような形容詞語幹一語文（＝単音節形容詞一語文）は存在しない。もちろん、感動詞などは一語で文として成立するが、単音節形容詞が単独で文になることはないのである。本章では、このような形容詞語幹だけを用いた表現を形容詞語幹構文と呼ぶこととし、このような形容詞語幹構文がなぜ中国語には存在しないのかという問題に間主観性の観点から考察する⁸⁸。ここで言う間主観とは、事態の知覚や意味は、「個人レベルの主観で成立するのではなく、集団を構成する複数の主観で共同的に成立する」（辻 2013:45）という考え方であり、要するに、「個々の主観は（ある程度）他人との間で共有される」（辻 2013:45）ということである。そして、結論を先取りしておくとして、突然の状況下では、話し手が聞き手の存在を意識する時間がないため独り言として話し手の感覚を表出するが、そのような状況にない場合には、聞き手の存在を意識しながら自身の感覚を表出するという事態把握における他者の存在への配慮がこの現象に深く関わっていると考えられる。

5.1 問題提起

日本語においては、(1a)(2a)(3a)に示すように、話し手が辛い物を食べたときや暖かい部屋から寒い屋外へ出たとき、シャワーの温度が急に上がったときなど、強い刺激を受

* 本章は、関西言語学会第45回年次大会の研究発表（張曉琳 2020）に加筆修正を加えたものである。

⁸⁸ この構文の名称は確立されておらず、他には「語幹単独用法」（富樫 2006）、「イ落ち構文」（今野 2012）、「形容詞語幹型感動文」（清水 2015）などと呼ばれている。

けて思わず感覚を表現する際に、形容詞語幹だけで構成される一語文が用いられることがある (cf. 笹井 2005, 富樫 2006, 今野 2012 など)。一方、中国語においては, (1b)(2b)(3b) が示すように単音節形容詞 (A 型) が単独で一語文になることはない。同様の内容を中国語で表すためには, “啊! (あっ!)”, “哎呦! (あら!)” などのような感動詞単独で表現しなければならない。もちろん, (1c,d)(2c,d)(3c,d)の複音節形容詞 (AA 型, ABB 型) も容認されないことが示しているように, これは単音節に関する音節的な制約ではない。

(1) a. からっ。 (富樫 2006:165)

b. * 辣。

hot

(辛い。)

c. # 辣辣 的。

hot-hot AUX

(ピリピリと辛い。)

d. # 辣滋滋 的。

hot-OTP(zizi) AUX

(沁みるように辛い。)

(2) a. さむっ。 (富樫 2006:165)

b. * 冷。

cold

(寒い。)

c. # 冷冷 的。

cold-cold AUX

(肌寒い。)

5.2 形容詞語幹構文に関する先行研究

5.2.1 日本語の形容詞語幹構文

笹井(2005)は、「熱(あつ)！」「きれい！」などの「形容詞語幹・形容動詞語幹タイプ」を感動文の一つのタイプに位置付け、これらの表現において「感動の対象は形式に示されず、やはり言語場や文脈に拠らなければ感動文としては成立しない」（笹井 2005:12-15）と指摘している。

また、富樫(2006:170)は、これらの語幹単独用法の制約について、(i) 瞬間的・現場的な事態の認識に限られ（結果的に事態は外的なものが多い）、(ii) 程度や度合いの判断は加わらず、(iii) 非伝達的であると主張している。

比較的新しい研究として、今野(2012)は、「イ落ち構文」（＝形容詞語幹構文）について、主語－述語構造（(4)の SC 部）のみを備えており、それよりも構造的に上位に位置する否定辞(Neg)、時制辞(T)、補文化辞(C)の各機能範疇及びその投射（(4)の破線で囲んだ部分）は持たないと述べている（cf. 今野 2012:7）。

(4) [CP ...[TP ...[NegP ...][SC ...]]] (今野 2012:7)

形容詞語幹構文が SC であるとする根拠は、(5)に示すように、主語を取ることができることである。また、Neg, T, C の欠如については、例えば、(6)のように否定化を許さないことから Neg は存在しない、形容詞連用形活用語尾「く」が現れていないことから T も存在しない、主題化と疑問化を許さないことから C も存在しないと説明している。

- (5) a. おじいちゃん若っ。
b. これうまっ。
- (6) a. * 寒くなっ。(cf. 寒っ。)
b. * 臭くなっ。(cf. 臭っ。)

(今野 2012:8)

さらに, 今野(2012)は「イ落ち構文が表す瞬間的現在時における話者の感覚や判断は, 単に表出されたものであり, 他者への伝達を目的としたものではない」(今野 2012:18), 「イ落ち構文は, 話者が, 眼前の事態に対し, 瞬間的現在時の直感的な感覚や判断を表出する私的表現行為専用の構文である」(今野 2012:21)とも述べている。

これに対し, 清水(2015)は上述の今野(2012)の主張と異なり, 形容詞語幹型感動文(= 形容詞語幹構文)は, (7)のように聞き手が存在する場合にも使われると主張している。

- (7) a. (カフェのマスターが髪をほどき, 胸まできた髪を両手で掻き上げるの
を見て)「長っ!」 (ブリヂストン「BLIZZAK」のCM, 石原さとみ)

(清水 2015:129)

- b. [漁師の家に松本潤が招待され, 岩もずくを振る舞われる] 漁師「噛ん
で欲しいんや, この音」松本 (シャキシャキと噛んで)「うまっ!!」

(日本テレビ『24 時間テレビ』「ダーツの旅」2012 年 8 月 25 日放送)

(清水 2015:130)

また, 清水(2015)は(8)のように主語的共起要素を伴うものには, 聞き手が存在するという共通性が見られるとし, 特に, (8b)のような指示詞(コ系, ソ系, ア系)が主語的共起要素に付加されるということは, 形容詞語幹構文が対他性を持つことの傍証となる

と述べている。

- (8) a. (細身のスーツを着た男性に対して)「あつ、スーツ細っ！いいじゃん、
ありだよ、あり」(AOKI「もてスリム」のCM, 上戸彩)

(清水 2015:130)

- b. 「この落花生、でかつ！」(読売テレビ『秘密のケンミン SHOW』「連続
転勤ドラマ」2014年3月27日放送)

(清水 2015:131)

しかしながら、清水(2015)の主張は必ずしも適切であるとは言えない。なぜなら、形容詞語幹構文が他者への伝達を目的としたものではないという今野(2012)の主張は、他者がある場に存在しないことを主張しているわけではないからである。今野(2012)の主張は、この構文は、他者の有無にかかわらず、他者の存在を意識しないで独り言として用いられるということである。したがって、清水(2015)の挙げている反例は、必ずしも反例とは言えない。聞き手の存在を意識していない独り言としても解釈できるからである。例えば、(7a)の場合には、石原さとみはマスターの髪を見て、周囲を意識せずに「長っ！」と独り言として言ったものであり、(7b)も同じように、松本潤は漁師に向かって発言したのではなく、岩もずくを食べる瞬間に、思わずに独り言的に「うまっ！！」と言ったと解釈できる。さらに、(8)の「スーツ細っ！」と「この落花生、でかつ！」において主語や指示詞が出現したとしても、必ずしも他者に向けられた発話とは限らない。実際、独り言で「これ、うま！」と言うことはそれほど不自然ではない。

5.2.2 日本語の形容詞語幹構文に対応する中国語の表現

前節で紹介した日本語の形容詞語幹構文とそれに相当すると思われる中国語の形容詞一語文の相違については、徐一平(2009)の研究がある。以下は徐一平(2009)で挙げられた事例である。

- (9) a. (下手な看護婦からいきなり注射を打たれて)

<日>いたっ！(あるいは「痛い！」)

<中>哎呦！

- b. (薬缶がかなり熱いのを知らないで、触ってしまったとき)

<日>あっっ！(あるいは「熱い！」)

<中>哎呦！

(徐一平 2009:75)

(9)に示すように、日本語においては、「痛い」「熱い」の語幹が用いた「いたっ！」「あっっ！」のような形容詞語幹構文が用いられるような状況において、中国語の場合は、そもそも形容詞を使わず、「哎呦！（あら！）」のような感動詞で表現されることが多い。もちろん、中国語にも“疼（痛い）”“烫（熱い）”のような形容詞による一語文の表現もある。例えば、下手な看護婦からいきなり注射を打たれて“疼！”と言った場合などである。ただしその場合は、「痛い」という気持ちを思わず表出したというより、その看護婦に対して今の注射はあまりにも下手ではないかと訴える表現であり、むしろ日本語の「いたっ！」ではなく「痛いよ！」に相当する（cf. 徐一平 2009:75）。

以上考察したように、中国語の単音節形容詞一語文は厳密には「うまっ！」「さむっ！」のような日本語の形容詞語幹構文には対応していない。実際、日本語の形容詞語幹構文

は自らに向けられた独り言的表現であるのに対し、中国語の単音節形容詞一語文は他者に向けられた表現なのである。次節では、なぜこのような差異が生じるのかについて間主観性の観点から考察を加える。

5.3 考察

5.3.1 公的表現行為と私的表現行為

廣瀬(1997)は必ずしも伝達を目的としない思考の表現行為には「公的表現行為」と「私的表現行為」があり、公的表現行為と私的表現行為を区別する際の最も重要な基準は、「[公的表現行為]では聞き手の存在を考慮に入れるが、[私的表現行為]では考慮に入れない」(廣瀬 1997: 7) 点であるとしている。

今野(2012)は廣瀬(1997)を踏まえ、形容詞語幹構文の私的表現性を示す現象を分析している。まず、(10)に示すように、形容詞語幹構文は、呼びかけ表現の「ねえねえ」や「なあなあ」などと共起できない。

(10) a. * ねえねえ, うまつ。(cf. ねえねえ, うまい (よ)。)

b. * なあなあ, 臭つ。(cf. なあなあ, 臭い (よ)。)

(今野 2012:20)

呼びかけ表現「ねえねえ」や「なあなあ」は、聞き手の存在を前提とし、公的表現を導入し、共起した表現と公的表現を形成するといえる。このことから、(10)の不自然さは、形容詞語幹構文が私的表現に特化しており、公的表現として機能できないことを示すと言える (cf. 今野 2012:20)。

次に、(11)に挙げるように、形容詞語幹構文は質問への返答として用いることができないという特徴がある。

(11) A: このパン食べてみてよ。おいしいでしょ？

B: * うん, うまっ。(cf. うん, うまい (よ)。)⁸⁹

(今野 2012:20)

(11)の対話におけるBは、Aの質問に対する返答を与えること、すなわち、公的表現行為を期待されている。ところが、Aの質問に対する返答としては、形容詞語幹構文は容認されない。この事実も、当該構文が私的表現であり、公的表現としての機能は持たないことを示している (cf. 今野 2012:20)。

このほか、今野(2012)では、形容詞語幹構文は、「言う」の直接話法補部として使われるが、伝達動詞「伝える」の直接話法補部に現れたら容認できないこと、形容詞の丁寧体で用いることができないこと、皮肉として用いることができないことなどが示されている (cf. 今野 2012:20-21)⁹⁰。

上述の観察をもとに、中国語の単音節形容詞一語文の表す表現行為を確認しておこう。(12)では、話し手がまず呼びかけ表現の“哎”で聞き手の注意を促し、“辣!” “臭!” のような形容詞で自分の感覚を相手に訴えている。このような表現が可能であることから、“辣” “臭”などは属性形容詞であるが、中国語の単音節形容詞一語文は公的表現で

⁸⁹ もちろん、いったん「うん」と返答として、その後、独り言的に「うまっ。」と発せられる場合はありうる。

⁹⁰ 廣瀬(2016:339)では、公的表現行為を遂行する「聞き手志向表現」の典型例として、①「よ」や「ね」などの終助詞、②「立ちなさい・立ってください」などの命令・依頼表現、③「おい」などの呼びかけ表現、④「はい・いいえ」などの応答表現、⑤「です・ます」など丁寧体の助動詞、⑥「(だ) そうだ」などの伝聞表現などが挙げられている。

あるということがわかる。

- (12) a. 哎， 辣！
 hey hot
 (ねえ， 辛い (よ)。)
- b. 哎， 臭！⁹¹
 hey smelly
 (ねえ， 臭い (よ)。)

同様の結論が(13)からも導き出される。(13)は，A の質問に対して B が単音節形容詞一語文で返答した例であるが，返答文として容認されるということは，“甜”が公的表現であることを示唆している。

- (13) A: 这 个 橙子 甜 吧？
 this CLF orange sweet SFP.Q
 (このオレンジあまいでしょう？)
- B: 嗯， 甜。
 yes sweet
 (うん， あまい。)

それでは，中国語には，日本語の形容詞語幹構文に対応するような私的表現がないのであろうか。(14)と(15)を見てほしい。(14)の“辣辣的！”“臭臭的！”は呼びかけ表現の後に複音節形容詞 (AA 型) が用いられた事例であるが，この場合は容認されない。

⁹¹ 呼びかけ表現“哎”の後に現れるのは，五感以外の単音節形容詞であれば，容認されない場合がある。例えば，“*哎，好！（ねえ，いいよ。）”。しかしながら，“哎，这个好！（ねえ，これいいよ。）”のように，指示代名詞“这个（これ）”を加えたら容認されるようになる。

同様に、(15)は質問に対する返答の中で複音節形容詞（ABB 型）“甜滋滋”が用いられた事例であるが、これも容認されない。

(14) a. * 哎， 辣辣 的！
hey hot-hot AUX
(ねえ，とても辛い（よ）。)

b. * 哎， 臭臭 的！
hey smelly-smelly AUX
(ねえ，とても臭い（よ）。)

(15) A: 这 个 橙子 甜 吧？
this CLF orange sweet SFP.Q
(このオレンジあまいでしょう？)

B: * 嗯， 甜滋滋 的。
yes sweet-OTP(zizi) AUX
(うん，沁みるようにあまい。)

このことから、“辣辣的！”“臭臭的！”“甜滋滋的。”のような複音節形容詞一語文は、日本語の形容詞語幹構文と同様の私的表現であると言える。つまり、“甜”のような単音節形容詞は、一見、日本語の形容詞語幹構文に対応する表現であるように見えるが、実際には、公的表現であるため、全く異なった構文であると言える。一方、私的表現である“甜滋滋”のような複音節形容詞のほうがむしろ日本語の形容詞語幹構文と同様の機能を果たすと言える。

本節で導入した公的表現・私的表現という考え方をを用いると、本章の冒頭で挙げた事例(1a,b)(2a,b)(3a,b)の容認性の差異は問題なく説明できる。以下、(16)(17)(18)は冒頭の(1a,b)(2a,b)(3a,b)の再録である。

(16) a. からっ。(=1a)

b. * 辣。(=1b)

hot

(辛い。)

(17) a. さむっ。(=2a)

b. * 冷。(=2b)

cold

(寒い。)

(18) a. あつつ。

b. * 烫。

scalding

(熱い。)

本節での議論に従うと、(16a)(17a)(18a)の日本語の形容詞語幹構文は私的表現であるため、聞き手の存在を考慮しない瞬間的な感覚表出として容認される。一方、(16b)(17b)(18b)の中国語の単音節形容詞一語文は公的表現であり、聞き手の存在を考慮するため、独り言のように発話される場合は容認されないということになる。

問題となるのは、本章冒頭の(1c,d)(2c,d)(3c,d)である（以下に再録）。(19)(20)は擬態形容詞であるが、複音節形容詞一語文であるため本節の議論に従えば私的表現である。そして、もしこれらが私的表現であるのならば、当然、日本語の形容詞語幹構文(16a)(17a)(18a)と同じように容認されることを予測する。ところが、この予測に反して、実際にはこれらの一語文は容認されないのである。この問題に関しては次節 5.3.2 節において主体性・主観性・間主観性の観点から探求することにする。

(19) a. # 辣辣 的。(=1c)

hot-hot AUX

(ピリピリと辛い。)

b. # 冷冷 的。(=2c)

cold-cold AUX

(肌寒い。)

c. # 烫烫 的。

scalding-scalding AUX

(熱すぎる。)

(20) a. # 辣滋滋 的。(=1d)

hot-OTP(zizi) AUX

(沁みるように辛い。)

b. # 冷飕飕 的。(=2d)

cold-OTP(sousou) AUX

(風がピューピューと寒い。)

c. # 烫乎乎 的。

scalding-OTP(huhu) AUX

(やけどしそうに熱い。)

5.3.2 主体・主観・間主観

事態認識の主体性(subjectivity)の問題に関して、中村(2016)は、「寒い！」のような感覚を吐露するような表現が用いられた場合には、図 5.1 に示すように、認知の主体 S と認知客体 O が分化していないと述べている (cf. 中村 2016:45) ⁹²。

⁹² 中村(2016)の用語では「観る側 S」と「観られる側 O」であるが、ここでは用語を主体 S と客体 O に統一する。また、主体性の問題に関しては 2.1.3 節を参照。

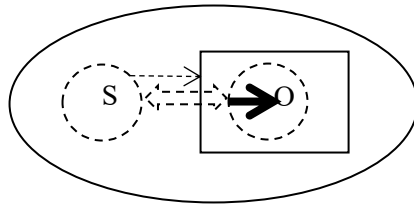


図 5.1 「寒い！」の図式化（中村 2016:45）

破線の円 O は認知の客体としての身体を表しており、太線矢印で表された「寒い」という感覚がその身体 O の中に生じている。もちろん、「寒い！」と認知主体 S が発話した場合、その身体的感覚を認知主体 S が外から眺めて描写しているわけではないので、認知主体を表す円 S と認知客体を表す円 O は独立したものではない。これらの円が破線で描かれているのは S と O が独立した実体ではないことを表している。そのため、通常は S と O のインタラクションを表す二重双方向矢印も、S と O が未分化であるため明確なインタラクションとは言えない。この二重双方向矢印が破線で示されているのはそのためである。また、同様の理由で、S から O を含んだ事態に向けられた認識を表す矢印も破線で示されている。

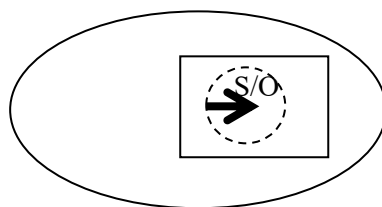


図 5.2 「寒い!」「さむっ!」の図式化

上述の図 5.1 で示された事態把握は、図 5.2 に示すように、S と O を重ねて表示することも十分可能である。図 5.2 は、「寒い!」という表現の意味構造の認知主体と認知客体の未分化性を表し、破線の円が S/O と表示されているのは両者が未分化であることを

表している。そして、以上の中村(2016)の考察を援用して、平岩(2019:5)は、「さむっ！」などの日本語の形容詞語幹構文も、図 5.2 で示された事態把握を表す構文であると主張している。

その上で、平岩(2019)は図 5.3 の図式を示し、「(クーラーの設定温度を下げたのを見て) 寒い (よ)。」という場合は、グラウンド G の中の聞き手 H が話し手 S に意識（認識）されるため、図 5.3 のような事態把握になっていると主張している⁹³。

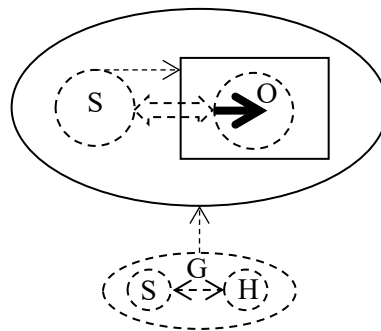


図 5.3 「寒い (よ)。」の図式化 (平岩 2019:5)

また、王・上原(2019)は、中国語の形容詞の重ね型の「主観性」について以下のように考察している。例えば、(21)は、人間の身長や外見、事物の属性を表した事例であるが、このような場合にも、形容詞の重ね型（下線部）が用いられることがある（cf. 王・上原 2019: 16）。

- (21) a. 这个 大 眼睛 的 小 妹妹，身子 瘦瘦 的，矮矮 的……
 this CLF big eyes AUX little girl body thin-thin AUX short-short AUX
 （この目の大きい女の子は、体はやせっぽちで、背は低くて…）

⁹³ ただし、図 5.3 は、話し手 S が認識の場（実線の楕円）の外にあることは認知主体と客体が明確に分化されたことを意味するが、そのことと主体と客体が未分化であることの間に整合性が保てないように思われる。

- b. 这 便 是 那 大厦, 低低 的, 长长 的……

this just COP that building low-low AUX long-long AUX

(これがそのビルで, 低く, 長く…)

- c. 他 永远 是 那样 瘦瘦 的, 高高 的, 永远 是

3SG forever COP like that thin-thin AUX tall-tall AUX forever COP

那样 清清秀秀 的……

like that elegant-elegant AUX

(彼はずっとあのよう痩せ細っていて, のっぽで, ずっとあのよう

きりっとしていて…)

(王・上原 2019: 16 一部略; 以上, すべて筆者訳)

まず, (21a)における身長, 体型などの属性は, 通常は, 短期間で変化するものではないため「状態」とは言えず, 属性形容詞を用いて表現するものである⁹⁴。実際に, 属性形容詞を用いて表現することも可能である。しかしながら, こうした人物が持っている属性を, 重ね型“矮矮的”, “瘦瘦的”を用いることで, 「その時その場」で概念化者が「その女の子」に対して感じているような状態として表現している。言い換えれば, 重ね型を用いることで, 客体側における属性・特徴が概念化者と関わる形で主体的に解釈されるようになり, 主体化が起きているということである。次に, (21b)はビルの高さや大きさといった属性に言及する文で, より臨時性を持たない表現である。それにもかかわらず, ここで重ね型が用いられているのは, ビルの属性に関して概念化者が感じ取った状態として描写しているからである。ここでも, (21a)と同様に主体化のプロセスが起きている。さらに, (21c)は(21a)と同様に人間の身長などの外見に言及する例であるが, “永远(ずっと)”という副詞修飾があるため, 恒常的な属性を表していると考えられるが, それにもかかわらず, これを重ね型にすることより, 概念化者の認知操作の顕在

⁹⁴ 王・上原(2019)は朱德熙(1956)の分類に従い, 「性質形容詞」という用語を用いている。

化，すなわち主体化が生じていると考えられる（cf. 王・上原 2019: 16-17）。

王・上原(2019:19)は，中国語の属性形容詞とその重ね型に見られる主体化(subjectification)について Langacker(1990a)の主体化の図式を援用し，以下のような図式を提案している⁹⁵。

王・上原(2019)の説明はこうである。属性形容詞を表す図 5.4(a)では，X が属性形容詞によって捉えられる客体とその属性との客観的な関係を表す。この事態把握では認知主体を含むグラウンド G は最大スコープの外から客体の属性を捉えている。一方，中国語の形容詞重ね型の事態把握を表した図 5.4(b)では，認知主体である G がプロファイルされ，この G と OS 上の客体 X' との関係 X' が前景化されている⁹⁶。

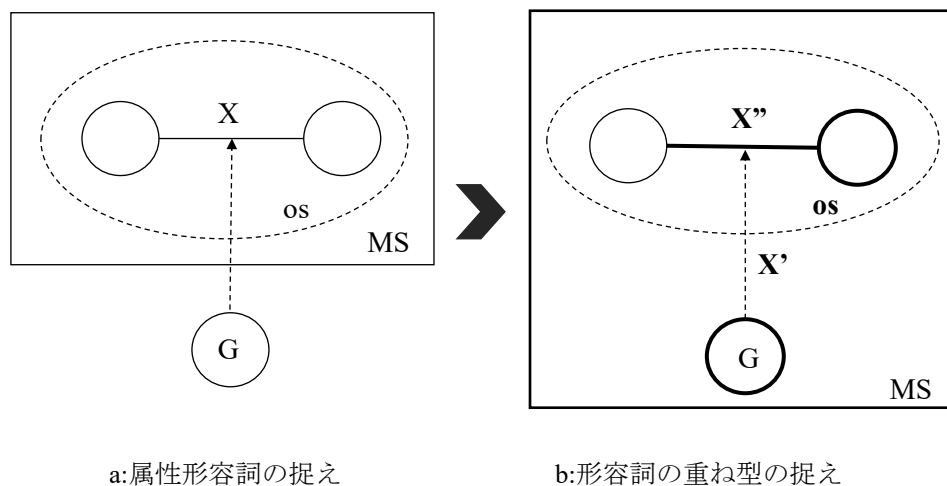


図 5.4 主体化の図式化（王・上原 2019: 19）

その結果，X''の意味が認知主体 G の解釈へ傾斜するようになり，X''が表す関係の量や程度などが強調される，または，極端な場合，客体としては実在しないような関係（状

⁹⁵ 主体化に関しては，2.1.4 節を参照。

⁹⁶ Langacker(2008)の理論では，オフステージにある要素は定義上プロファイルできない。そのため，図 5.4(b)の G がプロファイルされているという点も吟味すべき課題である。

況・状態)がまるで実在する関係 X”であるかのように捉えられることになる⁹⁷。このように形容詞の重ね型をとらえたうえで、王・上原(2019)は、従来から指摘されてきた重ね型が持つ臨場性・現場性などの意味特徴は、X’によって客体が G と深く関わることで、関連する発話の時空が喚起された結果であり、言い換えれば、主体化に伴う意味拡張の結果であると主張している (cf. 王・上原 2019: 19)。

以上の王・上原(2019)の議論を踏まえて、(21c)の属性形容詞“瘦, 高 (痩せていて、背が高い)”とその重ね型“瘦瘦的, 高高的 (痩せ細っていて、のっぽで)”という表現の差異について考えてみる。まず確認しておきたいのは、両者の差異は捉え方(construal)の差異であって、概念内容(conceptual content)の差異ではないということである。なぜなら、同じ客観的な状況を描写するために、“瘦, 高”と“瘦瘦的, 高高的”のどちらも用いることができるからである。また、“瘦瘦的, 高高的”の持つ客体的な意味“瘦, 高”が希薄化されていないことから、これは 2.1.4 節で紹介した第一種の主体化(subjectification)ではないことは確かである。さらに、(21c)では、“瘦, 高”から“瘦瘦的, 高高的”へという変化を表す現象ではないため、これらの差異に主体化という変化のメカニズムを想定する王・上原(2019)の主張には無理があると言える。つまり、両者の差異は、あくまでも事態把握の在り方、つまり、捉え方の問題なのである。

ただし、“瘦, 高”と“瘦瘦的, 高高的”に見られる捉え方の差異について考えてみると、複音節形容詞の捉え方は単音節形容詞に比べ、主観的・主体的(subjective)であるという観察は確かに中国語母語話者の直感に合っている。この点においては、重ね型では、認知主体である G と認知の客体 X”が深く関わることで、臨場性・現場性などの発話の時空が喚起されるという王・上原(2019:19)の主張に異論をはさむものではない。

では、このような捉え方の差異、つまり、“瘦瘦的, 高高的”は“瘦, 高”より主観

⁹⁷ これは、2.1.4 節で紹介した第一種の主体化に対し、異なった解釈を与えたものである。

的・主体的(subjective)であるという直感が表している捉え方の差異は、どのように説明されるのであろうか。本章では、町田(2020)の間主観性に関する分析を援用し、両者の捉え方の差異について明らかにする。

町田(2020)は、話し手と話し手以外の認知主体（典型的には、聞き手）の間に成立している間主観性(intersubjectivity)には、以下の二種類があると主張し、これに基づいて、いわゆる主語の省略という現象の説明を試みている。

対峙型間主観性：話し手が他者の視点（意識）をシミュレーション(simulate)することによって成立する間主観。

同化型間主観性：話し手が他者の視点を自己に同化(assimilate)させることによって成立する間主観。

(町田 2020:246)

対峙型の間主観は、独立した他者の心内にある認識や意図を理解することで他者と自己との共通認識を成立させるもので、共通認識を持つ他者の数が増えれば増えるほど客観性を増すものである⁹⁸。その際、他者の認識の中には話し手も存在するはずであり、話し手は、他者の認識を通して、自己を認識することになる。そして、このように自己を認識することを自己の客体視と呼ぶ。一方、同化型の間主観は、他者も話し手と同じように経験しているはずであるという感覚に基づいており、その意味では、話し手の主観世界に他者を巻き込むものである。その際、対峙型間主観のように他者の認識を通して

⁹⁸ ここで言う「客観性」とは科学的であることと同義ではない。例えば、「太陽が西に沈む」のは客観的事実であると一般にみなされているが、科学的な真実としては、地球の自転によって太陽が西に沈んでいくように見えているだけである。しかしながら、それでもなお「太陽が西に沈む」ことが客観的な事実とされる（少なくとも主観的な認識とはされない）のは、同じ認識を共有している他者が数多く存在しているからである。ここで言う客観性とは、このような共通認識のことを指している。

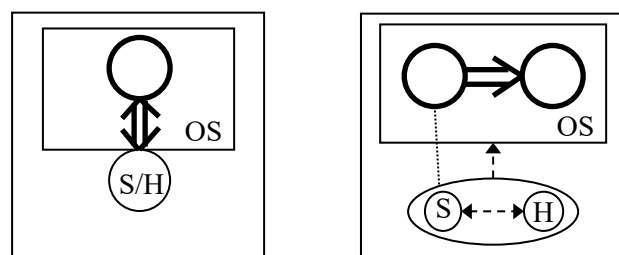
自己を認識することができないため話し手は自己を客体視することができず、同化型間主観においては、話し手は自分自身を表現することができない。これは、自分で自分の顔を見ることができないのと同じことである。

以上の間主観性の二分類をもとに、町田(2020)は、(22)の容認性の差異について説明している。町田(2020)によると、(22)は、車の助手席に座っている話し手が前の車に追突しそうになった際の発言であり、このような緊迫した場面では、(22a)のようにトラジェクター（＝主語）を表現しないのは全く自然である。そして、町田(2020)によると、(22a)のようにトラジェクター（＝認知主体）が表現されないのは、認知主体の事態の捉え方をそのまま表現しているからということになる。それは、このような主観的な事態把握では、通常、認知主体は自分自身を意識することをしないため、言語表現にも認知主体が現れないと考えるからである。その上、このような場面では話し手は傍らにいる他者も自分と同じ経験しているとみなすため、図 5.5(a)に示すような同化型間主観が成立すると考えられる。このように、一般的には省略とみなされる現象も事態の捉え方の観点から説明されるのである⁹⁹。(22a)は話し手からの見えたままを表した表現であるため、図 5.5 では、話し手 S（と聞き手 H）は意識に上らない（＝言語化されない）オフステージにある。そして、聞き手 H は話し手 S に同化されているので、両者が別々の独立した存在ではないことを表すため、オフステージの認知主体は S/H という表記になっている。

(22) a. わあっ、ぶつかる！ (町田 2020:249)

b. # わあっ、僕たち（の車）が前の車にぶつかる！ (町田 2020:250)

⁹⁹ 町田(2020)では、(22a)の表現されていない目的語はゼロ代名詞と呼ばれるもので、ここでの主語の非明示とは異なる現象であるとされている。



(a) 同化型間主観(22a) (b) 対峙型間主観(22b)

図 5.5 間主観性の類型 (町田 2020:251)

一方,このような場面で(22b)のように主語(=認知主体)を表すのはきわめて不自然であるといえる。それは,このような緊迫した場面において自己を客体視すると臨場感を失ってしまうからである。つまり,(22b)のように認知主体を明示することは対峙型間主観(図 5.5(b))を通して自己を客体視することを意味し,このような切迫した場面で客観的に自己を見つめるのは状況に合わないのである (cf. 町田 2020:250-251)。

上述の同化型と対峙型の間主観性の分類を踏まえて,(23)から(25)に示すような日本語と中国語の形容詞一語文の事態把握の差異を表すとそれぞれ図 5.6 のようになる。

(23) (暖かい部屋から屋外に出て)

a. さむっ。(=2a)

b. 啊!

oh

(あっ!)

(24) (寒い屋外を歩いている最中に)

a. 寒い。

b. 冷冷 的。

cold-cold AUX

(肌寒い。)

c. 冷飕飕 的。

cold-OTP(sousou) AUX

(風がピューピューと寒い。)

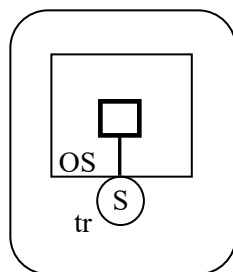
(25) (クーラーの設定温度を下げたのを見て)

a. 寒い(よ)！(平岩 2019:5)

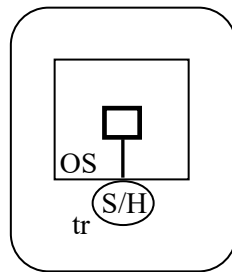
b. 冷！¹⁰⁰

cold

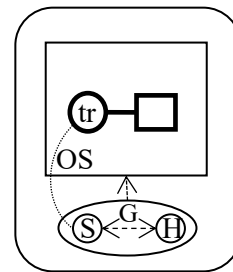
(寒いよ！)



(a)個人型 (23)



(b) 同化型 (24)



(c) 対峙型(25)

図 5.6 感覚形容詞一語文の類型

(23)は図 5.6(a)に対応し、聞き手 H の存在を意識しない話し手 S の独り言として表現されているため、トラジェクターtr は話し手 S のみである。ここでは、他者の存在を意識にないので、このような事態把握の在り方を個人型と呼ぶことにする¹⁰¹。個人型は他者の存在を無視するため、間主観が成立しないケースと言える。そして、この場合、ト

¹⁰⁰ 中川(2005:27)には、日本語の「寒い！」が状況の描写に傾斜するのに対し、中国語の“冷！”が聞き手に事態の改善を強く要求しているという指摘がある。

¹⁰¹ 町田(2020)の事態内視点は、ここでの個人型と同化型を合わせたものである。

ラジェクターtrは主体的把握を受けておりオンステージOSの外側にあるため表現されない。

一方、(24)は図 5.6(b)に対応する。(24)の発話ではHはSに同化されている。この場合、Sの認識の中には独立したHは存在しないことになる。このことを踏まえて、trがS/Hと表記されている。Sは通常自らを主体として把握(subjectively construed)しているため、Sの主観に取り込まれたHも含めたS/HはOSの外側にありプロファイルされていない。

最後、SがHに自身の感覚を伝達している(25)は図 5.6(c)に対応し、SがHの存在を意識しているため対峙型になる。そのため、SはHの視線を通して自己を客体化することになり、客体化されたtrはOS内でプロファイルされている。それにもかかわらず、主語trが言語化されていないのは、ゼロ代名詞だからである¹⁰²。

以上の議論をまとめると次のようになる。日本語の形容詞語幹構文「からっ！」と中国語の感動詞“啊！”は個人型であるため独り言として容認される。日本語の形容詞一語文「寒い」は対峙型と同化型の両方を表すことができるが、中国語の単音節属性形容詞一語文“冷！”は対人型のみを表すので、独り言には用いられない。そして、中国語の複音節の擬態形容詞“辣辣”と“辣滋滋”の一語文は同化型を表すので、聞き手に訴えかけるのではなく、聞き手を巻き込むように発話する際に用いられる¹⁰³。

これを廣瀬(1997)の知見も加えて整理すると、次のようになる。中国語の単音節属性

¹⁰² 町田(2020)は、ゼロ代名詞を判別する手がかりとして、意味を変えずに非明示的な名詞句が復元できるかどうかを挙げている。この場合は、中国語では“我冷！”のように“我”を復元できるため問題なくゼロ代名詞であると言えるが、日本語の場合、「私は寒い(よ)！」のように主語を明示すると「寒い(よ)！」にはない対比の意味が生じてしまうため、ゼロ代名詞ではないということになる。ただし、町田(2020)の判別基準は、絶対的なものではなく「手がかり」に過ぎない。

¹⁰³ 本章で挙げた形容詞の重ね型AA(例えば、“辣辣”)とABB型(例えば、“辣滋滋”)以外に、BA型(例えば、“冰凉”)BABA型(例えば、“冰凉冰凉”)AXYZ型(例えば、“黑咕隆咚”)などの擬態形容詞も同化型の私的表現である。

形容詞一語文は対峙型の公的表現であり、聞き手に向けて発話されるが、複音節擬態形容詞一語文は同化型の私的表現であるため、独り言的に発話され聞き手に向けて発話することはできない。全くの個人型の私的表現に当たるのは、中国語では“啊！（あっ！）”“哎呦！（あら！）”などの感動詞一語文であり、日本語では形容詞語幹構文である。

もちろん、個人型と同化型の表現はともに用いても全く問題ない。例えば、以下に示すように、感動詞“啊！（あっ！）”を発する瞬間は、個人型であるが、“太辣（辛すぎる）”、“好冷（寒すぎる）”“真烫（熱すぎる）”の状態形容詞は同化型である。ともに私的表現であるため、話し手の気持ちを独り言的に述べることができる。

(26) （とても辛いカレーを食べて）

- a. からっ。 (=1a)
- b. 啊！ 太辣 了。
oh too-hot AUX
(あっ, 辛すぎる。)

(27) （暖かい部屋から屋外に出て）

- a. さむっ。 (=2a)
- b. 啊！ 好冷 啊。
oh very-cold AUX
(あっ, 寒すぎる。)

(28) （シャワーの温度がじわじわと上がっていき）

- a. あっっ。 (=2a)
- b. 啊！ 真烫。
oh really-scalding
(あっ, 熱すぎる。)

また, (29)–(32)に示すように, “好吃 (おいしい)” “难吃 (まずい)” “好看 (美しい)” “危险 (危ない)” などのような二音節形容詞は対応している擬態形容詞がないため, “太”, “真” などの程度副詞と組み合わせて用いられ, 聞き手の共感を求めるような場面で使用される。

(29) (料理を食べて)

- a. うまっ。
- b. 啊! 太好吃 了。
oh too-delicious AUX
(あっ, すごくおいしい。)

(30) (料理を食べて)

- a. まずっ。
- b. 啊! 真难吃。
oh really-taste bad
(あっ, 本当にまずい。)

(31) (花火を見て)

- a. きれい。
- b. 啊! 太好看 了。
oh too-beautiful AUX
(あっ, すごくきれい。)

(32) (道路に飛び出した子供を見て)

- a. あぶなっ。 (富樫 2006:168)
- b. 啊! 真危险。
oh really-dangerous
(あっ, 本当に危ない。)

最後に、中川(1987)は、中国語の“危険！（危ない！）”は、相手の注意を喚起する場合に用いられるため、危ない目に合った自分に向けて発するものではないと指摘している。したがって、“危険！（危ない！）”は対峙型であると考えられる。しかしながら、“老实（おとなしい）”“大方（鷹揚だ）”“干净（清潔だ）”“伟大（偉大だ）”などの二音節形容詞は一語文として発することがないため、本研究から除外する。

5.4 まとめ

本章では、口語的な日本語ではよく使われる形容詞語幹構文「からっ。」「さむっ。」「あっっ。」などに対応する中国語の形容詞がない理由について、他者の存在をどのように扱うのかという間主観性の観点から考察した。もちろん、刺激を突然受けた場合に、中国語でも“辣！”“冷！”“烫！”などが使われるが、これらは日本語の「からっ。」「さむっ。」「あっっ。」とは異なり、相手に対して何かを訴える気持ちが入る。興味深いのは、形式上似ている中国語の単音節形容詞一語文と日本語の形容詞語幹構文は間主観性の観点から見ると全く対応していないことである。形式面では異なるが、日本語の形容詞語幹構文に対応する使い方ができるのは中国語の複音節形容詞一語文のほうである。本章では、その理由として、複音節形容詞である状態形容詞や擬態形容詞は、聞き手を話し手に同化させる私的表現であるためだと結論付けた。

第6章 結論と今後の展望

6.1 本研究のまとめ

本研究では、中国語の感覚形容詞に関する意味的な制約について、認知言語学的な観点から考察を試みた。まず、第1章の序論で問題を共有したのちに、第2章では本研究が依拠する理論的枠組みの紹介と形容詞に関する先行研究の紹介を行った。続いて、第3章において、中国語の複音節形容詞はメタファー的に使うことが可能であるが、単音節形容詞は、慣用表現などの例外を除き、メタファー表現としては容認されないという現象について検討した。これは、先行研究では、音節的な制約であるとされており、単音節形容詞をメタファー的に使用する場合には単音節語と共起する必要があるとされている。しかしながら、これには反例が多いうえに、メタファーという意味的現象を音節制約に帰すことに合理的なつながりが見えないという問題がある。そこで、中国語の単音節感覚形容詞は基本レベルカテゴリーを表すのに対し、複音節感覚形容詞はその下位レベルカテゴリーを表すと提案したうえで、前者では把握時間が全く喚起されないのに対し、後者では把握時間がベースとして喚起されると主張した。そして、創造的なメタファー表現においては把握時間を伴った事態を喚起する必要があるため、把握時間が喚起されない単音節感覚形容詞はメタファーとして用いることには適さないと提案した。

次いで、第4章では、中国語の擬態表現は単独では使用できず、必ず形容詞を伴わなければならないという現象について考察した。そこで、本研究では、日本語の擬態語は音によって直接に身体経験のイメージが喚起されるのに対し、中国語では、音によってイメージが喚起されにくいいため、表現する感覚領域を表す形容詞が擬態語に伴われる必要があるのではないかと考え、中国語の擬態語を用いる場合は、認知領域を確定するた

めに形容詞による認知領域の喚起を行う必要があると主張した。その際、中国語の感覚形容詞を属性形容詞、状態形容詞、擬態形容詞に分類し、中国語の擬態形容詞は時間的安定性に関して日本語の擬態語とは根本的に異なっていることを主張した。

最後の第5章では、日本語には、例えば、「熱っ!」のように話し手が思わず感覚を表出する際に、形容詞語幹だけで構成される一語文(＝形容詞語幹構文)を用いることがあるのに対し、中国語においては、感動詞を除き、形容詞が日本語と同じ条件で単独で一語文になることはないのはなぜかという問題を検討した。これに関して、本研究では、表現の公共性(廣瀬 1997) および間主観性(町田 2020) の枠組みを援用しながら、事態把握における他者の位置づけの観点から説明を試みた。そして、日本語形容詞語幹構文と中国語単音節形容詞一語文の決定的な違いは、日本語の形容詞語幹構文(および中国語の感動詞文)は、話し手が突然刺激などを受けた場合に、話し手の主観を聞き手の存在を無視して表出する、つまり、独り言として表出する個人型の事態把握に基づいた文であるのに対し、中国語の単音節形容詞一語文は聞き手に何かを訴える、つまり、聞き手の存在を強く意識する対峙型の間主観を表している点にあると主張した。その上で、中国語の属性を表す単音節形容詞一語文とは異なり、状態形容詞や擬態形容詞である複音節形容詞一語文は相手(聞き手)と感覚を共有している場合に用いられる同化型間主観に基づいた表現であるため、日本語の形容詞語幹構文のように独り言として発話できると提案した。

以上のように、中国語の感覚形容詞には様々な特徴が見られるが、本研究では、カテゴリー階層、把握時間、間主観性などの認知言語学の理論を援用しながら、これらの特徴の背後に潜む認知メカニズムを明らかにした。

6.2 本研究の独自性

中国語の形容詞に関する研究はこれまでも盛んに行われてきた (cf. 朱德熙 1956)。それらは、主に属性形容詞、状態形容詞などの意味上の分類や単音節形容詞、複音節形容詞などの音節上の分類を行っており、記述に重点を置いた研究になっている。

それに対し、本研究では、カテゴリー階層の観点から属性形容詞および状態形容詞の経験基盤を明らかにすることを通して、両者のふるまいの原因を以下に示すように明らかにした。基本レベルカテゴリーである属性形容詞は十分に抽象的であるため身体経験を直接喚起しない。そのため、把握時間をベースとして喚起されていない。一方、下位レベルカテゴリーの状態形容詞は十分に抽象化されていないため直接身体経験に根差した具体的な概念を表している。そのため、把握時間をベースとして喚起している。そして、把握時間をベースとして喚起することが創造的なメタファー表現には不可欠であるため、属性形容詞は創造的メタファーの解釈は受けられないと提案した。しかも、このような説明は、これまで音節上の制約とされてきたメタファー制約を意味現象として説明した点でこれまでにない説明であると言える。

また、これまで擬態表現と形容詞は別々に扱われてきたが、ここでは擬態形容詞という新しい形容詞のカテゴリーとして導入した点も新たな提案である。中国語の擬態表現だけでは身体経験によるイメージを喚起することができないため具体的な認知領域が指定されてはじめて具体的な内容を喚起することができるのである。擬態形容詞の語幹に当たる部分は、具体的な認知領域を喚起するという意味的貢献を行っているのである。

最後に、中国語の単音節形容詞一語文と複音節形容詞一語文のふるまいの差異を主観性・間主観性の観点から考察したのも、これまでにない新しい試みである。そして、前者は聞き手に訴えるような対峙型間主観であるため、日本語の形容詞語幹構文には対応していないことを示し、後者は、むしろ、聞き手も話し手と同じように考えているだろ

うという同化型主観に基づいている点で、日本語形容詞語幹構文に近いことを提案した。

6.3 今後の展望

本研究では、中国語における感覚形容詞の使用にみられる制約について、いくつかの提案を行ってきたが、本研究では取り上げなかった興味深い現象も存在する。特に、中国語形容詞の重ね型の生成に関する制約が興味深い。例えば、“高大（高くて大きい）”という AB 型二音節形容詞は、重ねると“高高大大”という AABB 型にすることができるが、“伟大（偉大）”は同じ AB 型二音節形容詞であるにもかかわらず、重ねて“*伟大伟大”のようにすることができない。これに対して、李大忠(1984)は、“高大（高くて大きい）”が重ね型を作ることができるのは、それが話し言葉であるためであり、“伟大（偉大）”が重ね型にできないのはそれが書き言葉であるためであるという「文体制限説」を提案している。

しかしながら、この文体制限説には数多くの反例が存在する。例えば、“温暖（暖かい）”，“冷静（冷静）”，“尖锐（するどい）”などの AB 型二音節形容詞は日常生活でよく使われるため話し言葉とみなすことができる。そのため、文体制限説に従うと、その重ね型 AABB “*温温暖暖”，“*冷冷静静”，“*尖尖锐锐”が容認されることが予測されるが、実際には、容認されない。

これに対して、張恒悦(2016)は、「AB が五感で認知できる範囲内にあれば AABB が成立し、それ以下の場合は成立困難である」（張恒悦 2016:197）という「五感生成制限説」を主張している。つまり、“高大（高くて大きい）”は明確的な形を備え、一定の空間を占める具象的なものを表すため五感で認知され AABB として容認される。一方、“伟大（偉大）”は抽象的な性質を持っているものを表すため五感で認知されず AABB として

容認されないというのである。

しかしながら，この「五感生成制限説」にも問題がある。例えば，“魁梧（たくましい）”，“矫健（力強くたくましい）”は人の体の具体的な形状を喚起するため五感で認知されるはずであるが，その重ね型である“*魁魁梧梧”，“*矫矫健健”は予測に反して容認されない。

以上のような重ね型に関する制約は本研究の主張に照らし合わせてみた場合，どのような説明が可能であろうか。本研究の主張を強化するためにも，このような現象の分析は欠かせないと思われる。今後の課題としておきたい。

補足資料

本研究では、紙幅の関係上、主に、“冷”“冷冰冰”に関する例を取り上げて議論しているが、もちろん、本研究の議論は、他の感覚形容詞にも当てはまる。以下では、本文中で取り上げることのできなかった事例のうちのいくつかを補足資料として挙げておく。

(1)から(10)は形容詞が連体修飾語として使われている事例であり、(11)から(13)は形容詞が述語として使われている事例である。また、(14)と(15)は、形容詞が補語として使われている事例であり、(16)と(17)は、形容詞が連用修飾語として使われている事例である。いずれの場合においても、属性形容詞を用いた(a)は容認されないが、それに対応している状態形容詞や擬態形容詞を用いた(b)の文は容認されている。

- (1) a. * 在 热 (的) 目光 中……
PREP hot AUX eyes in
b. 在 炽热 的 目光 中…… (施清真 (译)《可爱的骨头》)
PREP blazing-hot AUX eyes in
(熱い視線の中で…)
- (2) a. * 心里 不觉 有 一 种 酸 (的) 感觉。
interior unconsciously have one CLF sour AUX feeling
b. 心里 不觉 有 一 种 酸酸 的 感觉。
interior unconsciously have one CLF sour-sour AUX feeling
(《人民日报 1993 年》CCL)
(知らず知らずのうちに切ない気持ちになった。)
- (3) a. * 她 软 (的) 声音 拉 回 他 的 思绪。
3SG soft AUX voice pull back 3SG GEN thought
b. 她 软软 的 声音 拉 回 他 的 思绪。(于晴《红苹果之恋》)
3SG soft-soft AUX voice pull back 3SG GEN thought
(彼女の柔らかい声を聞いて、彼は我に返った。)

- (4) a. * 我 的 生 活 中 从 来 没 有 一 个 暖 (的) 人。
 1SG GEN life in always NEG one CLF warm AUX person
 b. 我 的 生 活 中 从 来 没 有 一 个 温暖 的 人。
 1SG GEN life in always NEG one CLF warm AUX person
 (曾胡 (译)《荆棘鸟》)

(私の人生の中でいままで温かい人はいなかった。)

- (5) a. * 这 是 一 个 尖 (的) 问题……
 this COP one CLF pointed AUX problem
 b. 这 是 一 个 尖锐 的 问题……
 this COP one CLF sharp-pointed AUX problem
 (《人民日报 1994 年》CCL)

(これは難しい問題だ…)

- (6) a. * 杨晓冬 用 柔 (的) 语气 对 燕来 说……
 YangXiaodong use soft AUX tone to Yanlai say
 b. 杨晓冬 用 柔和 的 语气 对 燕来 说……
 YangXiaodong use soft-gentle AUX tone to Yanlai say
 (李英儒《野火春风斗古城》)

(楊曉冬は燕来にやわらかい口調で…と言っている。)

- (7) a. * 谈不上 什么 幸福 的 童年，
 out of the question something happy AUX childhood
 有 的 只 是 苦 (的) 记忆。
 have GEN just COP bitter AUX memory
 b. 谈不上 什么 幸福 的 童年，
 out of the question something happy AUX childhood
 有 的 只 是 苦涩 的 记忆。
 have GEN just COP bitter-astringent AUX memory
 (《报刊精选 1994 年》CCL)

(幸せな子供時代どころか、あるのはただ苦い思い出だけだ。)

- (8) a. * …… 不 觉 浮 现 出 淡 (的) 笑容。
 unconsciously emerge out shallow AUX smile
 b. …… 不 觉 浮 现 出 淡淡 的 笑容。
 unconsciously emerge out shallow-shallow AUX smile
 (《报刊精选 1994 年》CCL)

(…知らず知らずのうちに笑みが薄っすらこぼれた。)

- (9) a. * 史循 并 没有 注意 到 章秋柳 的 暗 (的) 心情。
 ShiXun at all NEG notice done ZhangQiuliu GEN dark AUX mood
 b. 史循 并 没有 注意 到 章秋柳 的 阴暗 的 心情。
 ShiXun at all NEG notice done ZhangQiuliu GEN overcast-dark AUX mood
 (矛盾《蚀》)

(史循は章秋柳の暗い気分を特に気をとめなかった。)

- (10) a. * 这样 的 一 家 人, 是 否 有 明 (的) 前途 呢?
 such AUX one CLF family COP NEG have bright AUX future SFP.Q
 b. 这样 的 一 家 人, 是 否 有 光明 的 前途 呢?
 such AUX one CLF family COP NEG have light-bright AUX future SFP.Q
 (老舍《四世同堂》)

(このような家庭に明るい未来はあるの?)

- (11) a. * 小女孩 的 声音 甜 (的) 。
 little girl GEN voice sweet AUX
 b. 小女孩 的 声音 甜甜 的。 (《人民日报 1996 年》CCL)
 little girl GEN voice sweet-sweet AUX

(この女の子の声は甘い。)

- (12) a. * 我 心里 暖 (的) 。
 1SG interior warm AUX
 b. 我 心里 暖烘烘 的。 (《人民日报 1995 年》CCL)
 1SG interior warm-OTP(honghong) AUX

(私の心はあたたかい。)

- (13) a. * 人们 心里 痒 (的), 想 卖 又 怕 再 涨 价。
 people interior itch AUX want sell but afraid again raise price
 b. 人们 心里 痒痒 的, 想 卖 又 怕 再 涨 价。
 people interior itch-itch AUX want sell but afraid again raise price
 (乔典运 《香与香》)

(人々は売りたいが、また値上がりするのを心配している。)

- (14) a. * 三 位 村支书 正 聊 得 热。

three CLF village branch secretary PCT chat AUX hot

- b. 三 位 村支书 正 聊 得 火热。

three CLF village branch secretary PCT chat AUX fire-hot

(《人民日报 1996 年》CCL)

(村の書記三人の話し合いが盛り上がっている。)

- (15) a. * 她 的 生意 逐步 变 得 红 起来 了。

1SG GEN business gradually become AUX red up PRT_{CS}

- b. 她 的 生意 逐步 变 得 红火 起来 了。

1SG GEN business gradually become AUX red-fire up PRT_{CS}

(《市场报 1994 年 B》CCL)

(彼女の商売はだんだん繁盛してきた。)

- (16) a. * “你 小点 声!” 赵明福 软 地 说。

2SG small voice ZhaoMingfu soft AUX say

- b. “你 小点 声!” 赵明福 软软 地 说。

2SG small voice ZhaoMingfu soft-soft AUX say

(刘绍棠《运河的桨声》)

(「声を小さくして!」と赵明福はやわらかく言った。)

- (17) a. * 他 热 地 大 声 说。

3SG hot AUX big voice say

- b. 他 热乎乎 地 大 声 说。 (潘庆龄(译)《美国悲剧》)

3SG hot-OTP(huhu) AUX big voice say

(彼は大きい声で熱く言う。)

(以上, すべて筆者訳)

参考文献

英語文献

- Chao, Yuen Ren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press. [丁邦新译(1980)《中国话的文法》中文大学出版社] .
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: An Introduction*. Vol I, John Benjamins.
- Inose Hiroko (2008) Translating Japanese onomatopoeia and mimetic words. *Translation and Research Project* 1,97–116.
- Johnson, Mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. University of Chicago Press.
- Labov, William (1973) The Boundaries of Words and their Meaning, in Charles J. Bailey and Roger Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*. Georgetown University Press, 140–173.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.
[渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店] .
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about Mind*. University of Chicago Press. [池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之(訳) 1993『認知意味論—言語から見た人間の心』紀伊國屋書店] .
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh*. Basic Books. [計見一雄訳 (2004)『肉中の哲学』哲学書房] .
- Langacker, Ronald W (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol I, Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W (1990a) *Concept, Image, and Symbol*. Mouton De Gruyter.

- Langacker, Ronald W (1990b) Subjectification. *Cognitive Linguistics*. Vol I, 5–38.
- Langacker, Ronald W (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol II, Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- McCawley, James. D (1992) Justifying parts-of-speech Assignments in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 20(2). [张伯江, 方梅译 1996<汉语词类归属的理据>《现代汉语功能语法研究》江西教育出版社, 229–247] .
- Rohrer, Tim (2007) Embodiment and experientialism. Edited by Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens. *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford University Press, 25–47.
- Rosch, Eleanor (1973) On the interpretational structure of perceptual and semantic categories. in Timothy Moore (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. Academic Press, 111–144.
- Vendler, Zeno (1957) Verbs and times. *The Philosophical Review* 66(2), 143–160.
- Williams, J. M (1976) Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change. *Language* 52(2), 461–477.
- Zhang, Xiaolin (2019) “On the Semantic Restrictions of Monosyllabic Sensory Adjectives in Metaphorical Expressions: Evidence from Mandarin Chinese,” paper presented at the 15th International Cognitive Linguistics Conference, August 6, 2019, Kwansei Gakuin University, Japan.

日本語文献

- 荒正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学』3, むぎ書房, 147–162.
- 今野弘章 (2012) 「イ落ち: 形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』141, 日

本言語学会, 5–31.

王安・上原聡 (2019)「中国語の形容詞が持つ「主観性」を考えるー性質形容詞とその重ね型を中心にー」『日本認知言語学会論文集』19, 日本認知言語学会, 11–23.

尾谷昌則 (2003)「主体化に関する一考察：接続詞「けど」の場合」『日本認知言語学会論文集』3, 日本認知言語学会, 85–95.

小野正弘 (2017)「オノマトペの対照研究のためにー中国語に擬態語はありますか？」『日中言語対照研究論集』19, 白帝社, 1–15.

ギブソン, ジェームズ (2011)『生態学的知覚システムー感性をとらえなおす』(佐々木 正人・古山宣洋・三嶋博之監訳) 東京大学出版会 (原題 Gibson, J.J (1966) *The senses considered as perceptual systems*. Houghton Mifflin, Boston) .

楠見孝 (1995)『比喩の処理過程と意味構造』風間書房.

国広哲弥 (1965)「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」『国語学』60, 日本語学会, 19–21.

国広哲弥 (1981)『日英語比較講座ー意味と語彙』3, 大修館書店.

呉川 (2005)『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社.

坂本真樹 (2019)「オノマトペに表される複雑な味の認知過程」『認知言語学研究』4, 開拓社, 54–71.

酒井彩加 (2003)『日本語の「共感覚的比喩（表現）」に関する記述的研究』平成 15 年度博士学位論文.名古屋大学国際言語文化研究科.

笹井香 (2005)「現代語の感動喚体句の構造と形式」『日本文芸研究』57(2), 関西学院大学, 1–21.

清水泰行 (2015)「現代語の形容詞語幹型感動文の構造ー「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心としてー」『言語研究』148, 日本言語学会, 123–14.

徐一平 (2009)「形容詞と形容詞一語文」池上嘉彦・守屋三千代 (編)『自然な日本語を

教えるために』 ひつじ書房, 74-77.

瀬戸口律子 (1982)「日中両国語における擬音語・擬態語について」『大東文化大学紀要・人文科学』20, 大東文化大学, 81-97.

瀬戸口律子 (1984)「擬音語・擬態語表現（日本語中国語）について」『大東文化大学紀要・人文科学』22, 大東文化大学, 1-17.

瀬戸賢一 (1986)『レトリックの宇宙』海鳴社. (瀬戸(1997)に改変収録)

瀬戸賢一 (1995)『空間のレトリック』海鳴社.

瀬戸賢一 (1997)『認知のレトリック』海鳴社.

田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999)『オノマトペ形態と意味ー』くろしお出版.

張恒悦 (2016)『現代中国語の重ね型ー認知言語学的アプローチ』白帝社.

張曉琳 (2017)「中国語感覚形容詞のメタファー用法にみられる制約についてー「冷」と「冷冰冰的」を中心にー」『日本認知言語学会論文集』17, 日本認知言語学会, 69-81.

張曉琳 (2019)「中国語感覚形容詞の時間把握ー感覚形容詞のメタファー用法を例にー」『KLS Selected Papers』1, 関西言語学会, 159-171.

張曉琳 (2020)「中国語における形容詞ー語文の間主観性ー日本語形容詞語幹構文との比較を通してー」第45回関西言語学会（研究発表）2020年6月13日, 14日, オンライン開催.

辻幸夫（編）(2013)『新編認知言語学辞典キーワード辞典』研究社.

富樫純一 (2006)「形容詞語幹単独用法についてーその制約と心的手続き」『日本語学会2006年度春季大会予稿集』日本語学会, 165-172.

中川正之 (1987)「中国語と日本語の形容詞一意図と結果ー」『日本語学』6(10), 明治書院, 49-57.

- 中川正之 (2005) 『漢語からみえる世界と世間』 岩波書店.
- 中村芳久 (2016) 「Langacker の視点構図と (間) 主観性—認知文法の記述力とその拡張—」 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 開拓社, 1–51.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版.
- 西村義樹・長谷川明香 (2018) 「認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか？」 高橋英光・野村益寛・森雄一 (編) 『認知言語学とは何か?』 くろしお出版, 1–20.
- 浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ音象徴と構造』 くろしお出版.
- 早川智彦・松井茂・渡邊淳司 (2010) 「オノマトペを利用した触り心地の分類手法」 『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』 15(3), 日本バーチャルリアリティ学会, 487–490.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開』 研究社.
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞」 『ことばの科学』 7, むぎ書房, 39–60.
- 樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」 『ことばの科学』 10, むぎ書房, 43–66.
- 平岩加寿子 (2019) 「形容詞語幹構文—グラウンディング要素としての形容詞語尾「イ」「ナ」「ダ」—」 『日本認知言語学会論文集』 19, 日本認知言語学会, 1–10.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」 中右実 (編) 『指示と照応と否定』 研究社, 1–89.
- 廣瀬幸生 (2016) 「主観性と言語使用の三層モデル」 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 開拓社, 333–355.
- 深田智 (2001) 「“Subjectification” とは何か: 言語表現の意味の根源を探る」 『言語科学論集』 7, 京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻環境情報認知論

講座, 61–89.

堀井令以知 (1986)「擬音語・擬態語の言語学」『日本語学』5, 明治書院, 4–46.

本多啓 (2003)「第3章認知言語学の基本的な考え方」『認知言語学への招待』辻幸夫(編)
大修館書店, 63–125.

町田章 (2020)「間主観性の類型とグラウンディングーいわゆる項の省略現象を中心に」
南佑亮・本田隆裕・田中英理 (編)『英語学の深まり・英語学からの広がり』
英宝社, 245–258.

村上宣寛 (1980)「音象徴仮説の検討ー音素, SD 法, 名詞及び動詞の連想語による成分の
抽出と, それらのクラスター化による擬音語・擬態語の分析」28(3), 教育心理
学研究, 183–191.

初山洋介 (2008)「メタファーの認知的基盤と経験的基盤」『言語文化研究叢書』7, 名古屋
大学大学院国際言語文化研究科, 97–111.

初山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』研究社.

八亀裕美 (2008)『日本語形容詞の記述的研究ー類型論的視点からー』明治書院.

山梨正明 (1988)『比喩と理解』東京大学出版会.

山梨正明 (1999)「言葉と意味の身体性ー認知言語学からの眺望」『現象学年報』15, 日
本現象学会 (編) 北斗出版, 7–21.

山梨正明 (2000)『認知言語学原理』くろしお出版.

山梨正明 (2009)『認知構文論: 文法のゲシュタルト性』大修館書店.

山梨正明 (2011)『認知文法論序説』研究社.

尤東旭 (1999)「温度形容詞の比喩的表現ー日中対照ー」『現代社会文化研究』15, 新潟
大学大学院現代社会文化研究科, 23–50.

尤東旭 (2004)『中日の形容詞における比喩的表現の対照研究ー五感を表す形容詞をめ
ぐって』白帝社.

中国語文献

北京大学中文系现代汉语教研室 (1993)《现代汉语》商务印书馆.

董伟娟·黄小苹 (2010)〈英汉基本味觉形容词隐喻对比分析〉《黑龙江教育学院学报》29(10),
黑龙江教育学院, 158–160.

郭锐 (2002)《现代汉语词类研究》商务印书馆.

李大忠 (1984)〈不能重叠的双音节形容词〉《语法研究和探索(二)》北京大学出版社, 207–
223.

李泉 (2005)《单音节形容词原型性研究》北京语言大学博士学位论文. 北京语言大学.

吕叔湘 (1953)《语法学习》中国青年出版社.

吕叔湘主编 (1999)《现代汉语八百词(增订本)》商务印书馆.

钱钟书 (1979)《通感》上海古籍出版社.

沈家煊 (1999)《不对称和标记论》江西教育出版社.

石铨 (2010)《汉语形容词重叠形式的历史发展》商务印书馆.

唐桂兰 (2003)〈论通感的认知结构及语义特征〉《合肥工业大学学报》合肥工业大学, 155–
158.

唐树华 (2010)《有些隐喻为什么不可能——汉英谓语句物性形容词隐喻拓展异同成因探析》
上海外国语大学博士学位论文.上海外国语大学.

唐树华·董元兴·李芳 (2011)〈构式与隐喻拓展——汉英温度域谓语句形容词隐喻拓展差异
及成因探析〉《外国语》34(1), 上海外国语大学, 50-57.

王力 (1943)《中国现代语法》[王力 (1985)《中国现代语法》商务印书馆.]

汪少华 (2001)〈移觉的认知性阐释〉《修辞学习》18–19.

张伯江 (1994)〈词类活用的功能解释〉《中国语文》5, 339–346.

张国宪 (2006a)〈性质形容词重论〉《世界汉语教学》1, 5–17.

张国宪 (2006b)《现代汉语形容词功能与认知研究》商务印书馆.

张寿康・杨绍长 (1980) <关于“移觉修辞格”>《中学语文教学》3, 20–22.

郑怀德・孟庆海 (2010)《汉语形容词用法词典》商务印书馆.

朱德熙 (1956) <现代汉语形容词研究>《语言研究》1, [朱德熙 (编) (1997)《现代汉语语法研究》商务印书馆, 3–41.]

朱德熙 (1961) <说“的”>《中国语文》12, [季羨林 (编) (2001)《20 世纪现代汉语语法八大家—朱德熙选集》东北师范大学出版社, 258–289.]

朱德熙 (1982)《语法讲义》商务印书馆.

出典資料

『広辞苑』第六版, 岩波書店, 2008 年 01 月 11 日

『日中辞典』第 3 版, 小学館, 2015 年 11 月 5 日

『日中擬声語擬態語辞典』郭江華, 東方書店, 1994 年 4 月 30 日

用例と作品名の後に CCL と記載されているものは, 北京大学中国語言学研究中心のコーパスからとられた用例である。また, 出所が明示されていない用例はすべて筆者による作例である。

コーパス

CJCS (The Corpus of Beijing Center for Japanese Studies) 中日対訳コーパス (第一版) 2003

謝辞

本論文の審査委員となっていただきました町田章准教授，柴田美紀教授，井上永幸教授，荒見泰史教授，大嶋広美准教授，小川景子准教授にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。また，本論文の執筆にあたり，終始あたたかいご指導と激励を賜りました指導教員の町田章准教授に心から感謝の意を表します。テーマの着想から，論旨の組み立て，表現の推敲などに至るまで，町田准教授の入念なご指導がなくては，本論文の完成は全く不可能であり，ご指導下さいましたことに衷心より厚くお礼申し上げます。学術雑誌へ論文を投稿する際にも，町田准教授より多大なご助力をいただきました。

次に，博士後期課程に進学して以来，大変お世話になりました副指導教員の大嶋広美准教授，小川景子准教授に深甚なる謝意を申し上げます。両先生から示唆に富むご助言を数多くいただきました。また，吉田光演教授，盧涛教授には研究に関して多大なるご指導をいただき，深く感謝いたします。

本論文の執筆に際して感謝せねばならないのは，広島大学外国人留学生を援助する会です。奨学生として経済的な面を支援していただき，厚くお礼を申し上げます。

本論文は皆様方のご支援とご指摘があつてはじめて完成させることができましたが，皆様方のご知見やお教えを十分に反映させることができなかった点もあると存じます。本文の内容に関するすべての責任は筆者自身が負うものであります。本論文の内容について，誤り，遺漏などがございましたら，ご助言やご批判を賜れば幸いに存じます。

広島大学総合科学研究科

張曉琳